THE LIFE OF JESUS CHRIST

Prof. James Stalker, D. D.

宮崎八百吉譯

ストーカー著

東京

基督教書類會社

基督傳

須氏基督傳

[illegible]

世界の[illegible]

[illegible]の信[illegible]

一九二二、三、三

[illegible]

[illegible]

[illegible]

THE LIFE
OF
JESUS CHRIST

Prof. James Stalker, D. D.

基督傳

ストーカー著
宮崎八百吉譯

東京 基督教書類會社

B. No. 72.

小引

須氏の基督傳に貴ぶ所の者は、其の聖書の正傳を得たるに在り。其の基督學に於て、能く神の子たる彼の人格を語ることを諱まざるに在り。其の文章の極めて洗錬、簡淨なるに在り。其の紙數の寡少にして、初學の士の教科書たるに適せるに在り。余の此の書を譯するや、務めて原文に忠ならんことを欲せりといへども、然も相副はざること亦少なからざらんことを恐る。漸次改訂して竟に完備に至らんことを期するのみ。

抑も今日に於て此の基督傳を譯するものは、決して偶然に非ざるなり。試に問ふ、今日は是れ如何なる時代ぞ。余の觀る所を以てすれば、今日は是れ「末の世」なり。基督統治の千福年既に過ぎて、惡魔再たび釋されて暫く働らくの時なり。歷史上千年に亙

る「教會時代」の末尾、即ち十四世紀の中葉に於て、伊太利に勃興したる人文復興の運動は、幽囚より解き放たれたる惡魔の靈の最初の活躍に外ならざるなり。爾來智識は信仰を壓し、學問は宗教を覆し、哲學、科學、文學等、約翰の謂はゆる「蛙の如き三の汚れたる靈」は、異口同音に凡神的一元論を唱道し、善惡を混じ、物靈を均ふし、神を拒み、聖靈を拒み、基督を拒み、人を拒み、代ふるに、動物進化論の假定說を以てす。基督教者亦自ら保つこと能はず、我より其の思潮を邀へ、其の激流に混じて以て自ら其の教義を拯はんと欲す。恰も天に昇らんとして、海に投ずる者に似たり、危ひ哉。

是の時に當りて能く天啓の磐石の上に立ちて、秋毫も惑はざるものは、豪傑の士に非ずんば能くすべからざるなり。須氏蓋し之に近し。其の基督傳、保羅傳の如き、其の見の最も中正穩健なる

者なり。是れ余が基督教書類會社の請に應じて、喜んで此の書を譯したる所以なり。

敢て一言を卷端に題して、譯者の素志を讀者に通ずること此の如し。

明治四十二年十二月四日

嚴霜雪の如き書齋の曉

宮崎八百吉識す

目次

第一章　イエスの誕生、幼年及び青年……一頁
　彼の誕生……一　嬰兒イエスの周圍の群聚……五　ナザレに於ける沈默時代……一三
第二章　其の國民と時代……二七
第三章　彼の準備の最後の一幕……四〇
　彼のバプテスマ……四三　彼の試誘……四九
　彼の傳道の區分……五四
第四章　不明の年……五六
第五章　款待の年……六三
　ガリラヤ……六四　奇蹟……七一　教訓……七八
　使徒……九九　イエスの人性……一〇四

目次

第六章　反對の年……一一五
彼の傳道に對する意見の變化…一三五
第七章　終局……一四四
國民に於ける最後の破裂…一四六　死に面したるイエス…一五六　審問…一六五　磔刑…一九〇　復活及び昇天…一九九
結論……二〇四

基督傳

蘇國　ゼームス、ストーカー著
宮崎八百吉譯

第一章　イエスの誕生、幼年及び青年

彼の誕生

アウグスト、カイザル方に羅馬帝國の帝位に坐し、一たび其の指を政治機關に觸れば、其の運動をして殆ど當時の文明世界の全表に波及せしむるの力ありしかば、彼は其の權力と富有に矜り、己が廣大なる範圍の人口と租稅と簿記を纂むることを、其の嗜める事業の一となせりき。是故に彼は路加傳福音書に言へるが如く、「天下の戶籍を査ぶる詔」を發だせり。此の詔勅の本意は、蓋し戶籍調査なる者は、後日の課稅の土臺

となるべき者なれば、其の臣民の一人も漏すことあるべからずと云ふに在りしや明かなり。然て此の詔勅を蒙りたる國々の中にパレスタインと稱して、アウグスト帝の從臣ヘロデ大王の統御せる國ありしが、今回の戸籍調査は人民の現住所に於てせず、此の國の舊慣に循ひ其の十二部族の本籍地に於て行はれしかば、國内擧りて騷ぎあへりき。

遙かに傳はり來れる此のアウグスト帝の詔勅の爲に、大道に追ひ立てられたる民衆の中に、ガリラヤのナザレ村に住みゐたる賤しき夫妻の者ありき、夫は其の村の大工にして名をヨセフと稱ひ、妻は其の聘定の女にしてマリヤと呼べり。此の夫妻は己の本籍に登かん爲には、殆ど百哩の旅路を辿らざるべからざりき。其故は彼等は今は一個の平民に過ぎざりしかども、其の素姓は國王の血統に屬し、其の故郷は、此の國の遙か南の方に當れるベテレヘムとて、古の王城の地なりし故なり。皇帝の意欲は宛も見えざる手の如く、彼等を追ひて、南へ南へと退屈なる長途を急がせつ、彼等が竟にベテレヘムの岩根こゞしき阪路を攀ぢて、其の邑の門に着きたるとき、ヨセフの胸は憂悶に塞がり、マリヤの體は死ぬるばかりに疲れたりき。彼等は辛くも一の客舍に入りたれども、其の家には旅客充ち溢れぬ。これ皆彼等と同じ理由に駈られて、彼等に先ちて此處に來れる者なり。此の外には彼等を納けて宿らす家一戸もあらざりしかば、已むなく其の客舍の庭除の一隅なる、旅客の家畜の溜場を拂ひて、其の居處に充てざるを得ざりき。其の夜マリヤは此處にて其の冢子を生めり。而も己を助けて其の子を取り上ぐる婦人の手もなく、又其の子を臥さする寢臺もなかりしかば、マリヤ自ら其の子を布に裹み、これを馬槽の中に臥させぬ。

此の如きもの是れ實にイエスの誕生の現狀なりき。我が此の光景よりして、十分の感動を受けたるは、我が嘗て親く中央日耳曼の一市邑、アイスレベンの年經りたる逆旅を訪ひ、其の一室に臨んで、彼のマルチン、ルーテルが實に此の室にて生れたりと云ふ實話を聞きし其の時なりき。實や四百年の昔、アイスレベンの市日の喧嘈と、逆旅の雜沓とに、心も亂るべき夕、貧き礦夫の妻なりけるハンス、ルーテルは、偶〻所用ありて此の邑に來り、恰も處女マリヤの如く、不意の患難に驚かされて產氣附き、心配と貧窮の中に男子を生みぬ。圖らざりき後年彼の宗教改革の英雄、近世歐羅巴の創

作者なりけるマルチン、ルーテルとなりし者、即ち此の赤子なりしとは。

翌朝客舍の内外は再び喧嘈雜沓し初めぬ。これベテレヘムの住民が、各自に其の職業に趨さ、戸籍調査亦始まりたればなり。而して世界の歴史上最も大なる事件は、實に此の如き際に起りたるなり。吾人は大なる事件の發端の、何處に起りつゝあるかをば、曾て自ら知らざるなり。新なる人物の世界に入來する、其の事實に不可思議に屬す、宛も秘密函に封せられたる秘寶の如し。平民の處女、大工の新婦なりけるマリヤに、其の民族のメシヤ、(字義は受膏者)世界の救主、又神の子なりける「彼」其人の生母たる名譽を授けられしこと、――此の驚くべき秘密を知りし者は、當時唯マリヤ自身と、其の夫ヨセフありしのみ。

「彼」が此の地に生まるべきことは、古き豫言の中に豫言せられたり、曰く「ベテレヘム、エフラタよ、汝はユダの郡中にて小き者なり、然れどもイスラエルの君となる者、汝の中より我が爲に出づべし」と。彼の傲慢なる皇帝の詔勅は、此の煩悶せる夫妻を南の方へと追ひ遣れり。實に然り、然れども實は更に大なる他の手ありて、彼等を導きつゝありき。嗚呼是れ有らゆる帝者、王者、執政、議會の有らゆる意思を統率して、一切之を己の攝理の遂行に歸入せしめたまふ大能者の大御手なりけり。彼は嘗て埃及王パロの心を愎くし、波斯王クロスを奴隷として、其の足下に跪かしめ、力あるバビロン王ネブカデネザルを其の僕役となせし者なり。彼は此等に於けると均しくアウグスト帝の倨傲と野心を收りて、己の宏遠なる聖謨に役せしめ得るなり。

嬰兒イエスの周圍の群聚

イエスの人生の劇場に上りしこと、然かく卑く寂なりしにもせよ、又ベテレヘムの住民が己の中に如何なる事の起りしやを、夢にだも知らざりしにもせよ、又羅馬の皇帝が、單り羅馬國のみならず、更に鰲を書きし羅馬の旗號の翻る有らゆる國々の上に將に君臨せんとする一王の誕生を、其の詔勅を以て促がし起せしことを曾て自ら知らざりしにもせよ、また人類の歴史の潮が、其の前夜起りし一大事蹟に氣着かずして、其の翌朝猶ほ依然として尋常普通の水脈に於て跳り奔りたるにもせよ、此れ豈に

全く知る者なくして過ぎ去るべき事件ならんや。「彼」の母、**マリヤ**が方に預言者**ヨハネ**を孕める**エリサベツ**を訪ねし時、年老いたる**エリサベツ**の胎内にて其の胎兒が跳りし如く、其の生まれて新世界を齎し來れる「彼」が、始めて此の世に顯はれし時、將に過ぎ去らんとせる舊世界の諸方面の代表者の中に、如何に眞理に對ふ期待と豫兆の起れるかを見るべし。看よ看よ隱約にして且可解的なる靈動は、到る處に散在せる所の來るべき者を待望める聰明の靈に流通し、彼等を引いて嬰兒の搖籃の周圍に聚めたるを見よ、「彼」の前後を取り卷ける群衆を見よ。嗚呼是れ實に彼が後日の歷史全部の縮圖に非ずや。

始に相隣せる野よりして牧羊者來れり。蓋し此の世界の帝者、王者の耳目を遁がれし此の事件は、天上の諸王子（天使）に取りては、驚くべき吉事なりしと見え、其の見るべからざる靈體を顯現して、其の歡喜を言ひ表はし、此の大事件の意味を解き明かすに至らしめたり。然て彼等は此の事を告ぐる爲に、最も價値ある心を求めて、之を此等質樸なる牧羊者に看出したり。蓋し此等の牧羊者は其の先祖**ヤコブ**が、其の羊群を看護りし野に於て、**ボアズ**と**ルツ**と相契りたる野に於て、特に舊約中の最大預表（新約の）たる**ダビデ**が、其の青年時代を費し、自個衷心の秘密と要求とを研究して、來るべき救主の性質に就き、神の殿にて其の威儀を誇り示せる**パリサイ**者輩よりも、見る目なくして妄りに多く舊約の預言を引く所の學者輩よりも、夐に深く學びたりし其の野に於て、――此等の思出多き野に於て、冥想と祈禱の生涯を送れる者なりき。此くて天使は救主の生まれし所に彼等を導きしかば、彼等はこれに遇はんとて、其の邑に急ぎ往きぬ。彼等こそ善且つ忠なる心を有せる所の平民、將來「彼」の弟子の大部を成し、所の平民の代表者なりけり。

其の次に忠信にして聰明なる聖書研究者の代表者なる**シメオン**と**アンナ**と來りき。彼等はいづれも其の生時に在つては**メシヤ**の來臨を待ちたりし者、死後に於ては「彼」に最も忠信なる弟子の若干を遺せし者なり。其の時嬰兒**イエス**は生れて第八日に割禮を受け、斯く律法に循ひて約束に入り己の血を以て其の國民籍に己の名を署したり。

幾もなく**マリヤ**の潔淨の日滿ちしとき、兩親は殿にて其の子を主に獻げんため、べ

テレヘムよりエルサレムに上りぬ。此の主の殿に入りし者こそ、實に殿の主なりけれ。然れどもマリヤが潔淨の禮物に普通なる犧牲を献ぐる能はず、僅に貧者の禮物としたる二羽の班鳩を献げたることは、餘の參詣者よりも優りて、祭司の注目を牽きしならん。然れども茲に更に見るべき目の、浮世の虚榮と虚飾に眩まされざるありて、能く貧困に掩はれたる「彼」を見ぬけり。此の如き目を具したる者の一人が、此の老聖徒シメオンなりき、彼は祈禱の應答として、親くメシヤを見るまでは死せじとの聖約を受けたりければ、此の子即ち「彼」なりと云ふ啓示の胸の中に雷火の如く閃くや否、其の兩親と此の子に出で遭ひ、「彼」を其の腕に懷き、異邦人を照す光、其の民イスラエルの榮の來現したるを喜ぶ餘り神を讃めたり。シメオンの言未だ訖らざるに、他の證人亦之に加はれり。其の人は聖き寡婦にて、其の名をアンナと呼ぶ老女なり。彼は主の殿に住みて、祈禱と斷食を以て其の心の眼を潔め、遂に預言的靈視を得るに至れり。彼はシメオンの證據に己の其を追け加へて、神を讃めイスラエルの中にて、救贖を待ち望める人々に、此の大なる秘密を告げたり。

如上の牧羊者と、老いたる二人の聖徒とは、皆イエスの生まれし地に近かりければ、此の事件の示されたるは當然の事の如しといへども、然れども其が更に非常に遠隔なる地方に在る鋭敏なる心を感動せしことをこそ奇と謂ふべけれ。即ち東方の博士の訪ね來りし事是れなり。是れ恐くは兩親が「彼」を殿に献げし後なるべく、又兩親がベテレヘムに之を携へ歸りし後の事なるべし。兩親は博士の訪問の結果、再びナザレに返らずして、永くベテレヘムに住まんと欲したりき。然て此等の博士はマジ者中の碩學にして、ユウフラテ河の彼方の諸國中の科學、哲學、醫術、宗旨に通せし人々なりき。史家タシタス、スエドニアス（以上羅馬）並にジヨセフハス（猶太）等は此等博士の出で來りし地方には、當時猶太國に一大王の起らんとすと云ふ待望、專ら流行せしことを語る。吾人は又彼の大天文學者ケプレル（獨逸）の推歩よりして、其の頃恰も一個の光耀ける星、一時天に顯はれたりしことを知る。然れば彼の博士等は占星術の熱心なる研究者にして、天上に顯はるゝ異常の現象は、渾て地上に起るべき或る特異事件の表徵と信じたれば、必ずや此の星を注意しをりて、之を古代史家等の記述したる如上の

待望と聯結して、今や其の待望の成就せられしに非ざるかを見るべく、西の方へと導かれ來りしものならん。然れども猶ほ茲に彼等の衷に、更に深き欲求の起るありて、神の之に答へたる所の者之あらざるべからず。眞理の欲求即ち是なり。設令彼等の探索にして、知識的好奇心又は空想に起因せしものなるにもせよ、神は必ず之を啓導して完全なる眞理に到着せしむ。神の道は恒に然り。神は必ずしも不完全に對して多辯せず、反つて吾人の理解せる言語（下の占星學、錬金術、學問の復興を指す）を用ひて、吾人を教ふ。設令其の言語の神意（眞理）を傳ふること甚だ不完全なる場合に於ても、尚且神は之を用ひて完全なる眞理に啓導す。看よ看よ彼は占星學を用ひて世人を天文學に導き、錬金術を用ひて世人を化學に導き來し、更に學問の復興をして、宗教改革に先だゝしめたまひし如く、今又「彼」は眞僞迷悟相半ばせる彼等の知識を用ひて、彼等を世界の光に導きたまへるを。彼等の來訪は異邦人が、將來如何に「彼」の教義と救拯とを歡迎して、其の富有と智慧と知識を擧げて、之を「彼」の足下に捧ぐるかと云ふことの預言なりけり。

大凡此等の人々は、此の聖子を拜せんとて「彼」の臥床の周圍に聚まれり。牧羊者は其の質樸なる驚異に打たれて來り、**シメオン**と**アンナ**は、數百年來積聚したる智慧と敬信に基きたる敬畏の念を懷きて來り、博士等は豊富なる東洋的、異邦的智識の禮物を携へて來れり。然れども此等の禮拜者が、誠意に「彼」を眺めたる間に、忽ち彼等の肩の上より恐るべき禍心を藏し殺氣を帶びたる面の瞰下すありき。是れ即ち**ヘロデ**王の面なりき。此の王當時此の國の王位――**ダビデ**、**マカビー**の王位に座せりき。然れども元來彼は他國人にして賤出の簒奪者なりしかば、臣民擧りて之を憎みぬ。彼が其の王位を保ちしは、一に羅馬皇帝の寵愛に依れり。彼は固より功名心に富み、技量あり又威儀ある王なりしかども、其の腹中は諸君が東洋の暴君に必ず發見する所の酷薄狡獪、暗黒、卑劣の情にて滿てり。彼が犯さゞる罪一として之あるなかりき。看よ看よ彼は己の愛妻を殺し、己の三子を殺し、己の親戚の多數を殺し、其の王宮を血の流に漂はしめたり。彼は今其の身の年老いて其の心は不安と悔恨と、人望を失へる危懼心に惱され、日夜己の今奪ひ得たる王位を望む者あらんかと云ふ恐怖に襲はれぬ。茲、

に博士等は自然の事として、其の歩武を猶太國の首府たるエルサレムに向け、東方にて其の表號を見たる大王の生るべき地は何處なるかを、ヘロデ王に就いて問へり。此の諷示こそ彼の痛所を刺し、物なりけり。然るに彼は巧に其の猜疑心を隱し、祭司等を召してこれに問ひ、ベシヤの生るべき地はベテレヘムなることを知り得て、博士等を其の地に向はせ、其の新王の生れし家を、返りて己に告ぐべきことを命じぬ。是れ一擊もて「彼」を殺さんと望みし故なり。然るに博士等は神の啓示を受けて、ヘロデ王に返り告げず、他の途よりして己の故國に歸りしかば、ヘロデ王は己の欺かれしを知り、激しく怒りて其の兵卒をベテレヘムに遣し、其の地の二歳以下の小兒を殺して遺す所なからしめぬ。嗚呼然かして聖謨の連鎖を斷たんとするは、恰も金剛石の山岳を粉齏せんと試むるに似たるかな。「彼は劒もて巢を刺し透せり。然れども鳥は疾に飛び立てりき」。ヨセフは嬰兒を携へて埃及に往き、ヘロデ王の死するまで其の地に停まり、其の後ナザレに歸り住めり。ベテレヘムは彼の血に渴きたりし父に肖たる其の子アケラヲ（ヘロデに繼いで王位に即きし者）の配下なりしかば、此處に住むの甚だ危きを察してなり。嗚呼是の嬰兒を瞰下し、殺氣滿ちたるヘロデの面こそ、將來此の世の權力が如何に「彼」を迫害し、其の生命を地より滅し去るかと云ふことの預言なりけり。

ナザレに於ける沈默時代

聖書の歷史は、如上記載したる點までは稍滿足なりと謂ふべし。然れどもイエスが埃及より皈りてナザレに定住すると倂しく、吾人の知識は忽然として中絶し、爾後のイエスの生涯は、其の公然傳道の天職に就くに至るまで、唯一回記されたる外は、全く暗黑の中に掩はれたり。吾人は勿論「彼」の少年時代より青年時代を通じて、同じ詳細を以て其の說話の繼續せんことを切望す。近世の傳記に於ては、其の主人公の幼年時代を示せる逸話ほど趣味ある部分あることなし。是れ此の喜ぶべき縮圖と素質の中に、成人時代の性格と模型とを屢見ることを得ればなり。イエスの此の多年の間の習慣、交際、思想、感情、言語、擧動を知り得ん爲には、吾人は何物を與ふるも惜まざらんとす。

然るに其の逸事の唯一瓣の花の、深く横はる秘密園の壁の上に顯はれたるあり、其の色香の優美なる、吾人をして轉た其の出で來れる秘密園の内部を見んと欲する熱望を加へしむ。然れども其れを閉ぢて開かざること、神の旨に適ひたるなれ。何となれば神の沈默は其の發言と同等に奇しき物なればなり。

神の隱したまふ所、人の知らんと欲する情の般なる所には、人の空想の其の空間を充さんと試むるは怪むに足らざるなり。是故に初代教會の間に、不經聖書と稱する物顯はれ、正經聖書の語らざる所の事項を細に記載したりと稱せりき。此の書は盛にイエスの少年時代の言行と云ふものを記し立てたり。然れども此は偶〻人類の想像の此の如き聖なる題目に相應せざる所以を示し、其の金光燦爛たる戲畫と對照して、反りて聖書の說話の正確と眞實とを證するに足れり。不經聖書は「彼」をして泥土の鳥を造りて之を飛ばせ、其の朋友を化して子野羊となすと云ふが如き、無用無益なる怪事を行ふ者となせり。約言すれば不經聖書は取るに足らざる妄談、否反りて往々基督を瀆すが如き妄談の編輯たるに過ぎざるなり。

此の非常なる過失は、吾人を戒めて神聖なる事物に對し、敢て妄想を挿入することを避けしむ。然らば「彼」の少時に就いては、單に聖書の曰へるが如く、「彼は智慧も身材も彌益り、神と人とに益〻愛せられたり」と知るを以て足れりとすべし。是故に「彼」は普通の小兒又青年にして、吾人と均しく自然の順序を逐ひて發達したるもの、別言すれば其の體力と智力とは、胥に成長せしもの、即ち前者が健全を加ふると等しく、後者も彌〻益〻知識と能力を加へし者なり。其の始めて顯はれたる性格は、之を見たる人をして、其の善良と其の淸淨とに駭き、之れを愛せざらんと欲するも得ざらしめたり。

其れ斯の如くイエスの少時に關して妄想を放にすることは、吾人の禁ぜられし所なれども、然れども「彼」の時代の習慣、風俗、又彼の後年の言行を記述したる、此の信憑すべき材料（聖書）を利用して、「彼」の少年時代に推歸し、以て其の少年時代と、聖書の說話が中絕したる記傳の緒を再び取り上げし「彼」の壯年時代とを聯結するは、單に禁ぜられざるのみならず、反りて爲すべきの義務なりとす。其の少年なりし時、又

青年なりし時「彼」は如何なる人なりしや、斯く長き沈默の間、「彼」は如何なる家庭の感化の下に發育せしやと云ふことを、或る程度まで確實に知悉するを得るは、唯此の一方あるに依るのみ。

「彼」は如何なる種類の家庭に育ち、如何なる種類の感化を受けしや。是れ吾人の能く知る所なり。「彼」の家庭は其の國の光榮たるべき許多の家庭の其の一にして、敬虔旦聰明なる勞働社會の家庭なりき。其の首たりしヨセフは潔く賢き人なりしやう見ゆ。然れども其のイエスの後年の生涯に顯はれざる事實は、彼がイエスの青年時代に歿り、一家の責任を多分「彼」の肩に遺したるべき證據なりとは、一般の信ずる所なりとす。「彼」の母は蓋し「彼」の發達上一切の外界的感化力を、最も果斷に振ひたるや明かなり。「彼」の母が如何なる女なりしかは、其の全世界の婦人の中より擇ばれて、婦人として唯一無二の光榮を冠らされし事實に由りて推知せらる。彼女が己の大なる運命に就て朗唄し出せし頌歌は、其の敬信なる婦人、熱烈なる愛國者、詩人、又聖書の研究者、特別に其の有名なる婦人の研究者なりしことを證す。是れ其の頌歌の舊約の觀念に浸潤したるのみならず、又其のサムエルの母、ハンナの頌歌に則りたるを見ればなり。彼女の心は極めて謙遜なりしかども、尚且己の上に授けられたる名譽を十分に認むる力ありき。彼女は天主教の迷信が彩るごとく奇怪なる天女にあらず。唯極めて清淨、極めて敬虔にして、愛情に富み、氣品の高き婦人なりき。彼女の後光は此等を以て十分なりとす（天女などゝ稱するを要せずと云ふ意）。イエスは其の愛の中に人となり、熱誠もて之に報へり。

此の兩親の外、猶ほ家庭の伴侶あうき。其の兄弟並に姉妹是れなり。其の中ヤコブ、ユダの二人は、各〻己の性質を畫き出せる書翰を聖書に著せり。其の書翰の聲調の嚴烈なるより見れば、彼等が未信者なりしときの性情の、稍苛酷なりしことを推するも強ち不敬の業に非じ。詮ずる所彼等は「彼」の在世の間には、絶えて「彼」を信ぜざりき。又其のナザレに在りし間、彼等が「彼」に親密なりしとも思はれず。「彼」は恐らく孤獨の位置に在りしならん。而して「其の預言者は其の故郷、其の家の外にては尊まれざる」と曰ひし言の憤慨は、多分其の傳道に從ふ前の歳月に溯り加へしものならん。

「彼」は其の家庭に於て、然もなければ村里の會堂に附屬したる村夫子より其の教育を受けしならん。而も是れ僅に貧兒の教育たるに過ぎざりき。實に實に學者輩が恒に侮り言へりし如く、「彼」は嘗て學ばざりき。若くは吾人が恒に言へる如く、「彼」は大學出身に非ざりしなり。實に然り。然りながら知識に對ふ愛は夙に「彼」の衷に寤めたりしなり。「彼」は日々幽思妙想を味ふ快感を知れり。知識の寶庫を啓く最善の鑰として、雅量と愛情とを具有したる「彼」の前に、三大書籍ありて横はれり。聖書、人間及び自然是なり。

「彼」は如何なる熱心を以て、自己を舊約聖書の研究に獻せしかは之を知るに難からざるなり。「彼」の教訓は舊約の引證にて滿てり。これ此の舊約が常恒不斷に彼の心の食糧となり、其の靈の慰藉となりし十分なる證據なりとす。其の青年時代の研究こそ將來彼が之を利用して其の教訓を潤飾し、其の教義を辯護し、反對者の攻擊を反駁し、惡靈の誘惑を退治するに、不思議なるほど敏捷なりし唯一の秘訣なりけれ。然して「彼」の引證を檢ずれば、又「彼」は舊約を當時一般に用ひられし希臘語の譯書に由らず、希伯來語の原書に由りて講習したることを見るべし。常時希伯來語は其の母國パレスタインに於てすら、死語たりしこと、恰も今日拉丁語の伊太利に於けるが如くなり。其にも拘らず、「彼」が其の聖書を讀むに原文に據らんと欲せしこそ、「彼」に取りて自然と謂ふべけれ。今日希臘文の原書に據りて新約聖書を讀み得んが爲に、學校の教授を受けず、萬難の中に希臘語を苦學するが如き篤志者こそ、「彼」が其の會堂の卷物に就き、若しくは自ら所持するを得たらん如き寫本を以て、目を其の聖書に着くるの快味如何ばかりなりしかを察知すべけれ。「彼」が不斷思惟し、又親しく言語する所の國語はアラマイツク語なりき。此のアラマイツク語は、希伯來語と共に同一語根に屬する分派なりとす。其の斷片は「彼」の教訓の記述の中に散見す、即ち「タリタ、クミ」又「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」の如し。彼又當時希臘語を操る住民に富める「異邦人のガリラヤ」に人となりて、希臘語を學ふ便宜を有すること、恰も今日蘇格蘭高原地に生れし小兒の、英語を學ぶの機會を有するに同じきものありき。是故に「彼」は多分三個國の國語に通じたりしなるべし。其の一は世界の最も莊嚴なる宗教用語、即ち希伯來語にし

て、其の文學は「彼」の精通する所、其の二は世俗的思想を最も完全に發表する機關、即ち希臘語、こは唯「彼」が其の文藝的傑作と親みたりし證跡の新約中に見えざるのみ。其の三は普通人民の普通用語、即ち**アラマイツク**語、「彼」の說敎は實に此の語を以て、此の語を語る人民に向つて宣べられたりき。

人情の最も深く研究せらるゝは、田園社會に如くものなし。何となれば此處にては個人各自の生涯の終までを見ることを得、又悉く有らゆる隣人を知ることを得ればなり。都會に於ては人を見得ることは最と多し、然れども知り得ることは最と罕なり。村落に於ては外面的眼界は狹く、然れども內面的眼界は深し、而して上表的眼界は何物の沮害するなし。**ナザレ**の地たる、「**ナザレ**より何の善物出でんや」と云ふ諺よりして吾人の知り得るが如く、有名なる惡村なりき。**イエス**は本より己の心に罪を知らざりしかども、然れども其の生涯の事業として自ら當れる此の威るべき問題（即ち罪）に就いては、此の村に於て十分の現象を目擊したるなり。「彼」は更に其の職業の便宜によりて、人情を鑿つの機會を得たり。「彼」が**ヨセフ**の工場に大工として勞作したりしことは、疑ふべき所なし。「彼」の敎訓に驚きて、「彼は大工に非ずや」と曰ひし其の村人が、最も善く之を知れり。夫れ神、其の子を降して人間に住まはせんとするに當り、「彼」を寘くべき所として、有りと有らゆる位置よりして、獨り此の一個の勞働者たる運命を選擇したまひし事實の眞意は、極めて深く、吾人の到底窺ひ竭す所に非ざるなり。此の事や「彼」の身に印するに永遠の名譽に添へる、人間共通の勞苦を以てし、「彼」の心に銘するに民衆に對する同情同感の念を以てし、「彼」を資けて「人の中に在る所のもの」を知悉せしめぬ。實や「彼」が後に至りて、「彼は凡の事を知れば、人彼を敎ふるの要なし」と曰はれしは宜なるかな。

イエスの人となりし土地は、地球上にて最も佳美なる土地の一なりとは、旅客の吾人に語る所なり。**ナザレ**は**ゼブルン**の連山の間、鐘狀の谷底に、安然に橫はれる一部落なり。此處は正に此の連山の岩角峻しき一條の徑路に由りて聯結せられたる**エスドラエロン**の平原に垂下する所なり。人家の壁に葡萄の這へるが、幾個となく橄欖、無花果、橙樹、石榴樹の立こめる庭園の際に隱見す。野圃は分つに仙人掌の垣を以てし、

飾るに萬種萬樣の花卉を以てす。離落の背後に高さ五百尺許の丘起れり、其の頂より見たる所は、實に世界の絶景の一なりとす。即ち北に當つてはヘルモンの雪峰、及び天に朝するガリラヤの連山を仰ぎ、西に當つてはカルメルの嶺よりツロの海岸、地中海の銀波を俯し、東の方は僅々數哩の彼方に當つて、鬱茂せる圓錐狀のタボル山に面ひ、南の方は廣袤なるエスドラエロンの平原を越えて、遙にエフライムの諸山を見る。

イエスの說敎は其の如何に自然の美景の神を吸ひ、四時の變化の眺望に醉へるかを證す、「彼」が其の比喩又演說中に用ひたる美しき物象は、其の小兒の時に野徑を彷徨したりし際に、其の心鏡に寫し聚めたりしものなり。「彼」が寂なる祈禱に夜を徹さんとて恒に山中に退きたる其の後年の習慣は、既に已に此の丘に於て得來りしものなり。

「彼」が說く所の敎理は、決して一時の座興に乘じて考へ附きし物に非ず、是は恰も數年間潛かなる井に湧き溜まりたる水の、時至りて活ける泉と溢れ出でたるものなりき。

「彼」はこれを野の路、山の邊にて多年なしたる圓かなる靜思、默禱の間に鑄造りしなりけり。

茲に又猶ほ一の緊要なる感化力の記載すべきあり。「彼」は十二歲以後に於て、毎年其の兩親と共に逾越節にエルサレムに登りぬ。天幸にも其の最初の參詣の記事、吾人の爲に保存せられたり。三十年の間に黑幕の唯一回擧げられたるは、此の場合なりしなり。何人にても、其の田舍の家庭よりして、其の國の都會に出でたる最初の旅行を記憶する者は、イエスが始めて出立したる際の欣喜と感動とを解するならん。「彼」は一哩毎に歷史的、靈感的記念物を以て點綴されたる其の國を八十哩も遊行し、行々此の一大年祭に對ふ敬虔的熱情に溢れたる參詣者の隊伍と打ち混りぬ、而して其の目的地と曰へば、彼等猶太人が全幅の愛情を傾け盡くせる首府、「彼」の胸中の琴線に觸るべき事物と記念と充滿せる聖京なりき。逾越節の際に於ては、各其の言語と習慣とを異にせる約五十箇國の參詣者の、エルサレムに聚まり來るあり、大に「彼」の耳目を惹けり。「彼」又始めて古來の儀式に參列して其の無數の愛國的、神聖的記憶を喚起せられたり。然れば其の家に歸るの日來れるに當り、「彼」の心の、此の趣味ある新事物の爲に動かされゐて、過つて約束の場所と時間に其の同行と出會ふ能はざりしも怪むに足ら

ざるなり。中に就いて最も「彼」の心を奪ひしもの一箇所ありき。是れ即ち神の殿にして、當時の學者先生等の敎へつゝあるところの其の講堂、特別に其れなりき。「彼」の心中には今此等の博士に問ひて其の答辯を得んと欲する許多の疑問を懷きゐしかば、其の智識に對ふ飢渴は、玆に始めて飽くことを得る機會に遭へり。然ればこそ、既に家路に一日程出で立ちて、其の子を看出だざりし兩親が、大に心配しつゝ、「彼」を尋ね返りしとき、「彼」が神の殿に在りて、時の智者の敎訓を、熱心に聞き居たるを看出だせしなりけれ。母、**マリヤ**の咎に對へし「彼」の答は、「彼」の少年的精神を赤裸に發露せしものにして、**ナザレ**の田園に「彼」を獨占し來れる父母の心を、一時大に恢ふしたるものと謂ふべし。此の一事「彼」の用意が此かる少年時代に於て、既に凡衆に超越したることを示せり。看よ此等凡衆は人生の意義目的を、一たびも問ふことなくして、空しく人生を過ぎ去れるに非ずや。「彼」は十二歲の當時に於て、既に己は神の命じ定めたる生涯の事業に從はざるべからざること、之を遂行するが其の生存の唯一の目的なることを悟りゐたりき。彼が後年の切情は、實に此の外にあらざりしなり。嗚呼是れ萬人の切情ならざるべからざるなり。此の切情は再三再四「彼」の敎訓の中に顯はれ、最後に其の生涯を終るの際、「事終りぬ」と云ふ絕叫の一語に由りて、天地に響きわたれるなり。

然るに玆に每々問はるゝ疑問あり、曰く、**イエス**は己の**メシヤ**なることを、素より知りし者なるか、若し然らざりしものなりせば、「彼」は何日又如何にして之を知るに至りしか。其の誕生の說話を母より聞きしことに由りて暗示されしか、將た內よりの聲、「彼」に告げしか。即時に之を悟りしか、將た徐々に然りしか。「彼」が傳道の初より、然かく勇猛に遂行せしところの生涯の方案は、何時其の心に成りたるか、年と共に徐々に案出せし結果なるか、將た即時に「彼」に啓示されしものなるか。是等の疑問は基督敎の大家の胸中に橫はる宿題にして、其の答案は甚だ區々なり。我は敢て之に答ふるを欲せず。特に既に其の母に答へし「彼」の言を見れば、「彼」が此の世に於て成就すべき己の事業の何物なりやを、「彼」自ら知らざりし時ありしや否を考へ得べしとは、我自ら信ずる能はず。

爾來の「彼」のエルサレム參詣は、大に「彼」の心意の發達に影響せるものと謂はざるべからず。若し「彼」にして毎々殿の講堂に於て、ラビと問答するに於ては、彼等の名聲嘖々たる學識の、實に如何に淺薄なる者なりしかを、「彼」は直に看破したりしや必せり。「彼」が其の時代の宗教の全然腐敗し去れること、其の教理と道德と、均しく非常なる改革を要することを看破し、更に後日其の神聖なる義憤を發して、逐次に攻擊し去りし弊習と人物とを注意し初めたるは、多分此の歳次の參詣に於てなりしならん。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

如上列擧したるところ、是れイエスの性格の成熟を促したる外部の事情なりとす。此等の事情の、「彼」の發達に及ぼしたりと思はるゝ其の感化力を猶ほ皇張せんは、易々たる事なり。然れども性格は其の天質の偉大なるほど、其の周圍の事情に依賴すること少きものとす。是れ其の內住の源泉に由りて自ら養ふが故なり。其の萠芽の中に、蘊蓄されたる摸型の、己が固有の法則に順ひて發達し、外部の事情に反抗するあるが故なり。イエスをして如何なる事情の中に在らしむるも、「彼」は其の一切重要なる點に於ては、其のナザレに於て成長せし如き同一の人物となりしや必せり。

第二章　其の國民と時代

吾人は今イエスがナザレに於ける三十年間の沈默不聞の時代を經て、公なる舞臺に登らんとする時に近けり。然れば今玆に「彼」が其の事業を施さんとする國民の現狀を觀、又「彼」の品性と目的とを明白に解し置かんとす。蓋し偉人の傳記は從來未だ嘗て有らざりし一種の新勢力の世界に入り來り、而して此の新勢力が徐々に舊勢力と同化して、更に將來の一勢力を作る狀態を記載する者なり。是故に善く其の傳記を解せんと欲する者には、豫め心得べき二個の必要なる事項あり。第一は新勢力其物の性質を善く理會すること、第二は其の新勢力の同化せんとする世界の狀態を知ること是れなり。善く後者を知らざれば、前者の特質を解する能はず、又其の接けられし狀態、即ち其の都合好く歡迎せられしか、將た反對と戰ひしかを認むること能はず。イエスは

古來の有らゆる人よりも勝りて、此の斬新、且固有にして又將來の人類の歷史を變化すべき運命を有する新勢力を持ち來れり。然れども其の經過せし周圍の事情を審に解するに非ずんば、**イエス**其人は勿論、其の持ち來れる賜物（新勢力）を歷史（舊勢力）と同化せんとするが爲に、「彼」が如何なる運命に遭遇せしかを解すること能はざるなり。

舊約の末章を讀み畢りて、新約の首章に眼を着くれば、吾人は馬太傳（新約）に於ても猶ほ、馬拉基書（舊約）に於て相別れたる同一の人民と同一の事情の中に在るを自然に感せずんばあらず。然れども是は大なる誤なり。**マラキ**と**マタイ**の間に經過したりし四百年の歲月は、**パレスタイン**に大なる變化を惹起せしこと、恰も同一時間が有らゆる國家に於けるに同じ。其の人民の言語變り、其の習慣、風俗變り、其の黨派、制度變り、**マラキ**をして又起らしむるも、殆ど其の自國なることを認むる能はざるまでに百般の事物皆變れり。

第一、政治上に於て此の國民は、著き變遷を經たり。**バビロン**流竄の後に於て、此の國民は其の祭司長を推戴して、玆に一種神聖なる國家を組織せりき。然れども爾來征服者相繼いで此の國を蹂躙し、蹂躙する毎に其の制度を變へたり。其の古來世襲の王國、一時勇敢なる**マカビイ**家の爲に恢復せられ、其の自由維持の戰鬪多年の間勝敗ありしが、最後に簒奪者遂に**ダビデ**の王位に坐し、今や正に四海を併呑したる羅馬帝國の權下に屈服し、國內數箇の部分に割かれて、外來の君主、各種の制度に循ひて之を駕御せること、恰も英國人が現に印度を駕御するが如し。**ガリラア**と**ペリア**とは**イエス**の生れし時に王位に在りし**ヘロデ**の諸子なる諸小王に統監せられ、而して其の諸小王と羅馬皇帝との關係は、恰も印度の諸王の英國王に於けるが如し。獨り猶太は**スリア**に於ける羅馬領の知事に隷屬せる羅馬の有司の配下に在り、而して其の兩者の關係は、又恰も**ボンベイ**の知事の**カルカタ**の印度總督に於けるが如し。羅馬の兵隊は**エルサレム**の市街を橫行し、羅馬の軍旗は國內の諸城塞に翻り、羅馬の收稅官は到る處の市門に坐せり。唯猶太人の最高政府たる**サンヒドリム**の議會は、其の議長たる祭司長が猶政權の虛影を握れるも、實は羅馬政府の意志に隨ひて動く所の傀儡たるに

過ぎざりき。一たびは全世界を統轄するの理想を有し、古來の歴史に未だ嘗て見ざる所の熱烈なる愛國に富みし此の高慢なる國民の運命、又憫むべき哉。

第二、宗教上の變化及び其の墮落も亦均く大なるを見る。勿論其の外觀に於ては、退歩せしよりも寧ろ進歩せしが如く、其の國民は其の前代に比すれば夐かに正經の信仰を有したりき。嚮に彼等の最大危險は偶像の崇拜に在りしが、バビロン流竄の懲戒は、永久に其の傾向を規正せしかば、爾來猶太國民は其の何處に住するに拘らず、堅硬なる一神論者なりき。其のバビロンより復歸せし後、祭司の階級と職掌とを完全に復古せられ、神殿の奉仕と年々の祭儀はエルサレムにて嚴格に執行せられたり。獨り之のみに非ず、茲に最も緊要なる宗教的制度新に興りて、神の殿と其の祭司職とを其の背後に瞠若たらしめたり、其の會堂とラビと即ち是れなり。此の二者は絶えて前代に之あるを見ず。唯流竄以來舊約聖書を敬讀せんが爲に、其の存立を呼び起されし者なり。會堂は今猶太人の住める所に必ず建てられ、安息日ごとに其の民擧りて祈禱の爲に茲に聚まる。ラビ起つて勸告を爲す。是は既に死語となりし希伯來語の本文を譯し聞かする講師を要するが爲に創設せられし新制度なりとす。此くて殆ど一年一回、人民の前に舊約聖書は卒讀せられぬ。今日の神學校に類せる講堂又其の内に興され、ラビ此處にて其の子弟を教育し、聖書を講説せり。

萬事皆斯く宗教式に見ゆるにも拘らず、宗教其物に至りては憐むべき衰頽を顯はせり。外面的儀式は彌が上にも益されたれども、其の内面的精神は之と反比例に消滅し了りぬ。古代に在つては此の國民が往々卑陋、醜惡に陷ることありしにも拘らず、其の最も墮落したる時期に於いてすらも、猶ほ敬虔なる宗教家を興すに足り、而して此等の宗教家は、高く生活の理想を維持し、國民と上帝の關係を保續し、預言者の力ある聲は、清新なる眞理の源泉を保存したりき。然れども爾來四百年の間、預言者の聲復た聞ゆることなく、預言の書は殆ど偶像の如く尊ばれながら、嚮に預言者の靈の錄し、所を理會するに足る靈感者、一人も起らざるに至れり。

當時の宗教的代表者をパリサイ者と爲す、此の黨派は其の名稱の指示する如く、元來他國民に對して猶太國民を差別する有志者として起りし者なるが故に、其の主張す

る所の差別が、神聖なる方面に屬せし間、其の思想は高貴なりき。然れども此の精神的差別を維持することは頗ぶる難事に屬し、何時しか衣服、飲食、言語の如き單に外面的差別の末に墮落し了れり。然も尙且つ此のパリサイ者は、熱誠なる愛國者にして、外國の軛を受くることを痛烈に慷慨し、其の國家の獨立を恢復せんが爲には、喜んで其の生命をも棄てんことを欲せり。彼等は自餘の人種を輕蔑し、其の國民が將來大に興隆すべしてふ希望を固執し、而して長く此の希望に懸りし結果、己等は單にアブラハムの裔なるが故に上帝の特寵を受くべきものと妄信し、人格修養の肝要なることを度外視するに至れり。彼等は務めて猶太人的特色を增加せるにも拘らず、其の最特異點とも云ふべき、神を愛し人を愛することを棄てゝ、斷食、祈禱、貢納、洗滌、獻牲等の如き、多種多樣の表面的儀式を以て之に代へたり。

學者の大多數は此のパリサイ派に屬せり。此等學者は聖書の註釋者、謄寫人たりしが故に然か稱せられたり。彼等は又人民の裁判官たりき。是れ猶太の法典は聖書の中に編入せられたるを以て、法理學が神學の一科となり居たるが故なり。苟も男子たる禮拜者は、其の會堂に於て語らんと欲せば語ることを許されたりといへども、主なる註釋家は實に此等の學者なりき。彼等は聖書に對して無限の敬畏を表せしこと、凡そ其の語數と字數とを算へたるほどなりき。彼等は又舊約の教義を人民に宣傳し、其の中に錄されたる英雄豪傑の模範を講說し、預言者の教訓を弘布するに、華々しき機會を有せり。他なし其の會堂は人の案出せしものゝ中にて最も有力なる教育機關なりし故なり。然るに自ら乾燥無味なる專門家、衒學者となりし彼等は全然其の機會を誤用し此の好位置を擧げて、獨り利己的衒學の便宜に供し、麪を求めて石を投げ與へられし其の民衆を凡俗、または無學の賤民と罵れり。彼等は聖書中の最も大切なる精神的、人道的なる部分を棄てたり、彼等の中最も傑出したる輩は、主として聖書の註釋に從事し、而して其の註釋は世と共に累積し、書生は概して本文を置いて其の註釋を學習せり。且聖句の正當なる註釋は、聖句同等の權力ありと云ふことを此等學者社會の規則と爲せしかば、大家の註釋は無論正當なるものと信ぜられたり。之が爲に貴重なることと聖書と均き學者の意見、非常に浩瀚なるを致せり。稱して「長老の口碑」と云ふ者

是れなり。是に於て獨斷的註釋の弊風漸く流行し、苟も本文を引き出したる所の所說は、皆聖權を印せらるゝに至れり。**パリサイ**派の新發見に係かる新特色が制裁權を得しは、此の獨斷的手段に由れり。此等の特色は竟には個人的、家族的、社會的、公共的なる日常生活の瑣細なる規則までも制定し及ぼし、其の式目の繁多なる、之を學び盡くすに一生を費さゞるべからず。學者の學識とは實に此等の規則の記憶を稱するものにして、此の如き糟粕、是れ彼等が會堂にて人民の靈性を養ふの食糧なりける。然れば人民の良心は一々彼の十誡同等の聖權を有すとせられし此の種の無數の瑣事の爲に壓伏せられぬ。嗚呼是れ實に耐ふべからざる重荷、**ペテロ**をして己も其の先祖も負ふこと能はざる軛と叫ばしめしもの、嗚呼是れ實に畏るべき魘夢、**パウロ**の良心をして然かく久しく煩悶せしめし所のものなり。而して是より生起せし宗教上の結果は、前より數等惡かりき。蓋し儀式が道德と對等視せらるゝ時には、後者は忽ち姿を隱すこと、是れ何人も知る所の歷史上の通則に非ずや。學者と**パリサイ**者は然かく獨斷的註釋と詭辯的論議とを用ひて、最も重き道德上の義務を解き去り、儀式を增加して道德を廢棄するの方法を學べり。是に於て彼等は心陰に其の私情私慾を肆にしながら、其の面には己の潔白を誇り得る僞善者となり、同時に社會は內惡德に糜爛しながら、外巧に醜怪を覆ふ虛飾的金襴を閃かすの弊風を競ふに至れり。

茲に又之に對する他の反對黨ありき、**サドカイ**者之なり。彼等は先祖の口碑に權威を附することを拒み、聖書に返れ、聖書の外何等要する所なしと主張し、儀式を棄て、道德を尙べり。然れども彼等の反對する者は、宗教者の溫厚なる反對的精神に出でずして、單に主義的精神に基づく所の拒絕主義に出でたり。彼等は總べて懷疑的、冷評的、世俗的なる人物の團體にして、口道德を崇ぶと曰へりといへども、其の謂はゆる道德は道德の本源なる眞理の靈に照らし溫められたる道德を謂ふに非ず。彼等は固に**パリサイ**者の固苦しき規則を以て其の良心を拘束することを許さゞりき。然れども其理由單に慰藉、耽溺の生を活きんとの陋き欲望より出でしに過ぎず。彼等は實に**パリサイ**者の頑固を笑罵せり。然も己は猶太人としての特色、信仰、希望を喪ひ、自由に異邦人と混淆し、**ギリシヤ**の學問を愛好し、外國の娛樂を幕ひ、其の母國の自由の

爲に戰ふことを、無益の徒勞と思惟し、其の極端なる輩の如きは**ヘロデ**黨なる一派を組織し、**ヘロデ**王の簒奪を是認せるのみならず、更に其の諸子に阿諛、結托して、其の恩顧を得んと欲する者あるに至れり。

サドカイ者は主に富有なる上流社會に屬し、**パリサイ**者と學者等とは、上流社會の幾分か之に屬するありといへども、主として中等社會より成立す。平民及び下等社會は富者社會と全く隔絶せらる。然れども無敎育者は必らず情熱ある黨派に與するが如く、彼等も亦**パリサイ**者を喜んで之れに附和せり。此の三等の社會の下に、更に一大階級ありて存せり。是は宗敎上、社交上、他の社會と一切の關係を絶たれしものにて、稅吏、娼婦、罪人等の如き、何人も彼等の靈魂を棄てゝ顧るものなき輩より成れり。

イエスが其の感化を施さんとする所の社會の狀態は、眞に然かく憫むべき物なりき。即ち其の國民は奴隷の軛を負ひ、上流社會は利己、諂諛、懷疑に沈み、宗敎家、敎法師の輩は、徒に儀文の虛觀を矜り、自ら神の寵民なるを誇り、其の靈性は僞善と貪慾にて充たされ、人民の全體は虛僞の理想に導かれつゝあり、社會の最下層に於ては、更に無賴、無慚、何人も顧るものなき一大聚群ありけり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

嗚呼是れ神の選民なる乎、然り、其の墮落の現狀、斯く威るべきものあるにも拘らず、是れ實に**アブラハム**、**イサク**、**ヤコブ**の子孫にして、神の約束を受けて神の國の世嗣たりし者なり。此の數世紀の墮落時代の背後を顧れば、千歲に模範を垂れたる先祖、死生神意を奉行したる王者、詩人、預言者、信仰と希望に滿ちたりし時代の高く天に朝せるあり。其の前方には將に來らんとする偉人の高く立てるあり。一たび天より遣はされ、其の預言者の口に託りて發たれたる神の言は竟に空しく返ること能はざるなり。神は嘗て此の國民に告ぐるに、神自らを圓滿に彼等に示現すべきこと、之に人格の圓滿なる理想を顯示すべきこと、人類再生の事業此の者に由りて起るべきことを以てしたまへり。猶太國の歷史の大河は、曠野の沙漠の中にて一たび斷たれ、二たび預定の水路に於て迸り出でたり。時將に滿たんとして、然も其の時代の休徵は恰も人をして絶望せしむる如く見えぬ。**モーセ**以來の諸の預言者は、來るべき偉人に就

いて次の如く語らざりしか、「彼」は暗黒其の極に達し、墮落其の度に達せしときに當りて、一たび去りにし過去の光榮を恢復せんため、再び出現すべしと。蓋し極惡なる時代にも善人は尙ほ之れあり、腐敗したる猶太人の諸種の黨派の中にも、尙ほ且つ善人なくんばあらず。然れども此の如き時代に於いては、敬虔なる信者は卑しき家庭の中に遺れり。恰も現今の羅馬教會の中に、此の如き信者を求むるが如く、彼等は其の靈魂と**キリスト**の間に介在せる諸〳〵の儀式を經由して**キリスト**に到達するに當り、猶ほ其の靈的本能の指示に出でゝ眞理を撮りて虛僞を避く。其の如く**パレスタイン**の平民の中にも、猶此の種の信者は、會堂にて讀まるゝ聖書を聽聞し、又は其の家庭にて自ら聖書を誦讀し、自然に其の教師等の無限に繁雜なる註釋を棄てゝ、直接に過去の榮光、神の榮光を看破りし者なり。嗚呼是れ學者の見るを失せし所なり。

此の如き敬虔なる心が自然に其の趣味を感ずるは、特別に救濟者の出現すべき約束の上に在り。彼等は其の國民の奴隷の境遇に在ること、其の時代の降落せること、社會の內部に惡慝の充實せることを痛切に恥ぢ悲み、來るべき者の來臨を待望し、併せて國家の獨立と隆興とを來さん爲に熱禱せしなり。

學者等も亦聖書中の此の要件（救濟者の出現）を其の念頭に懸けたり。**パリサイ**者の主要なる特色の一は實に此の**メシヤ**に對ふ待望に存せり。然れども彼等は此の問題に關する預言の辭句を解するに、例の獨斷的解釋を以てし、己の肉情的想像に隨つて其の將來の國運を彩色したり。彼等が**メシヤ**を神の子とし、其の出現を以て神の國の到來として言說するは當れりといへども、彼等が其の**メシヤ**に期待する所は、其の奇跡と異常なる能力とを以て、奴隷の境遇より其の國民を救ひ出して之を興し、之に此の世の無上最大の光榮を冠せしめんことに在りき。彼等謂へらく我等は此の選民の一部なるが故に、此の神の國に在つて須らく高等の位置に充たさるべきものなりと。而して來るべき**メシヤ**其の人を迎ふる爲には、何等品性の變化を受くるを要すべきを思はざりき。神の國に入るべき精神的要素、即ち聖と義と愛とは、一切、物質的榮華の光に蔽はれて、彼等の心の認むる所とならざりしなり。

猶太國民が將に其の天命を充さんとするに當りて、其の國民の狀態は現に此の如く

なりき。是はメシヤの當面の事業をして、一倍複雜ならしむるものなり。「彼」は或は其の國民が、其の先行者たりし理想に滿たされ、其の異象に鼓吹せられて己を其の首位に戴き、己に有力なる共働を與ふべしと期せしならん。然れども事實は然らず。「彼」は其の國民の眞の理想より轉じて、其の心より描き出せる最大光榮なる現象を夢みし時に來れり。「彼」は其の國民の靈と義に熟して凡の異邦人を祝福するの天職に潔められたるを見ずして、其の當面の事業の先づ其の國民の刷新を行ひ、數世紀の墮落の爲に堆積したる偏見の反對と戰ふに在ることを見たり。若し然らずんば「彼」は容易にその國運の發展を完成し、容易に世界に對して其の靈的勝利を進展するを得たりしならん。

第三章　彼の準備の最後の一幕

同時に多數の人民が其の心に隨ひて待望したる所の「彼」は、彼等の中に在りき、然も彼等は之を悟らざりき。其の來臨を祈禱し冥想しつゝありし「彼」が、卑きナザレ村の大工の家に人となりつゝありけりとは、彼等の思ふ能はざる所なりき。然れども事實に於て然りしなり。「彼」は今其の將來の準備に從ひ、其の心は過去の預言と現在の事實が決定したるが如く、其の大業を定むるに忙しく、目は其の國の現狀を觀察し、心は人民の罪惡と屈辱に對する沈痛を懷けり。「彼」其の內に己の大業に匹當する大能の刺戟を感ぜしかば、其の慾望は漸次不可抗の情熱に亢進して、竟に己の內なる思想を發表し、其の豫定せられたる事業に着手するの已むを得ざるに至りしなり。

イエスの其の生涯の事業を遂行すべき時間は唯三年あるのみなりき。吾人にして若し凡人の三年の生活の短きこと、其の終に於て見るべき結果の小なることを思はゞ、イエスをして此の驚くべき短日月に於て、此の如き深刻不磨の印象を世界に銘せしめ、此の如き眞理と感化力の遺產を人類後世に傳へしめたる、其の品性の如何に偉大にして高貴なりしや、其の生涯の目的に對する志操の、如何に一轍にして熱心なりしやを想望せしめずんばあらず。

イエスの公人として世に出づるや、其の理想已に十分に發達し、其の品性既に十分に成就し、其の目的も亦「彼」が勇往直前して憚らざるまで、既に十分に確定しあり、其の發足點に於て足を着けし線路よりして、三年の間何等の脱離も起らざりしことは一般の許す所なり。此れ其の理由は、「彼」の世に出づるに先つ三十年の間、其の理想、品性、目的等皆既に發達の全局を通過したりし故なり。ナザレに於ける「彼」の生活は、其の外貌に於て如何にも修飾なかりし其の如く、裡面に於ても、謹嚴、莊重而して變化ある生活なりき。此の寂默不聞の裡に在りて、「彼」は將來美花を開き、妙果を結ぶべき生長發達の全過程を通過したりしものなり。「彼」の準備は長かりきと謂ふべし。何となれば「彼」の如き能力を具ふる人の三十年間の沈默的潛伏は、長しと謂はざるべからざるなり。「彼」の一大特色は、其の言語擧動に餘裕ある事なり。是れ亦ナザレに於て擧びし者なり。「彼」は茲處に其の準備の時間の終を告ぐるまで待ちるき。時に先ちて「彼」を誘ひ來し得るもの、一物も之なかりき。然り、時代の腐敗の叫の爲に震ひ起る義憤の激昂も、其の國民を善導すべき情熱の發越も、「彼」を動かす能はざりしなり。

然れども竟に「彼」が鋸を工場に投げ棄て、勞働者の被服を脱ぎ棄て、懷かしき其の家庭とナザレの里とに別を告ぐる時來れり。然れども其の準備は猶ほ未だ完からざりき。其の品性は不聞の間に完成したりといへども、「彼」の事業を開始せん爲には、猶ほ特別なる天惠に浴せざるべからざりき。其の理想や、目的や、既に「彼」が如く熟せりといへども、猶ほ「彼自身」試錬の猛火に鍛錬せられざるべからざりき。「彼」の準備の最後の二件今起れり。其のバプテスマと試誘と是れなり。

「彼」のバプテスマ

イエスのナザレの韜晦より國民の前に現はれしこと、豈に預告なくして然るべけんや。蓋し「彼」の救世の事業は、「彼」自ら之に着手するに先ちて、既に開始せられたりし者と謂ふべし。

猶太の國民は其のメシヤの聲を聞くに先ちて、今一度久しく絶えたりし預言者の聲を聞くことなりき。是の時に當りて一個の預言者ユダヤの曠野に顯はれたりてふ警報、

國中に傳はれり、其の預言者の人たるや、會堂に於て死せる思想を語る學者の如くならず、又**エルサレム**の佞辯を弄する教師の如くならず、靈感の權威を以て直に腹心より腹心に語る所の勇猛熱誠の人物なりき。彼は腹からの**ナザレ**人にして、數年間曠野に活き、寥しき死海の濱に出沒して、獨り默思を凝したりき。彼は古の豫言者の如く、身に毛衣を着て腰に革の帶を纏ひたり。其の禁慾的元氣は他の營養を須たずして、唯其の曠野に於て看出す所の蝗と野蜜を以て滿足せり。尙且彼は能く人生の情實に通じ、當時の有らゆる罪惡、宗教家の僞善、民衆の腐敗を知悉したり。彼は人の心を搜り、良心を威赫するに驚くべき能力を有し、各種の社會の罪惡を赤裸に暴はして、何等忌憚するなかりき。然れども彼が猶太全國の注意を牽きよせ、其の人民の心を刺戟せし者は此に在らずして、彼が帶びたる使命に在りき。其の使命とは約束の**メシヤ**將に出で、神の國を建てんとすと云ふ即ち是なりき。**エルサレム**の民擧りて彼の前に出で來り、**パリサイ**者は其の**メシヤ**に係はる報導を聞くを得んと渴望し、**サドカイ**者さへも一時其の昏睡の狀態より覺まされたり。數千の民郡村より群がり來りて、其の教訓を聽かんとし、諸處に散在して潛に**イスラエル**の救贖を祈り待てる者、亦此の喜ぶべき約束を聞かんとて其の許に出で會ひたり。然れども此の豫言者**ヨハネ**は猶ほ如上の使命に伴ふ他の使命を帶び來れり。此は意外なる心に意外なる感情を惹起す物なりき。即ち彼は己の聽衆に語りて猶太の民には全く**メシヤ**を迎ふる用意なきこと、其の先祖に**アブラハム**ありと云ふ唯一の事實は、決して神の國に許入さるべき特徵とするに足らざること、神の國は正義と聖潔の國なるが故に、**キリスト**の第一着手の事業は、此の性質を帶びたる者と然らざる者とを分ちて之を取捨すること、恰も農夫の唐箕が其の殼を扇ぎ棄て、葡萄園の主人が實を結ばざる樹を伐り棄つるが如しと告げたり。是故に**ヨハネ**は概して其の民に（有らゆる社會、有らゆる個人に）來るべき新時代に入るべき必須の準備として、時の猶存する間に悔改むべきことを命じ、其の內心の變化の外面的表徵として、凡て其の使命を信ずる者に**ヨルダン**河にて**バプテスマ**を施せり、人の多くは恐怖と希望に動かされて其の**バプテスマ**を受けたり。然れども其の罪惡を摘發されしを憤りて、激昂と不信を懷いて去りし者は、猶ほ之れよりも多かりき。

パリサイ者も亦其の中にありき。是れ彼が特別烈しく彼等を責めしのみならず、又其の重を置ける所の**アブラハム**の子孫たることを彼の然かく輕蔑したりし故に、重ねて彼を憤れるなり。

一日此の豫言者の聽衆の中に、**ヨハネ**が特に意を注ぎし人顯はれたり。之を見たる彼の聲、忽ち不安の感に懼きぬ。此の如きは彼が嚴烈に其の民の敎師、祭司、學者を責むるに當りて之なかりしものなり。然て說敎畢りて「彼」自らパプテスマの候補者中より出で來りしとき、**ヨハネ**退いて謂へらく、「此の人」は衆人と齊く己が施す所の悔改の洗を受くべき者に非ず、我又決して「此の人」にパプテスマを施す權利なしと。「彼」の面には木石の人をも打ちて己の不肖と罪汚とを省みしむる威嚴、淸淨、平和ありき。此れ即ち**イエス**にして、嚮に**ナザレ**の工場を去りて直に此處に來りし者なり。**ヨハネ**と**イエス**とは其の家互に親戚たり、其の生涯の關係は其の未だ生れざりし前より豫言せられたりしにも拘らず、是より先き未だ嘗て會見せしことなかりき。是は其の**ガリラヤ**と**ユダヤ**に於ける其の家庭の甚だ遠隔なりしにも歸すべかりしかども、寧ろ多くは**ヨハネ**の通世的習慣に因せしならん。然れども**ヨハネ**は今**イエス**の要求に服從して、「彼」にバプテスマを授けたり。彼は然して始めて此の不思議なる人が、其の心底に打ちこみし强大なる印象の意味を悟れり。即ち是は己其の人の先駈者として、此の**メシヤ**を認識すべきの特徵として與へられしなりけり。斯くて「彼」の祈禱的姿勢を以て水より上り來りしとき、聖靈「彼」に降臨し、神の聲、雷鳴の中に「彼」が己の愛子なることを告げたり。

ヨハネが**イエス**を見しときに受けたる此の印象こそ、「彼」が其の聖業を開始せんとする時の「彼」の風貌と、其の**ナザレ**の故鄕に於て漸次成熟したりし「彼」の品性の性質を、千言萬語にも勝りて最も善く顯はすべきものなれ。

イエスのバプテスマは決して無意義のものに非ず、此のバプテスマは他の之を受くる候補者には二重の意義あり。一は其の古き罪を脫ぎ棄つることを示し、他は其の**メシヤ**の開創せし新時代に入ることを示せり。然れども其の第一意義は**イエス**には相應せざりき、唯「彼」は其の民と己を齊しうして此の方法を取り、彼等の潔めらるゝ必要ある

を説明したるものと曰はゞ謂ふべし。然れども眞意は第二の意義に在り、即ち「彼」自らその開創者たる所の新時代に、「彼」先づ自ら此のパプテスマの門戸を經由して入りたることを示せるなり。別言すれば「彼」が**ナザレ**の家庭の職業を棄てゝ、其の特別の事業に己を獻ぐるの時至れりとの意味を、之を以て説明せしなり。

然れども此の**バプテスマ**よりも更に優りて緊要なるものは、「彼」に於ける聖靈の降臨是れなり。是は**バプテスマ**のヨハネに示す所の無意義の表現にもあらず、又空しき合圖にもあらざりしなり。此の聖靈の降臨は、「彼」をして其の聖業に適はしむる爲に此際賜はりたる特別の賜物の表彰にして、又三十年の歳月を要し、發達したる其の特有の能力の上に、新に加へられたる冠冕なりき。**イエス**の品性が徹頭徹尾聖靈の力に依れるものなることは、世人の忘却したる眞理なりとす。吾人は動もすれば「彼」に其の品性と其の神性との結合あるを見て、復た聖靈の必要なからんことを想像せんとす。實は反つて愈〻其の必要ありしを見る。其の故如何となれば、「彼」の人性(即ち品性)が其の神性の機關として働かん爲には、其の人性は此の尊とき賜物を被せられ、而して又斷えず其の賜物の力に支柱せらるべからず。吾人は又「彼」の言辭の中に見えたる智慧と恩寵や、其の人心を知る超自然の知識や、其の行ひし所の奇蹟やを、其の神性に歸するを恒とす。然れども聖書に於ては此等は皆凡て聖靈に歸せられたり。此は強ち此等の事物が其の神性に關係なしと云ふに非ず。其の人性が聖靈の潔除を受け、其の神性の機關たるに適するに因りて、此等の事物を生せしことを謂へるのみ。此の聖靈の賜物こそ、即ち彼のバプテスマを受けし際に臨みし者なれ。**イザヤ**、**エレミヤ**の如き預言者が、其の公人生涯に召さるゝに當りて、聖靈の皷吹を受けしことも、(彼等は自ら之を語らざれども)、將た又今も猶ほ傳道の聖業に從はんとする聖徒に、按手禮の際同じ特別の賜物の時ありて灌注せらるゝことあるも、之と同一理由に歸す。唯其の異なる所を曰へば、其の賜はる聖靈の量、他の者には限あるも、**イエス**に於ては其の限なかりしこと、及び其の聖靈に奇蹟の賜物の添ひけることなりき。

彼の試誘

イエスが此の新なる賜物を受けたる即時の結果は、他の聖徒の、其の事業を開始する際多少神の靈を受けし結果と、深淺の程度こそあれ、其の經驗を同じうせし者の如し。「彼」の全身は今其の事業の爲に鼓動せられ、其の之を執らんとする熱望は、今其の最高度に達し、其の思慮は之を完成すべき手段の工夫に奪はれぬ。其の準備既に多年の間に成りしにもせよ、其の全心既に久しく此の事に傾注せられ、其の經營既に明亮確定せしにもせよ、之を開始すべき時既に至り、天の號令又既に降り、之を行ふに必要なる超自然力又既に賦與せられし此の大切なる機會に當つて、種々雜多なる思想感情一時に其の心に聚會し來り、爲に獨り閑寂の地を求めて、今一度靜に其の事業の全局を回想せんと欲するは、固より自然の情なるべし。是故に「彼」は聖書に錄されたる如く、今正に「彼」に賜はりし聖靈に導かれて、急ぎヨルダンの河濱を去りて曠野に入り、四十日夜、沙漠と荒山の間を往來し、其の心は襲ひ來る思想感情の蝟集に充たされて、「彼」は食ふことをすら忘れぬ。

然り而して此の四十日夜の間、「彼」の心が驚くべき煩悶の劇場なりしとは、如何に震慄すべき事なるか。聖書は曰く、「彼」は惡魔に試みられたりと。斯くも神聖なる時（聖靈を受けたるの意）に於て、「彼」は如何にして誘はれたるか、此の消息を解せんとせば、前に述べたる猶太の國民の現狀、特に其のメシヤに對する期望の性質を再び回顧せざるべからず。彼等思へらく、メシヤ若し來らば、「彼」は驚くべき奇蹟を行ひて、以てエルサレムを首府としたる世界帝國を創立するならんと。斯くて此等世俗的光耀を以て、正義、聖潔の觀念を替てたり。彼等は神の國に就ての神の思想を全く轉倒して、精神的、道德的要素に代ふるに、物質的、政治的空想の樓閣を以てせり。今やイエスが天父の命ぜし大事に手を着けんとするに當りて、其の誘はれたる事物の趣意は、「彼」に或る程度まで此等の待望に從ふべしと謂ふに在りき。「彼」は必ずや豫見しつらん、若し然か爲さゞるに於ては、其の民忽ち絶望して、不信と激昂を懷いて己を棄てんと、然れば此の三種の試誘は、各其の形狀を異にすといへども、實は唯此の一個の思慮の變形たるに過ぎざりしのみ。其の石を變じてパンとなし、以て其の飢を滿たすべしと云ふ諷示は、其の今賦與されたる奇蹟的異能をば、神の命じたるよりも一層劣等なる

企圖を成就せんが爲に用ふべしてふ誘惑なりき。此は「彼」が後の日に於て屢遭遇する所の誘惑、即ち天の休徴を我等に示せ、我等が信ずるを得ん爲に、十字架より下りよと云へるが如き、庸衆の要求の前駈なりき。次に殿の塔より飛び下りよと云ふ諷示は、又恐くは不思議を好む俗情を滿足せしむべき誘惑なりしならん。是れ一般人民が、メシヤは必ず卒然として顯はるべし、而して其の顯はるゝや、何等かの驚くべき方法、例せば殿の絶頂よりして其の直下に聚まれる群聚の中に飛び下るが如き方法を以てすべしと信じたりしが故なり。最後に惡魔を拜して全世界の帝位を獲べしと云ふ最大の誘惑に至つては、明かに猶太人の神の國の觀念を採用して、物質的勢力を以て、宇内的王國を打ち建つべしてふ誘惑なりとす。此の誘惑は神の爲に働く傳道者が、善の進歩の遲々たるに倦むに當りて、必ず感ずる誘惑にして善良誠實なる人と雖も、往々これに陷るを免れず。即ち内より始めずして、外より始め、先づ宗教の皮殼を贏ち得て、後に之に充すに宗教の實物を以てせんとする誘惑是れなり。看よ看よ彼のマホメツトが後に宗教に歸依せしめんとする人民を、先づ劒を以て征服するに當つて、正に此の誘惑に降りたるなり。彼のゼズヰツト派が後に傳道すべき異教者に對して、先づパプテスマを施せるに當つて、正に此の誘惑に降りたるなり。

此の如き誘惑がイエスの潔き心に現はれ來りしを思へば、寒心戰慄に堪へざるなり。「彼」能く神を棄てゝ惡魔を拜することを得しや。否、否、恰も磐石に打ちかくる波浪が、其の胸より碎けて返るが如く、此等の誘惑がイエスの胸より遁れ去りしは、問ふまでもなき事なり。然れども此等の誘惑の「彼」を襲ひしは、獨り此の時に限らず、往に屢ナザレの里に於て、後に屢其の生涯の危機に於て襲ひ來れり。吾人は之に由りて知る、誘はるゝは罪にあらず、誘惑に陷るが罪なることを。且其の心愈〻清ければ、其の誘惑の尖刃を感ずること愈〻痛切なることを。是れ其の胸に闖入せんとする誘惑の力、極めて强大なるが故なり。

此の誘惑は今一時イエスを離れたりといへども、此は實際決勝的奮鬪にして、惡魔は全く打ち返へされ、其の能力の上に一大重傷を受けたり。詩人ミルトンも亦其の「得樂園」の筆を此の點に絶ちて、以て此の事實を指摘せり。イエスは今や其の生涯の

聖圖を懷いて曠野を出で立てり。此の聖圖は已に久しく其の方寸に鑄造せられ、今又正に試錬の猛火に鍛へられし者なり。「彼」の將來の生涯に於て最も顯著なるは、「彼」が此の聖圖を運行する所の決心力是れなり。他人に在つては、如何なる大業を建てたる者といへども、往々一定の計畫を有せず、唯徐々時勢の開展するに乘じて、其の進路を追ひ往くに過ぎず。彼等の企圖は、偶發の事件や、他人の勸告に變化せらる。**イエス**に在つては即ち然らず。「彼」は發初より完成したる畫策を以てし、徹頭徹尾毫末もこれより逸出するなかりき。「彼」が其の生母、其の弟子等の干渉を憤ること、恰も公敵の激しき反對を受けたるが如きは、一に唯此の理由に存せり。謂ふ所の「彼」の聖圖とは、抑も何ぞや、神の國を人の心に建つること、之を建つるに政治、軍隊の權力を以てせず、單に愛の能力と眞理の勢力を以てすること即ち是なり。

「彼」の傳道の區分

イエスの傳道は概して三年間と算せられ、而して三年毎に其の特色を異にせり。第一年は「不明の年」とも謂ふべし、是れ「彼」に屬する聖書の記錄の甚だ簡略なるが故と、「彼」の公衆に知らるゝ甚だ遲々たりし故なり。「彼」は此の年の大分を**ユダヤ**に過ごせり、第二年は「款待の年」なりき。此の一年の間に國民擧りて「彼」を識り、「彼」は日日に其の中に行動し、「彼」の名聲は普く國中に鳴り轟けり。此の間「彼」は始終**ガリラヤ**に在りき。第三年は「反對の年」なりき。此の時に及んで款待の氣運既に去り、「彼」の敵は愈〻加はり、「彼」を攻むること頑硬を極め、「彼」は竟に彼等の憤慨の犧牲に斃れぬ。「彼」は其の年の始の半を**ガリラヤ**に費し、後の半を國中の他の地方に費せりき。

此の如くにして救主の生涯の外面的梗概は、世間多數の改革家、又恩人の生涯に酷似せり。此の如き人々の生涯は、先づ世人が己の中に在る所の新人を徐々に認めんとする時期を以て始まり、次で其の人の教義、又改革案が公衆の賛成を得る時期に移り、竟に反動の時期を以て終る。此の時期に於て、彼が爲に攻擊せられたりし舊偏見と舊趣味とが、其の攻擊に對して連合し、衆民を雷同せしめ、之を煽動激發し、彼等の手を籍りて彼を殺す、此を其の終とす。慨くべきかな。

第四章　不明の年

福音書中の此の一年間の記事は極めて簡略にして、唯纔に二三の事件を含むに過ぎず。然かも猶ほ「彼」の將來の事業の目錄の一端を成せるが故に、茲に之を列擧すべし。

四十日の試誘畢りし後、**イエス**は其の煩悶苦鬪に鍛錬せられたる生涯の聖圖を懷き、今猶ほ其の胸に跳れる所の靈感の鼓吹を保ちて、曠野を出で立ち、再び**ヨルダン**の河濱に來れり。**ヨハネ**は「彼」を指摘して己が往に語りし所の其の後繼者なることを證したり。彼又特に其の高足弟子等を「彼」に紹介しければ、彼等は直ちに去りて「彼」に從へり。此等の輩の中「彼」が始めて言を接へしは多分將來「彼」の愛する弟子となりて、其の性質と生涯の眞畫を世人に傳へし其の人なりけん、其の人とは即ち使徒**ヨハネ**是なり。彼は其の福音書の首章に此の最初の面會と對話を載せ、讀む者をして**キリスト**の威嚴と清淨の、其の多感なる心に打ちたる印象の如何に鮮明なるかを想像せしむ。同

時に「彼」に吸引せられし他の青年等は、**アンデレ**、**ペテロ**、**ピリポ**、**ナタナエル**の輩なりき。彼等は皆其の舊師**ヨハネ**の訓示に由りて、其の新師に就くべき準備を爲したる者にて、設令其の日に於てこそ、後に爲し、如く、直に己の職業を舍てゝ、「彼」に從ふことを爲ざりしなれ、此の最初の面會の際に於て、皆各其の將來の生涯を決定するほどの印象を受けたりしなり。**ヨハネ**の弟子等が、一時に團體として**キリスト**に赴きたるが如きことは、嘗て之を見るべからず。唯其の高足弟子のみ然か爲し、なり。其の時或る惡戲者あり、**ヨハネ**に來りて彼の勢力の如何に**イエス**に侵蝕せられつゝあるかを指摘して、其の嫉妬心を攪起せんと力めぬ。彼等は此の偉人の偉大なる所は、主として其の謙遜に在ることを、絶えて理解せざりし者なりしかば、**ヨハネ**は之に答へて曰く、我が衰へて「彼」が盛ならんとするは、我が喜ぶ所なり。何となれば**キリスト**の其の弟子に於けるは、猶ほ新郎の新婦を娶る者の如し、我は唯其の新郎の友にして、喜ぶ所は新郎の滿足の極を見るに在りと。

イエスは其の新參の弟子を携へて**ヨハネ**の傳道區域を去り、**ガリラヤ**の**カナ**に返り、

招待を受けて或る婚禮の席に臨めり。茲に「彼」は嚮に惠まれたる奇蹟の異能を始めて顯はし、水を化して酒となせり。「彼」は此の榮光を特に其の新參の弟子に示すが爲に顯せし者にて、聖書に據れば弟子等は爾來「彼」を信じたりと曰へり。其の意彼等が「彼」の**メシヤ**なることを悟れりと謂へるに在るや明なり。「彼」又之に因りて己の職分の全然**ヨハネ**の其と趣を異にせることを示せる者と謂ふべし。其の理由如何となれば、**ヨハネ**は禁欲的隱者にして、人間の住居を遁がれて、曠野の外に其の聽衆を呼び出だせり。然れども**イエス**は反つて福音を人間の家庭に齎し入れぬ。「彼」は普通の人間生活に混じて、幸福なる變化を大小の事故に與へぬ。是は平凡なる生活の淡水を甘酒に變へたる者と謂ふべし。

此の奇蹟を行ひし後、「彼」は直に猶太に返り、**エルサレム**に逾越節を守れり。此の時「彼」は一層駭くべき事實を以て、己が平素如何に神に熱誠なるかを顯はせり。即ち殿の庭を己の市場となせる家畜の販賣者、及び錢舗を逐ひ出だして、殿を潔めたる事是なり。此等の商賈は**エルサレム**に詣で來る遠人の便利を圖ると稱して、此の冒瀆的營業を爲すを許され、彼等が他國より携へ來る能はざる所の犧牲を賣り、彼等が懷にし來れる外國錢を、殿の賽錢に用ふる猶太の貨幣と交換し與ふる者どもなりけり。然れども此の敬虔的口實を以て始めたる彼等は、終には禮拜の大なる妨害を成し、神の異邦人の爲に備へたまひし殿の祈禱場よりして、其の改宗者を斥くるに至れり。蓋し**イエス**は**エルサレム**に詣づる毎に、此の醜怪なる現狀を見て、憤慨に堪へずしてありしかば、今や例の聖靈に由れる預言的熱心を以て之を鞭ち攘ひしなりけり。而して其の不可抗的威嚴と清淨に充ちたる容貌は、嚮にバプテスマを請求せし時**ヨハネ**を惶かしめたると等しく、此等の無知群をして忌憚せしめ、「彼」を環り視る者をして、嘗て一言の下に王者や人民を沮喪せしめたりし古の預言者の風貌を認めしめたり。嗚呼是れ「彼」が當時の宗教的弊害に對ひて其の鞭を擧げたる、改革的事業の第一着手なりけるなり。

「彼」又此の節會の際に、他の諸の奇蹟を行ひしかば、其の風聲は各地よりして此の聖京に聚りし禮拜者の中に傳播せしに相違なからん。其の結果の一として、一夜「彼」の寓居を叩ける位高く心憂へる訪問者來るありき。「彼」は此の人に對ひて、其の創始

せる新しき王國の性質と、之に入るべき資格とを說き示すに甚だ奇異なる言語を以てせり。事は具して約翰傳第三章に在り。民の首領の一人が、箇樣に謙りたる心を以て「彼」に接近し來りしことは、「彼」の事業の前途多望なる預兆として見えたりき。然も「彼」が**エルサレム**にて初めて示せし**メシヤ**的能力に動かされし者は、前にも後にも獨り此の**ニコデモ**あるのみなりき。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

錄して玆に至るまで、吾人は明亮に**イエス**の最初の足跡を追尋し得、然れども「彼」の傳道の第一年の報告は、其の發端の箇樣に圓滿なるにも拘らず、忽然此の點に於て切斷せられ、爾來八箇月の間に就いて吾人の知り得る所と曰へば、唯彼が猶太に於て**バプテスマ**を施せしこと、—「其の實は**イエス**自らバプテスマを施せるに非ず、弟子これを行へるなり」——及び「其のバプテスマを施せること、**ヨハネ**よりも多かりし」ことのみに止まる。

此の如き空虛の生ぜし理由如何、又如上の記事すら、吾人は單に之を約翰傳に於てのみ發見する其の理由如何。其觀福音書は全然此の一年間の傳道を省略し、筆を**ガリラヤ**傳道の記述に起し、而して之に先つて猶太傳道の存せし事實は、單に其の略筆の中に暗示せるに過ぎず。

今之を說明するは難事に屬す、唯此の一年の事蹟の、聖書編纂の時に當りて十分知悉せられざりきと云はんこそ、恐く至當の見解ならめ。實や**イエス**が未だ公衆の耳目を惹かざりし時期の事實は、「彼」が一大人物として、國中に知られし時期の其に比して、甚だ曖昧に記憶せられしは自然の事なり。其は兎に角に、共觀福音書は「彼」の猶太に於ける消息を、「彼」の生涯の終近づくまでは、何等記する所なく、「彼」の數次せし南方訪問に就ての連絡ある記述を遺したる者は、唯使徒**ヨハネ**一人、吾人の感謝を受くべきあるのみ。

然れども此の八箇月間の消息に就ては、**ヨハネ**は少くとも知らざる能はざりし者なり。故に吾人は彼が語りし單簡なる事實を攀りて、此の間の**イエス**を、**パプテスマ**の**ヨハネ**の工を執りねしものとして解釋するの已むを得ざるを見る。「彼」は其の弟子の

手を籍りてバプテスマを施し、而もヨハネよりも多數の群衆を其の身邊に牽きたり。嗚呼是は「彼」が自己を顯はしたる如上の逾越節に於て、其の公衆に與へし印象の甚だ稀薄なりしが爲に、メシヤとして己を接くべき國民の準備、未だ毫も成りゐざりしを悟り、目下の急務は先づ準備的事業なる悔改のバプテスマを施すに在ることを感じ、隨つて其の高等なる性質を降りて、一時己をヨハネの同僚となし、者なるなきか。此の見解はヨハネの禁獄を受けたる此の年の終に當りて、「彼」が始めてガリラヤに於て公けに其のメシヤ的生涯を開始したる事實に由りて確證せらる。

然れども茲に猶一層深邃なる解釋ありて、共觀福音書記者が此の時期を語らざる理由と、並にキリストの後年のエルサレム參詣の記事を同じ記者等が省略したる理由とを暗示す。イエスは元來猶太の國民に遣はされぬ、而して其の國民の有權的代表者はエルサレムに在り。「彼」は其の國民の先祖に約束せられしメシヤ、國民の歷史の成就者なりき。「彼」は勿論廣大なる全世界の救濟の爲に來れり。然れども其の大業は順序として先づ猶太人に對しエルサレムに於て爲すべかりき。然れども此の國民は壁頭に於て既に「彼」を拒絶せしかば、「彼」は已むを得ず他の中心よりして世界的社會を建設するに至れり。此の事實が、福音書の錄されし時に明白になりしかば、三福音書記者は其の國民の本營に於ける「彼」の工を、一概に徒勞なりし者と看過し、其の全幅の注意を「彼」の傳道の全盛時期、即ち「彼」が基督教會の核仁を聖くるべき信者の侶伴を聚收する時期に集中せし者なるべし。其は兎も角もあれ、イエスの第一年の傳道の終期に於て、ユダヤの中、エルサレムの中に、將に行はれんとする震ろしき犯罪の影、已に明かに顯はれたるを見る。其は世界に顯はれたる凡の國民的犯罪の中、最も寒心すべきもの、即ち猶太人が己のメシヤを磔殺したる事實を謂ふなり。

第五章　款待の年

イエスは一年間南方ユダヤに在りし後、其の活動の區域を北方ガリラヤの地に遷せり。「彼」は此の地に於て、彼の祭司、學者社會の本據たるユダヤの人々の如く、諸種の偏

見と傲慢とに欺かれざる人々に、能く己を説明するを得べし。而して苟も其の教理と勢力とが設令權力的中心より離れたる其の國の一部分にだにも根ざゝば、「彼」は國民的認識てふ不敵の勢力を擁して、南方に歸り、一擊の下に偏見の牙城を降すを得べし。

ガリラヤ

此の十八個月間に於ける「彼」の活動の場域は極めて狹かりき。**パレスタイン**の全地すらも、其の國極めて狹隘にして、其の直徑は一百哩、恰も蘇格蘭の其よりも短く、其の幅員亦蘇國の平均幅員に及ばざること遠し。此の事を記憶し置くは甚だ肝要なり。何となれば**イエス**の運動の其の全地に普及し、諸方の民衆の「彼」の身邊に聚來せしこと此の如く迅速なりし事實は、之に因りて理解するを得、同時に又世界の文明に最も偉大なる貢献を爲したる國民は、其の眞正に隆盛なりし間、極めて狹隘なる地方に局られたりし事實を、之に因りて説明するを得るが故なり。看よ看よ羅馬は最初唯一個の市邑なりしに非ずや、**ギリシヤ**は元來蕞爾たる一小國なりしに非ずや。

ガリラヤは**パレスタイン**の四州の極北に當れり。其の直徑は六十哩、其の幅員は三十哩にして、蘇國の一州よりも小なり、其の大部分は高原より成り、其の全面には不秩序なる山塊連屬し、其の東境に於て俄然落下して**ヨルダン**河に濱み、其の中央地中海の水面を降ること五百尺の低地に於て、立琴狀の明媚なる**ガリラヤ**の海ありて湛ふ。州内の地味肥沃にして、村落市邑全面を點綴し、人口の稠密なる**ランカシイアー**州に比すべし。然れども一州の活動の中心は、幅六哩長十三哩と稱する此の湖水の水域に在りとす。其の東岸、鮮緑の叢を緯らすこと約四分の一哩の背後に、高く禿げたる丘陵あり、分つに許多の澗流を以てせり。其の西岸には緩く垂夷せる山脈ありて、其の斜面は善く耕され、能く豊穣なる收穫を産せり。山下の湖畔には橄欖、密柑、無花果等欝暢して深林を爲し、大凡熱帶地方の産物は、一として産せざるなし。湖水の北端は水面と山脈との間の地、河水に割かれて三角州を成し、溪水四時之に灌き、圓滿なる美と富厚の樂園を生せり。此の地を**ゲネサレ**の原と呼び、湖水の水域全體が、氣候赫烈なる無人境と多く異らざる今日に於てすら、其の地は猶ほ齊へる農場に掩は

れ、耕作の手好く行き届き、其の怠慢に附せられたる處は、覆ふに野薔薇、夾竹桃の密藪を以てす。主の時代には湖北の湖畔にカペナウム、ベテサイダ及びコラジンの如き主要なる市邑在りき。然れども今其の全岸には許多の小村邑相接續して、恰も蜜蜂の窠に髣髴たり。野には各種の農産物充ち、豊に生活の便宜を與へ、水には魚類繁生して、數千の漁夫を養へり。此の外埃及よりダマスコに至る公道、ピニケよりユウフラテ河に至る公道、同じく此の地を通過して、此の地を貿易の一大中心となし、漁業、運搬、快樂の用に屬する數千の舟艇湖上を去來交錯して、此の地方全體をして、活氣、繁盛の燒點たらしめぬ。

*　*　*　*

八個月以前イエスがエルサレムに於て行ひたりし奇蹟の風聞、節會に上りし參詣者の口よりして、普くガリラヤに傳はり、同時に「彼」がユダヤの地にて說敎を爲しパプテスマを施し〻こと、又民間の話柄となりて、彼等の好奇心を惹起したりしかば、ガリラヤ人はイエスが返り來るに當りて、幾分か之を接くるの準備を爲したりと謂ふも可なり。

「彼」が最初に訪ねし地は、己の故鄕ナザレなりき。或る安息日に當り「彼」は其の會堂に出席したり。然るに「彼」の名は既に說敎者として聞えたりしかば、人々「彼」に聖書を讀み、聚會に語らんことを請ひぬ。「彼」は以賽亞書の一節、メシヤの到來と其の事業とを記せし光彩ある聖文を朗讀せり、曰く「主たる神の靈我に在す、故に貧き者に福音を宣傳へん事を、我に嘗を沃ぎて任じ、心の傷める者を醫し、又囚人に釋さん事と、瞽者に見させん事を示し、又壓制らる〻者を縱ち、主の禧年を宣播めん爲に我を遣はせり」。「彼」此の本文を說明し、奴隷の解放、貧者の賑恤、病人の治醫等メシヤ時代の狀態を描寫せしかば、新に其の故鄕に歸り來りし此の靑年說敎家に始めて聽聞せし會衆の好奇心は、一變して驚異となり、會堂の習慣に從ひて稱讃を發したり。然れども忽にして反動起り、彼等互に耳語して曰ひけるは、「彼」は我等と與に働きし所の大工に非ずや、其の父母は我等と與に在るに非ずや、其の姉妹は此の里人に嫁せるに非ずやと。此く彼等イエスに對して嫉妬を起せり。是に於て「彼」は更に語を進めて、其の今

讀みたりし預言の己に於て成就したることを語れり。之を聞くと倅しく彼等は輕侮の憤慨を發し、「彼」がエルサレムに於て見せたりと言ひはやさるゝ休徵を、己等にも見せよと要求せり。然もイエス答へて、信せざる者には何等の奇蹟をも行ふ能はずと告げしかば、彼等嫉妬と憤激に乘じて、イエスに向つて突貫し、「彼」を會堂より逐ひ出して、邑の背後の嶄崖に携れ往き、「彼」若し奇蹟の力を以て自ら遁れしに非ざりせば、「彼」を其の嶄崖より突き落し、メシヤを殺すの大罪をエルサレムに代りて犯しゝなるべし。

此の時より以後「彼」の本部は既にナザレに在らざりき。「彼」は其の鄕黨父老を慕ひて、今一度此の地に返り來りしかども、其の結果前と異る所なかりき。爾來「彼」はガリラヤ海の北西岸なるカペナウムに於て其の家を成せり。此の邑は今日全く堙滅して、其の位置すら確實に知ること能はず、基督信者がキリストの生涯とカペナウムの邑とを連想すること、其の生れしベテレヘムや、其の成長せしナザレや、其の死せしエルサレムに如かざるは其の理由一に此に存せずんばあらず。然れどもキリストの生涯とカペナウムとを吾人の記憶に連鎖するは必須の事とす。何となれば「彼」の生涯中、最も肝要なる十八個月の間「彼」の傳道の本部たりし地は、即ち此のカペナウムなりしが故なり。此の邑實に「彼」の邑と稱せられ、「彼」は其の市民の一として、貢祖を納るべき要求をすら受けたり。「彼」がガリラヤ傳道の本部中心として、特に此の地を採用したるは、極めて當を得たる事なり。是れ此の地が湖水の區域の活動生活の燒點にして、其の位置は其の四境の郡村に行旅するに、極めて便利なるが故なり。其の地に起りし事件亦直に周圍の地方に傳はる利益あるが故なり。

是故にイエスはカペナウムに於てガリラヤ傳道に着手したり。數個月の間、「彼」の生活の方法は是なり、始終此の本據に在ること、此の本據より四方に傳道旅行を爲してガリラヤの諸村諸邑を訪問することなりき。「彼」は時として西の方內地に入り、時としては湖畔の諸村及び湖水の東の方なる地方に歷遊せり。湖上の舟は恒に「彼」を待ち、「彼」を乘せ、「彼」を其の到ちんと欲する土地に送れり。其のカペナウムに歸ること。時に或は唯一日なることあるべく、一週間又二週間なりしこともありしならん。

數週間にして「彼」の名聲は四方の地に鳴り亘り、湖上の舟にも陸地の家にも、「彼」

は談話の目的となり、人々は心の底より動かされて、「彼」を見んことを欲し、群を成して其の周圍に聚まり、其の數日々に增し加はり、竟に數千より數萬に上ぼりて、イエスの到る處に追隨せり。イエスの新聞廣くガリラヤの外に傳播し、民の群衆エルサレム、ユダヤ、ペリアより、更に南はイドマヤ、北はツロ、シドンの如き遠方より來れり。斯く群衆街衢に密集して、互に踐み合ふに至りしかば、イエスの市邑に足を留むる能はざること數次、或は彼等を野間に導き或は之を曠野に導き出だすの已むを得ざるに至り、擧國隅より隅まで動き、ガリラヤは凡て「彼」の周圍に熱し騷ぎぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

イエスは如何にして然かく廣大なる運動を生起せしや、是れ「彼」己のメシヤなることを宣べしに由りて然かありしや。否、此の事猶太人の心に深厚なる感動を起したるべきは無論の事なり。然れどもイエスはナザレに於てなせし如く、偶〻自己のメシヤたることを顯すことありしにもせよ、「彼」は概して云へば、寧ろ其の眞個の本質を隱したり。然らずんば卑き物質的欲望に滿ち、粗暴にして激し易きガリラヤの人民は、此の宣道を聞くと倖く、イエスを捕へて國王となし、羅馬政府に對して叛逆を企てざらんや。嗚呼是れ人心を「彼」の本來の目的より背け、反つて「彼」の首に羅馬の劒を呼び下さんとする者に非ずや、恰もユダヤに於て此の宣道を爲せば、猶太人の權力の下に其の生命を危うくするが如し。此の兩種の妨害を避くる爲に、「彼」は己を顯はすことを暫く猶豫し、先づ豫め民情を準備し、之を顯すべき正當の時期來りしとき、其の內面的、精神的眞意義を以て「彼」を受けしめ、且「彼」の性質と事業とよりして、「彼」の如何なる人なりやを推知せしむるやう努めざるべからざりき。

イエスが其の工を行ふ爲に利用して、此くも多大なる注意と熱心とを喚起せし二個の偉大なる手段は、「彼」の奇蹟と說敎となりき。

奇蹟

蓋し最も廣く人民の注意を惹起せしものは、「彼」の奇蹟なりしならん。「彼」が始めてカペナウムにて行ひし奇蹟の報道、野火の荒原を燒くが如く、全邑に傳はり、其の家

の周圍に群衆を引きよせたること、其の新規に非常特異の奇蹟を行ふ毎に、衆民の激動愈〻烈しく、其の風聞の轉た遠く傳はりたることは、聖書の記す所なりとす。例せば其の始めて癩病を醫し、時には、此はパレスタイン特有の疾病の中、最も凶惡の者なりしかば、民衆の驚嘆は其の度を知らざりき。其のナインに於て寡婦の子の死にたるを呼び生し、とき、傍觀者の上に至大の惶懼を生じ、數千の傳聞者をして、讃嘆措く能はざらしめたり。是に於て諸種の患者の苟もイエスの前に歩行し、蹣跚し至るを得る者、及び自ら至る能はずして、同情ある朋友に舁き致さるゝ者、諸方より鷹集し至りしかば、ガリラヤは一時騷擾を極めたりき。イエスの影一たび村落市邑の街巷を過ぐれば、病者、不具者の大群絡繹として其の後に從へり。時として「彼」は食する遑なきまでに多數の患者に接し、時としては其の親族の人々「彼」を狂氣せりと曰ひて、驚きあはて、「彼」を捕へんとする迄に不幸者の爲に胸を痛め、其の仁術に心を奪はれぬ。之を總ぶるにイエスの奇蹟は二種に別たる。人に對する奇蹟、自然界に對する奇蹟、即ち水を酒に化し、暴風を鎮め、パンを殖すが如き是なり。前者は後者よりも其の數實に多大なりき。即ち跛足、盲目、聾耳、癱瘋、癲病の如き惡症なる疾病を治せしが如し。「彼」が此等の疾病を醫すや、毎々其の方法を異にす。時には患者に其の手を觸れ、時には局部に泥土を塗り、時には命じて沐浴せしむ。又時ありては何等の手段をも用ひざる事あり、又時ありては遠距離の患者をすら醫せり。「彼」は此等肉體の病氣の外に、更に精神の不安を治せり。此等の精神病は當時特にパレスタインに行はれ、人々をして恐怖に耐へざらしめたり。是れ惡鬼人に憑きて或は之を無氣力ならしめ、或は之を狂暴ならしむる者と信ぜられしが故なり。イエスがガダラ人の地に赴きし際、墳墓の邊にて醫し、所の人は、此の種の患者の顯著なる實例にして、其の人が衣服を着て、健かなる心にてイエスの足下に坐れる活畫は、イエスの慈悲あり權威ある光儀の、錯亂したる精神を理むる効果の如何に偉大なるかを示す。然れどもイエスの人に對する奇蹟の中、最も不可解なる者は其の死者を蘇生せしめたる場合なりとす。其の場合は甚だ僅少なりといへども其の之を行ふ毎に、壓倒的印象を生せしことは怪むに足らざるなり。「彼」の自然に對する奇蹟も、之と侔く不可解なる種類に屬す。其の精神

病の治醫の幾分は、「彼」の權威ある性質の、惱亂せる精神に及ぼす感化力として說明するを得べし。之と等く其の肉體の治醫の幾何も、亦「彼」の威能が他の精神を通じて其の肉體に及ぼせし効果として解釋するを得べし。然れども「彼」が狂瀾怒濤の上を步行するが如き奇蹟は、到底科學的說明の企望する限に非ざるなり。

イエスは何が故に奇蹟の如き方便を用ひしや、此の疑問に對する答種々之れあり。

第一　イエスの奇蹟を行ひしは、神の「彼」を遣りし證據として、此等の休徵を賜ひし故なり。舊約の預言者の過半は、其の天職の權威として亦此の奇蹟的異能を承けたり。但新約に於て預言職を復興したりしヨハネこそ、福音書が確實に記せる如く、何等の奇蹟を行はざりけれ、預言者中最も大なる彼よりも更に大なりし**イエス**が、其の聖職を行ふに當りて、有らゆる奇蹟よりも更に大なる者を行ふべきことは、萬民の預期せし所なり。奇蹟は「彼」が其の**メシヤ**なることを宣ぶるに當りて、人の信仰に刻み附くる不可抗的主張にして、「彼」若し其の一をも行はざりしならば、聖職の休徵として奇蹟を察るの習慣を有する此の國民に、**メシヤ**として認められんと欲することの、甚だ失當なるを見るべし。

第二　キリストの奇蹟は「彼」の內に充實する神性の氾濫なりき。神「彼」の中に在り、其の人性亦無限量の聖靈に沒められたり。此の如き人物が世界に存在するに當りて、偉大なる工の「彼」より顯はれ來ることは、寧ろ甚だ當然の事なり。「彼自身」こそ實に大なる奇蹟にして、此の根本奇蹟よりして、多種多樣の奇蹟の枝朶發出せしなれ。「彼」は自然界の秩序の巨大なる妨害には非ずして、返りて自然界の秩序を富ませし、之を高からしむる爲に入り來りし新なる原素と謂ふべく、其の奇蹟は自然界の秩序を破壞する者に非ず、返りて其の調和を恢復する者と謂ふべし。是故に「彼」の奇蹟は必ず「彼」の性質の印象を有す。別言すれば「彼」の奇蹟は單に精力の發現に非ずして、聖潔と智慧と愛との發現なりき。猶太人は屢徒大なる怪事を「彼」に求めて、以て其の不思議に對する狂熱の渴を醫さんと欲しき。然れども「彼」は恒に固く之を斥け、唯信仰を益する如き奇蹟に限り行ひしのみ。「彼」は凡て己の醫し、民に向ひて信仰を命じ、不思議を求むる不信者の挑發若くは好奇心に對しては、何等答ふる所なかりき。嗚呼是れ實に**イエ**

スの奇蹟を古代の仙者や中古の聖徒の小説的奇蹟と區別する所以なりき。イエスの奇蹟は實にイエスの莊敬と慈愛の記號を有す。是れ其の奇蹟が全體「彼」の性質を發揮せし者なるが故なり。

第三　「彼」の奇蹟は又「彼」の精神的、救拯的表彰なりき。其の奇蹟全體が世界の不幸に對する勝利なりしことは、一考するまでも無し。人類は千の災害の餌食にして、外部の自然界すらも、過去の被害の記號を帶ぶ。「凡の被造物は今に至るまで共に歎き、共に苦むことあるを我儕知ればなり」。人類に肉體の疾患あるは、これ罪惡の結果なり。凡ての疾患と不幸とが、一々特別なる罪惡に還元すること能はざるにもせよ、其の幾分は然かすることを得。先祖の犯罪の結果は細に人類全體の上に配布せられて、特に吾人の目に觸れざれども、尙且世界の不幸は其の犯罪の肖像なりとす。然れば物質的罪惡と精神的罪惡とは至密なる關係を有して、相互に他を說明す。イエスが肉體の盲目を醫せしは即て其の人の靈眼を醫すことを表せしなり。其の死者を蘇生せしめしは「彼」の均しく精神界の「復活」又「生命」なることを諷示せしなり。其の癲病を潔めしは罪の

汚穢を潔めしことを示せしなり。其のパンを殖しゝは、生命のパンの說敎を爲すべき用意なりしなり。其の暴風雨を鎭めしは煩悶せる良心に平和を告げ得る保證なりしなり。

斯の如くにして「彼」の奇蹟は其のメシヤ的事業の必至的、根本的部分に屬して、實に自個を國民に知らしむる無二の手段なりき。其の治療は强き感謝の紐を以て、被療者を其の主療者に結束せり。且夫れ「彼」を異能者と信ずるの信仰は、槪して其の信者の信仰を向上せしめたり。イエスに依りて七の惡鬼より救はれし忠信なる女弟子マグダラのマリアの場合の如き實に其れなりき。

此の事業やイエスに取りては非常なる苦痛と快樂ならざるべからず。柔和にして同情に富み、如何なる場合にも頑硬に固まることなきイエスの心に取りては、種々の哀れむべき病人に接し、罪惡の恐るべき結果を見るにつけ、幾度か其の心を傷ましめしなるべし。然れども「彼」は悲んで破ることなく、補助を要する所に補助を與ふるとは「彼」の大なる愛心に適ひたりき。其の手を按きて祝福を分ち、罪の結果を滅し、一擧手の下に恢復し來る健康を見、盲目開けて謝恩の涙の迸るを見、愛する者の死より蘇へ

されしを父母、姉妹の喜び見る樣を見、其の村落市邑に入りこむとき、貧者の面に愛と歡迎の光を認むること、「彼」に如何なる喜樂を與へたりしか、「彼」は深き祝福の井より飲み、其の弟子をして又之に就いて飲ましめぬ、善を行ふ祝福是れなり。

教訓

イエスが用ひて其の工を行ひし第二の器械は說敎にして、其の緊要なることは奇蹟に優さりき。奇蹟の功は「彼」の說敎を來り聞くべく、人民を呼び聚むる警鐘に過ぎざりき。奇蹟は「彼」の幽玄なる感化力に觸れざる民衆の心を捉へ、之を引いて自然に其の感化力の範圍內に來らしむるの具に過ぎざりき。

奇蹟は蓋し最も喧傳せられしものならん、然れども「彼」の名聲を更に廣く傳へしは、此に非ずして說敎なりき。蓋し世上に能辯の力ほど人を牽引するものあるなし。詩人講釋師に心醉する野蠻人や、演說家の修辭に傾寫する希臘人や、事實を尙ぶ所の羅馬人は皆均しく能辯の力の大なるを認めたり。猶太人も亦能辯を貴び、有らゆる偉人豪傑中、其の最も敬畏する者を預言者となす。此等能辯なる眞理の發言者は、神の世々猶太人に遣りたまひし所なり。**バプテスマのヨハネ**は一の奇蹟をも行はざりしかども、聚群彼を圍繞せしは、ヨハネの聲に疾風迅雷の響あるを感ぜし故なり。**イエス**も亦彼等の預言者と認めし所、是故に其の敎訓は廣く人民の感激を惹起せり。「彼其の會堂にて語りしに、人々皆彼を讃めたり」とあるが如し。**イエス**の言を聞く者一人として驚異せざるなかりき。時としては湖畔の衆群「彼」に聞かんとて推し聚せ來り、「彼」をして已むなく舟に乘り移り、同時に民衆をして岸に半圓を作らしめ、舟の中より彼等を敎へたり。「彼」の敵人すら「未だ嘗て斯の如く言ひし人なし」とて、「彼」の能辯の證據を立てたり。**イエス**の說敎の聖書に錄し遺されし者甚だ僅少なりとはいへども、其の威力甚く吾人を感激せしめ、併せて當時「彼」の遺したりし印象の、如何に深刻なりしやを想像せしむ。聖書中の**イエス**の說敎を聚め之を印刷に附すとも、其の分量は普通の說敎の五六篇に過ぎざるべし。然も其の價値は人類に於ける文學的遺產の最も貴重なる者として、如何に之を推讃するとも可なり。「彼」の言語は其の奇蹟と均しく「彼自身」

を發表せる者にして、一言一句も「彼」の品性の偉大を帶びざる者なし。

イエスの說敎の體裁は純粹に猶太風なりき。蓋し東洋人と西洋人とは、各自心智の働く方法を異にす。西洋人の思考と言說の最も巧妙なる者は、疎通的、擴張的、推理的なるに在り。故に吾人の稱讃する所の演說は、先づ肝要なる主意を捕捉したる上、之を數個の綱目に分ち、各自之を提頭の下に配置し、更に細く部分に分ちて論じ盡し、最後に聽者の感情に訴へて其の意志を刺激し、以て實行的結果を起さしむる如く務めたる物に屬す。之に反して東洋人の心は其の注意を或る一點に留め、其の一點を周匝に圓滿に叙述し、之に關する眞理を聚綴し、竟に之を一個の燒點に歸着せしめ、更に之を銳利印刻的なる數語を以て結束す。此の如きは簡潔、直裁、宣言的なるを主とする者なり。西洋人の演說體は組織體なること、恰も環と環とを固く聯れたる連鎖の如く、東洋人の其は凝集的なること、恰も晴夜の空に暗黑なる背景より耀き出づる無數の星點の充ちたるが如し。

イエスの敎訓の體裁亦此の如し、其の全體は無數の成語句より成り、其の一個一個の最小分に於て眞理の最大塊を含蓄し、最も簡潔銳利なる造語に發表せられて、矢の如く他の心を貫く。之を讀めば一句一句心を吸ひこむこと、渦の物を吸ひこむが如く、竟に之を其の深味に奪はずんば止まざるなり。試に諸君の記憶を默檢せよ、苟も**キリスト**の言として諸君の暗誦せざるもの殆ど罕なるべし。大凡基督信者の記憶に徹ること、此の如きは決して他に見るべからざるなり。全體の意味の理解せらるゝを待たず、既に許多貴重なる格言既に心底に固着するあるを覺ゆ。

此の外に**イエス**の敎訓の體裁の特色猶ほ之あり、其の一は其の說話の實物に富むことなり。「彼」は物を假りて其の思想を述べたり。「彼」は花の彩色、鳥の生活、木の發育、四時の變遷等の如き、己の周圍の自然界に對して、同情に富む銳利なる觀察家にして、又均しく宗敎、商業、家庭の如き諸方面に亘る人生生活に對して、機敏なる觀察家なりき。其の結果として「彼」は其の思想を自然界の景象に具體せしめずして語ること能はざりき。「彼」の敎訓は此の如き引證にて活かされ、十分の彩色、生動、變化を具したり。「彼」の說敎には何等抽象的談義あるなく、談義は凡て活畫に化されぬ。是

故に吾人は「彼」の教訓の中に、其の地方の光景と、其の時代の生活の幟畫を見るを得、即ち其の首を野中に浮べたる所の優美なる花百合、牧夫の後に續き至る所の羊群、廣き又窄き市門、深夜に燈を執つて婚禮の隊伍を待つ所の處女群、殿に詣りて與に禱る所の傲慢なる**パリサイ**人と謙遜なる稅吏、其の舘に坐りて樂しむ所の富者と其の富者の門に置かれ、犬に其の腫物を嘗めらるゝ所の貧者、其の他其の時代の內部の瑣細なる生活を暴はす所の千百の畫幅等、是等は歷史の概して一筆に掃き去る所のものなり。

然り而して**イエス**の說教體の最も顯著なる特色は、其の豊に比喩を用ひたるに在りとす。此の比喩は前に擧げたる二特色――直截なる語法と實物を適用する文體の結合せる者にして、「彼」は尋常生活の事物を取りて、巧に之を精金美玉と化し、其の共通點に乘じて、以て一等高き精神的方面の眞理を彰す手段を有せり。此の如きは元來猶太人の眞理を說明する慣用手段なるが、**イエス**は更に之に最も豊富圓滿なる發達を寄與せしものなり。聖書に記されたる「彼」の教訓の約三分の一は比喩より成れり。此の事實は比喩の如何に記憶に留まる物なるかを證す、之と均く吾人が或る說教を聽きし後、數年を經て猶ほ心に存せるものは、其の說教中の他の事項よりも明かに其の說明に資せられし比喩なるに非ずや。實や聖書ありて以來、**イエス**の比喩は世々の記憶を通じて今日は傳はれり。彼の放蕩息子の比喩、種播く者の比喩、善良なる**サマリア**人の比喩――、此等は猶ほ他の多數の比喩と與に、千萬の心に懸かれる畫幅に非ずや。

ホーマーの如き、**ヴージル**の如き、**ダンテ**の如き、古來の詩聖の傑作中に於て、如何なる文辭が能く「彼」の說教の如く廣く人心に染着して、不滅の眞理なることを自證し得る者ありや。「彼」は嘗て其の說明を遠きに求めず、名人の畫師が白墨燒屑の一片を取りて、笑ふべく、泣くべく、驚くべき顏面を畫くが如く、**イエス**も亦身邊の尋常普通の物と事實、即ち古き衣に新しき布を彌縫すること、古き革囊の破裂すること、市場にて婚禮と葬式の眞似を爲る小兒、暴風雨に倒るゝ家屋などを取り來りて、之を圓滿なる繪畫に化し、これを以て不滅の眞理を世界に送る車輪となせり。民衆の「彼」に從ふを怪む勿かれ、如何に無教育の人といへども、能く此の種の繪畫を見て之を樂み、此の如き**イエス**の教訓を生涯の財寶として所持するを得、唯其の淸澄なる深淵に徹底

する爲にこそ、數百年間の思想を要すれ。此の如く簡單にして而も此の如く深遠なる言語、此の如く快活にして而も此の如く眞實なる教訓、他に其の比を見ざりしなり。

イエスの教說の體裁實に此の如し、而して更に**イエス**の說教者たる品質は、其の聽者の批評に由りて今日に傳はり、聖書に存する所の說教中に明白に顯れたり。

其の品質の最も主要なる物は、其の權威ある事なりき。「人々其の教を駭きあへり、そは學者の如くならず、權威を有てる人の如く教へたまへばなり」とあるが如し。始めて「彼」の聽衆の心に喚起したる者は、「彼」の言說と、彼等が其の會堂にて聽き慣れし學者の說教の比較なりとす。學者の說教は乾燥なる神學の死骸の說明に外ならず、如何なる時代にも宗教の代りに此の者の流行するこそ嘆しけれ。然れば彼等學者輩は、其の手中に在る聖書其の物、己の言說に活ける權威を與ふべき聖書其の物を解釋するに非ずして、徒に註釋者の意見を傳ふるに過ぎざりき、又若し或る大家の權威の後援あるに非ずんば、何等の意見をも提出することを憚りたり。彼等は正義と慈悲、愛と神の如き大問題を論せずして、單に佩經の幅、祈禱の姿勢、斷食の期限、安息日に歩行し得る距離と云ふが如き事に就いて教を爲すに過ぎざりき。蓋し其の時代の宗教とは實際此の如き者なりしが故なり。當時行はれし說教の類を、近世史中に求めんとせば、宗教改革時代に返るに如くはなし。**ノックス**の傳記者が、吾人に傳ふる所に據れば、其の時代に於ける僧侶の說教なる物の無意義なる、實に憫笑に堪へざるものありき。或る宗派の開山の事を述ぶる昔物語、其の人の行ひし奇蹟、其の人の惡魔との決戰、其の謹愼、斷食、鞭韃、聖水、聖油、十字號、禁厭の功德、恐るべき淨罪獄、聖徒の中保に據りて此の淨罪獄より救はれたる人の員數、及び拙劣なる諧謔、坐談、爐邊の笑罵等、此等の物こそ說教者の好話柄にして、聖書の純粹、健全、崇高なる教理の代に用ひられし者なりけれ。三百五十年以前、恐くは蘇格蘭人が天主教の僧侶**ウヰシヤート**の說教と、改革者**ノックス**の其れとを比較したる結果を見ば、略**イエス**の說教が其の時代に與へし功果を解するを得べきか。**イエス**は先輩の權威、解釋の流派に就いて何等關知する所なし。唯宇宙の物體を見て之を如實に語る人のごとく、如實に神の言を語りぬ。「彼」は神の事、人の事を語るに、何等の待つ所なかりき、「彼」自ら十分之を知れ

ばなり。「彼」は已むを得ざる天職の感念に奪はれ、衷心の誠實を其の作止語默に發はしぬ。「彼」は己の神より遣られし者なるを知り、其の語る所の言は己のにあらず、神の言なることを知れり。「彼」は己の言を輕んずる者に、審判の日に於て、彼等は**ヨナ**と**ソロモン**の言を聞いて悔改めし**ニネベ**人と**シバ**の女王の爲に審かるべきことを語るを遲疑せざりき。是れ彼等が古代の預言者、王者よりも大なる者の言を聞いて悔改めざるが故なり。「彼」は猶ほ彼等に告ぐるに、彼等の未來の吉凶禍福は、一に「彼」の負へる使命を接くると斥くるとに在ることを以てせり。其の聽者をして震慴せしめたるは、此の誠實、莊嚴にして且權威ある調子、然らしめたるなりけり。

民衆の「彼」に認めし他の品質は、其の大膽是なりき。「見よ彼は憚らずして語れり」とあるが如し。「彼」は本と無教育の人にして、**エルサレム**の學校を卒業したるにも非ず、又他の此の世の權威の准允を受けしにも非ざりしが故に、大膽は前に舉げし權威よりも、一層驚異すべき品質なりしなり。然れども此れも亦其の權威の如く、同一の出處より來れり。臆病は必ずや自覺より起る。說敎者にして其の聽衆を畏縮し、識者碩學を畏縮する者は、自個を思ひ、自個の說敎の如何に批評せらるゝやを思へばなり。然れども自個の天職に駈らるゝ聖徒は必ず自個を忘る。凡の聽衆も亦彼と同化す。彼は唯己の告げざるべからざる所の使命をのみ是れ慮る。**イエス**は忌憚なく不滅の靈的眞理に面し、眞理の魔力「彼」を奪へり。眞理の威嚴の前には、一切人類の差別滅え、「彼」の前には貴賤上下均しく皆人たるのみ。「彼」は其の天職の洪水に浮びつゝ、「彼」の前に起り來る事物、一一として「彼」を阻害し危疑せしめ得る者なし。「彼」は恒に時代の流弊と思想を攻擊するに當りて、己の甚だ大膽なるを看出せり。「彼」を以て徹頭徹尾柔和謙遜の人と思はゞ是より大なる誤解あらず。「彼」の說敎の中にて其の敵に對する憤慨の語氣より顯著なるはなし。「彼」の時代は未だ嘗て有らざる所の虛僞の時代にして、虛僞が一切の高位を占め、虛僞が社交生活の中に己を飾り、學者の椅子を占め、而して又宗敎上の萬事を論議せり。僞善は己の僞善たることを心付かざるまでに一般の風習となれり。人民の思想は全く墮落して方向を誤れり。此の一切の不義に對ふ「彼」の義憤の意氣、其の言語に貫徹せるは、何人も能く看破する所なり。此の義憤は**ナザレ**の少

年時代の觀察に萠芽し、年と共に成熟せし所の物なり。「彼」は人の尊ぶ者を忌憚なく斷言して、神の前に憎むべき者となせり。古來の演說史中、衆人の尊崇せる人物――學者、パリサイ者、祭司、レビ人――に對して挑戰的輕侮を加へ、之をして顏色なからしめし者、未だ嘗て之あること無かりき。

第三に其の聽衆の感せし物は威力なりき。「其の言に力ありき」とある是なり。是れ即ち聖靈を灌がれたる結果にして、此の物なくんば如何に莊嚴なる眞理も、人耳に入らずして地に委ねるに過ぎざるなり。「彼」は量なく眞理の靈に充たされ、返つて眞理に奪はれたり。眞理は「彼」の胸憶より溢れ、「彼」は之を己の腹より他の腹に注入す。「彼」は單に量なく灌がれたる靈を有せるのみならず、又能く之を他に分賦するを得たり。看よ靈は「彼」の言と與に其の聽衆の心を捉へ、其の心情に充たすに熱誠を以てせしに非ずや。

「彼」の說敎の中に見はれたる第四の品質は、蓋し最も卓出したるもの、即ち恩寵是れなり。「彼等其の口より出づる恩寵の言を駭く」とあるが如し。「彼」の說敎は權威と大膽と、時代攻擊の義憤の語氣に充てりといへども、猶ほ恩寵と愛の光普く其の全體の上に輝けり。此處こそ特別に「彼」の特性の自ら語る所なりけれ。愛の權化たりし所の「彼」にして、如何でか其の內に住む所の天火の光と熱とを、其の敎訓の中に放散することを禁ずるを得んや。時の學者は頑硬、高慢、冷酷なりき。彼等は富者に阿諛し、識者を稱讃す。然も其の聽者たる民衆に就いては、「律法を知らざる此の民こそ詛ふべけれ」と言へり。然れどもイエスに在りては如何なる靈魂も無限に貴とからざるなし。如何に賤き衣裳の裡、如何に卑き社會の下に隱るゝに拘らず、眞珠は即ち眞珠なり。如何なる瓦礫の中に在り、如何なる罪の汚染に葬らるゝに拘らず、「彼」は片時も之を見棄ることなし。是故に「彼」は貴賤貧富の聽衆に平等に其の敎を說けり。其の路加傳第十五章に於ける放蕩息子の比喩こそ、神の愛其の物が、此の神人の心底より自ら流露せし者なりけれ。

此の如きもの是れ實に說敎者としてのイエスの品質の幾分なりけり。余は更に今一個の其を擧げんとす。是れやがて自餘一切の品質を包藏する者と謂ふべく、又恐くは說

教の品質中最も貴重なる者と謂ふべし。即ち人を階級や、教育に隨ひて分たず、人を人と視て平等に教訓せしこと是れなり。富有、位階、教育の如き、人を分類する所の差別は、唯表面上の事に屬す。其の平等なる所の要素、即ち廣汎なる常識、性情の慾望、良心の本能等、是れ實に根本義に屬す。是等の要素が萬人に同量なりと云ふには非ず。其の淺深厚薄の差等あるべきは無論の事なり。然れども此等の要素の人に於けるは、他の一切の事物に勝りて深き者なり。此の要素に向つて陳述する者は、其の聽者の衷なる最も深き者に向つて訴ふる者なり。此の如き人は萬人に均く理解せらる。聽者各己の分を受け、淺薄なる心も其の滿足を得、深厚なる心も其の滿足を取る。同一なる饗應に對して各同一なる滿足を得、イエスの教訓の二千年の昔も今も、均しく新鮮を感ずる其の理由實に此の如し。イエスの教訓は世々の人の爲に存し、而も平等に世々の爲に存せり。イエスの教訓の今日英國人の、若くは支那人の最も深き心性に訴ふること、其の始めてパレスタイン人の其に訴へたりしと、何等異る所なきなり。

今や吾人はイエスの教訓の如何なる事項より成れるかを問ふべき時期に到着せり。

吾人は自らイエスに期するに、今日吾人が「基督教問答」、若くは「信仰の告白」などの標本に由りて熟知する所の教理の系統を解説することを以てす。然れども事實は甚だこれと異る。「彼」は何等の組織、系統を用ひざりき。其の教訓中に發見せらるゝ萬殊の思想と、其の未だ述ぶるに及ばざりし其と、彼の心中にありて圓滿なる眞理の世界を成せるを、吾人は固より疑ふこと能はず。然れども此の如き系統組織は、一も其の教訓中に存することなし。「彼」は嘗て三位一體、預定、有効的召命などいへる、神學的熟語を用ひしことなし。唯此等の用語を冠すべき眞理の、其の教理の底に横はれるあるのみ。「彼」は唯活ける言語を用ひて語り、其の説教をば人間の良心と時代の思潮を打つ所の肝要なる二三點に集中したるのみ。

イエスの説教の中心思想にして、又最も普通なる熟語は「神の國」なりき。「神の國は（何々に）似たり」と云ふ比喩談の、如何に多數なるかを想ひ起せ。「彼」は曰く「我亦他の諸邑にも神の國を宣べざるべからず」と。「彼」の説教の事項を特別するものは實に此の「神の國」てふ題目なりとす。「彼」又「神の國を宣ぶる爲に」、同じく其の使徒を派したり

と記さる。此の熟語は「彼」自身の創案にあらず。過去より傳はり來れる歴史的遺物にして、其の同世の人々の普く稱道する所なり。**バプテスマのヨハネ**亦自由に此の語を用ひたり。其の使命の主意、「神の國は近けり」と云ふに在りしが故なり。

神の國の意義如何、こは預言者の預言し、聖徒の待ち望める新時代を謂へり。**イエス**は神の國既に來れることを語り、己既に之を持ち來れることを宣べたり。待望の時既に滿てり。「彼」は其の同世の人々に告げて曰く、多の預言者、義人は汝等が見し者を見んと欲したるが見ることを得ざりきと。「彼」は此の新時代に入る特權と光榮の洪大なること、神の國の最小者も**バプテスマのヨハネ**よりは大なることを語れり。**ヨハネ**は唯舊時代の代表者の最も大なる者なりしに過ぎず。

若し彼等同世の人々にして神の國の實際到來せることを認めしならんには、**イエス**の宣べし福音は、現に彼等の聞かんと望みし其の神の國の外なる物には非ざりしなり。然れども彼等は徒眴はして相問ふらく、「彼」が持ち來たれりと云ふ新時代は何處に在りやと。**イエス**と彼等とは茲に全く反對せり。**イエス**は「神の國」なる熟語の中、「神の」なる首の二字に重を置けるに、彼等は「國」なる末尾の一字に重を置けり。彼等は華麗なる具體的形狀に顯はるべき新時代を期待したり。此の國に於ても主宰者たる者は無論神なりき。然れども其の顯はるゝ方法は軍隊の勢力を以てし、宇宙帝國として、現世的莊麗を極めたる者ならざるべからず。**イエス**は愛する心と、服ふ意思の上に臨む神の國の新時代を看たり。彼等はこれを外部に待望せしに、「彼」は曰く、「神の國は汝等の衷に在り」と。彼等は物質上の光榮と幸福を享くべき時期を待望し、「彼」は新時代の光榮と幸福とを品性の上に置けり。是故に「彼」は彼の山上の說教に於て、劈頭其の新時代に關する大宣言を啓くに、九個祝福の連結を以てせり。然れども其の祝福は全然品性に屬する者なりき。而して其の品性の種類は、當時の謂はゆる品性、光榮と幸福とを來すべきものとして見らるゝ品性、即ち高慢なる**パリサイ**者、富有なる**サドカイ**者、若くは博識なる學者輩の品性と大に異れり。「彼」は曰く、心の貧さ者、悲む者、柔和なる者、飢渴く如く義を慕ふ者、哀矜ある者、心の清き者、和平を行ふ者、義さことの爲に迫害らるゝ者は福なりと。

「彼」の説教の大主意は、神の國の此の意義を説き、其の民の品性、天父の愛と交際とを受くべき彼等の幸福、及び來世の光榮に入るべき彼等の希望とを示すに在りき。「彼」は此の神の國の福音と、其の時代の儀式的宗教の精神缺乏し、儀式の墨守を以て活ける品性に代へたる者とを對照して、其の差別を彼等に見めせり。「彼」は有らゆる階級の人民を其の國に招きたり。即ち「彼」は富者を招きて、其の富者とラザロの比喩を以てせしが如く、彼等が富有の中に其の幸福を求むるの徒勞と危險とを示し、又貧者を招きて彼等に品格の感念を與へ、眞の富有は品性にあることを説くに、慈愛溢るゝ言辭を以てし、彼等にして苟も神の國を求めなば、天空の鳥をも養ひ、野中の百合をも裝ふ天の父は、彼等を乏しからしむること無きことを保證したり。

然れども其の教訓の中心と神髄とは、即ち「彼自身」是れなりき。「彼」は己の衷に新時代を藏有せりき。「彼」は唯之を宣傳せしのみならず、更に之を創造したり。人をして神の國の臣民となりて、其の國の特權を分有せしむる新しき資格は、獨り「彼」自身より得べかりき。是故に「彼」の説教に次ぐ實際的告示は、「彼」に來り、「彼」に學び、「彼」に從ふべき命令なりき。「凡て疲れたる者、また重荷を負へる者は我に來れ」と云ふ、是れ「彼」の一切の説教の本音にして、最深、最終の福音なりとす。

茲にイエスの説教を讀む者に、如何にも奇怪に見ゆるものあり、當時のパウロの書翰に示されたるが如き、若くは今日最も忠信にして又進歩せる基督教者の心に懷かるゝが如き、基督教々理中の最大特色とも云ふべきものゝ二三は、「彼」の説教中に在つて甚だ不要なる位置を充たすことを認めざる能はざると是なり。中に就いても罪人の神に和解せらる道、罪赦されたる靈性の、キリストに肖、神に喜ばるゝが如き品性を、漸次に造り上ぐるの道に就いての福音的大教理に關して、特に然りとす。イエスの教訓中に、如上の教理を含蓄せる言辭甚だ罕なりてふ反對説は、如何やうにも皇張することを得べし。然れども事實に徵すれば此の大使徒の獨得の教理は、一としてイエスの教訓に其の萠芽を發見せざるものあるなし。尚且パウロの特別なる教理と、基督教の純粹なる要素とを對照して、其の色彩の相違を主張するもの少なからず。然れども其の相違せる色彩を一層深く説明するときは、全く之と反對したる結論を生ずべし。

看よ看よ**イエス**は單純なる教師には非ざりき。其の品性は其の教訓よりも偉大なり。其の事業も亦然かありき。其の事業の主要なる部分は其の十字架の死によりて世の罪を贖ふに在りき。然れども「彼」に密邇せる弟子等は、「彼」が死することを嘗て信せず。「彼」の實際死せし迄は、此の宏遠なる意義を説き示すことは不可能の事に屬せり。**パウロ**の最も特別なる教理とは、やがて單に次の二大事實の意味を解釋せしに過ぎざりき。即ち**イエス**の死と、贖罪主の復活に由る聖靈の天職と是れなり。此等の二大事實が**イエス**自身の言語に由りて十分に説明さるゝことを得ざるは當然の事なり。是れ猶ほ**イエス**未だ死せず、聖靈未だ降らざりしが故なり。然れども此等の事項に關して、靈感的解釋を壓伏せんとするは、福音より光を消し、**キリスト**より光榮を奪ふ者と謂ふべし。

イエスの聽衆は其の數に於ても質に於ても、時に隨つて非常に變はれり。大衆「彼」に聽きしこと頻繁なりき。「彼」は山上に於て海濱に於て、公道に於て、會堂に於て、殿の庭に於て、到る處にて彼等に説きたり。然れども「彼」は一個人の如何に賤き者といへども、之と語ることを最も好みき。彼は恒に之を爲すの機會を捉へたり。「彼」は疲勞に苦める際にも拘らず、**ヤコブ**の井の傍にて、**サマリア**の婦と語れり。「彼」は唯一人訪ひ來れる**ニコデモ**と語れり。彼は**マリア**を其の家に就いて教へたり。此の如き個人的交際の場合の、福音書に記されたるもの十九回ありと稱せらる。此等の交際は其の弟子等に忘るべからざる模範を遺せり。是れ恐くは有らゆる教訓の方便中、最も有効の物なるべし。是れ其の熱誠の眞證たるが故なり。熱心を以て數千の公衆に對して説教する人は、單に演説家たるに過ぎず。然れども直接に個人に對して、其の靈魂の幸福を得んが爲に語る機會を求むる人は、其の心に燃え騰る天の靈火を持たざるべからざりき。

「彼」の聽衆は屢次其の弟子の範圍に限られたることあり。これ「彼」の説教は自ら其の聽衆を分類すればなりき。「彼」は播種、莠草、小麥、婚筵等の如き比喩に依りて、「彼」自ら種々の社會に對する説教の功果を、最も巧に寫し出せり。其の説教を全く斥くる者あり。其の心に入れずして唯驚いて聞く者あり。一時之に感激して又直に其の舊趣味に返る者あり。嗚呼神の子自ら説教したまふにすら、之を聽いて救はるゝ者の如何に僅少なるかを思へば、實に寒心に耐へざるものあるに非ずや。聽いて救はれた

る者は、イエスの周圍に聚りて弟子の團體を成せり。彼等は常に「彼」に隨ひ、其の說敎を聞き、「彼」又屢次彼等のみに向つて語れり。此の如き者五百人あり、「彼」復活せし後、彼等にガリラヤにて顯れたり。マグダラのマリア、スサンナ、其の富を以てイエスに事へしヘロデの家令の妻ヨハンナの如き婦人亦其の中に在りき。「彼」は此等の弟子に向つては、群集に加ふるよりも一層完全なる敎訓を加へ、其の公開說敎中に曖昧なりし事物を、私室に於て細に彼等に說明せり。「彼」は再三左の異樣なる言を爲したり。曰く民衆は聞けども悟らざるが故に、之に語るに比喩を以てすと。是れ其の意、眞理に對して眞誠の趣味を有せざる者は、徒だ美麗なる外殼を得て歸るのみ、然れども彼の曖昧こそは、更に一層の研究心を喚起する爲に設けられたれ。恰も覆面に隱れし半面美人の、愈之を見んとの熱心を牽き着くるが如しと謂ふに外ならざらん。然れば猶ほ深く聞くを得んと心熱して來る者に、「彼」は喜んで世の造より隱れたる奧義を明かせり。此等の人々は全體としての國民が、メシヤの世界的勢力の媒介たるに足らざることを自白せし時に當りて、獨り其の精神界の核仁となり、高く國境、國體、階級等、一切の人類的差別の上に引き擧げられ、彼等に依りてキリストの精神と敎理が、猶太を離れて世界に撒布せられ、維持せらるべくありしなり。

使徒

使徒の撰定はイエスの奇蹟と敎訓と並立して、「彼」が其の事業を作し、第三手段に數ふるを得べし。十二使徒として選ばれし人々は、最初は唯普通の弟子として他の多くと異なる所なかりき。最初の一年間、「彼」の傳道に追隨したりし者は、概して皆此の普通の弟子たる位置に在りしは當然の事なり。然るに「彼」のガラリヤ傳道（第二年）の發初に當り、恒に「彼」に附隨したりし十二人の爲に、第二の位置開かれたり。他なし、イエスは彼等に其の職業を舍て、己に從ふべき事を命じ、爾來數週間ならずして、更に彼等を最も己に接近せる第三の位置に進めたり、彼等を立て、使徒と爲し、事是なり。

イエスの事業が愈〻膨脹して、愈〻緊急を加へ來り、一身之に普及する能はざるに到りしかば、「彼」は謂はゝ其の助手を立て、己を增すの方法を取れり。「彼」は此等の使

徒に委ぬるに、其の教理の要領を民に教ふべきことを以てし、彼等に授くるに、奇蹟を行ふ權能を以てせりき。此の方法に因りて、「彼」の訪ふ能はざる諸邑も福音を聞き、「彼」に昇き到されて觸はること能はざる多數の患者も醫されたり。然れども「彼」が使徒を選立したる目的は、將來の事實の指摘すべきが如く、猶ほ一層宏遠なる者なりき。「彼」の事業は全時代を貫き、全世界に及ぶべき者なれば、其の一生涯に於て之を成就する能はざることは、言ふまでも無し。「彼」は之を先見し、其の用意として、己の死後に於て己の遺業を負ひ、普く人類を救ふべき代理者を、遂く茲に選び置きたり。夫れ自個の勢力を後世に傳へ、自個の人格を世界に示すは、何物か著作に如かんや。吾人は「彼」の手筆の遺されたらんことを望むや切なり。「然」も彼は一も著述する所あるなし。「彼」が此の種の事を自ら愼み、其の選抜したる弟子の生命に寓りて不朽ならんと心を決したるは、寧ろ更に智なりと謂ふべし。

「彼」が選んで此の大目的を負はせたるは如何なる種類の人なるかを見れば、驚くべし彼等は權門社會に屬せざりし如く、又學者社會にも屬せざりき。蓋しメシヤの器械たるべき者が、猶太國民の首領又は主導者にてあるべかりしは無論の事なり。然れども彼等は全く此の如き大召命に當るに足らざりき。イエスは此等の器械を用ひずして其の事業を爲すを得たりき。「彼」は肉に屬する力と智慧とを要せざりき。身分學識の制限を受けざる所の品性の諸要素、（譯註、前に述べたる常識、慾望、本能等）に依りて恒に動く所の「彼」は、十二の無學なる平民に其の道を委ぬることを遲疑せざりき。然れども「彼」は此の選擇を行ふ爲に、夜を徹して禱れり。蓋し是れ數日熟慮したる結果なるべし。此の事は「彼」が品性を洞察することの如何に透明なるかを證せり。看よ看よ彼等は竟に一變して、大事業を爲すに十分に適應したる器械となりしに非ずや。其の中少くともヨハネとペテロとは卓出したる天才の人に非ざりしか。其の中の一人こそ轉じて反逆者となりけれ、又イエスの彼を選みしことこそ十分に解することを得ざれ、他の十一の代理者に於ては然らざりき。彼等は甚だ非なるが如くして、遂に甚だ當れるを見れば、此の選擇はイエスの鑒識の極めて高きを顯はす最大紀念碑の一と稱すべきなり。

然れども十二使徒の將來の偉大に發達すべき萠芽を、イエスが彼等の衷心に發見したる其の洞察のみを摘出するは、「彼」と十二使徒との關係を、十分に説明したる者と謂ふべからず。彼等は各自に大なる人物となりて、基督教會の建設のために最も肝要なる工を爲したり。彼等は近代の世界を統率する所の王座に坐せり。彼等は時代の平面を無限に亘れる一列の天柱の如し。然れども彼等を照して之を著はしたる日光は、全くイエスより來れり。彼等に其の偉大を與へし者は「彼」なりき。彼等は「彼」の證人として最も驚くべき者なりき。彼等に此の嵩高なる品性を與へ、此の廣大なる事業を成就せしめたる「彼」の感化力こそ驚異すべき哉。彼等は初め疎暴を極め、其の慾望は肉的なりき。此等の使徒がイエスの心の聖圖を認め、其の緒業を紹ぎ、或る程度まで「彼」の優美なる精神を有し、「彼」の品性の肖像を世々の將來に傳ふるに至るべき曙光果して安くに在りしや。然れども「彼」は忍んで彼等を敎育し、彼等が陋き希望を懷けるを耐へ、「彼」の意志を拙く誤解せるをも任へたり。「彼」は彼等の將來爲すべき事業を一刻も忘るゝことなく、之が爲に彼等を修錬することを己が平日の第一事業となしたりき。「彼」は其の弟子の全體の伴なりしにも勝りて、彼等十二の伴なりき。是故に彼等は大凡「彼」が公に行ひし工を見、私に言ひし語を聞きたり。イエスは唯十二人にのみ語りしこと數次にして、斯かる際には「彼」は其の敎理の光耀と奥義とを盡く彼等に開示し、其の心に裕に眞理の種子を蒔き、時間と經驗とが之を實らしむる時期を待ちたり。然れども彼等の訓錬の最も重要なる部分は、恐くは彼等が不知不識の際に行はれて、至大なる結果を生ぜしならん。換言すれば「彼」の品性の不斷無言の感化力是れなり。「彼」は十二人を恒に己の周圍に牽さよせ、之に己の肖像を印刻せり。十二弟子をして能く十二使徒たらしめし者は、實に此の手段に依れり。「彼」を愛する世々の弟子をして長に十二使徒を羨望して止む能はざらしむる所以のものは、他に非ずして此の一事に在るなり。吾人は二千歲の距離を隔てゝ遙にイエスの品性を稱嘆するに過ぎざるに、彼等がイエスと生活を同にして其の品性を仰ぎ、三年の間其の實際の鑄冶力を感ずるを得しは、彼等に於て如何に有益なりしとするぞ。彼等十二人は天幸にして其の品性の光輝を仰ぎ、其の威力の下に生活したるも、吾人は不幸にして爭で「彼」の品性の容貌を

十分に回想することを能くせんや。

イエスの人性

イエスの人性の中、衆目の最も顯著に認むる特色は確回不拔の目的ある事是なりき。イエスの有らゆる行動の中に震動せし所の本音は、確實に此の目的なりしなり。看よ看よ「彼」は己を導き、己を駈る所の唯一個の目的の爲に奪はれたりしに非ずや。蓋し世間の大多數は何等目的とする所なく、時代の習慣や自己の慾望や、社會の潮流の中に漂ひ、何等の獲る所なくして過ぎ去る。イエスに在りては即ち然らず、「彼」は目前に確固たる目的を認め、此の目的「彼」の思想を奪ひ、其の精力を抽き出だせり。「彼」は往々「吾が時未だ至らず」てふ理由を以て、或る事物を爲す事を避けたり。是は恰も其企圖の爲に、其時間を吸聚せられて、一時一刻其の爲すべき分あることを證せるなりき。萬人の生涯に之なくして、唯獨り「彼」の生涯にこれ在る所の迫害をして、「彼」の上に激昂し突貫せしめたりし理由實に茲に在り。又其の精力を千の瑣事に分散し、其の思慮を無數の細故に費すことを免れて、彼の一定の目的なくして過ぎ去る所の俗人と異なるを得、其の生涯をして、多樣の變化ありしにも拘らず、終始一貫の連珠たるを得せしめたりし理由も亦實に茲に在りき。

此の特色（目的あること）と密接に關係して、更に他の卓出せる特色ありしを見る。こは稱して信仰とも曰ふべき者にて、其の目的の遂行の爲に驚くべき確信を有せしこと、其の手段と反對とを顧慮する遑なかりしことを意味せるなり。若し一方には其の目的即ち其の國民を改革して、永久に貫き宇宙に亙る所の宗教的運動に着手することの如何に洪大なるかを思ひ、其の逆へ鬪ふ所の反對、其の進路の各段階に於て出會はんとする所の反對を思ひ、他方には「彼」は人としては無教育なるガリラヤの一平民なるを思ひ合はすれば、「彼」が己の成功に對する泰然不動の確信は、「彼」の成功其物に比して幾何も劣る所なからん。聖書を通讀する者は、何人も問はざる能はず。「彼」が此くも巨大なる印象を世界に傳ふるが爲に、「彼」は抑も何事を爲しゝやと。實に「彼」は此の如き結果を生ずる爲に、何等の機關をも設置せざりき。「彼」は學識、富有、政府、

等の如き感化力の樞機を一も用ふることなかりき。勿論「彼」は教會を建てたり。然れども「彼」はこれを建つるが爲に教會の性質の説明や、若くは其の規則らしき者を遺せしことなし。工夫なく用意なくして單的に前進し、敢然として事業を遂行する、是れ信仰の質實と謂ふべき者なり。「彼」が山を移すの信仰と稱せしものは是れなり。「彼」が其の弟子に恒に要求せし者は是れなり。彼の使徒**パウロ**が權力を畏れず、準備と云ふ準備なくして、**ギリシヤ**と**ローマ**の一大世界を克服せんとて出立するに當り、自ら誇りし「福音の愚」も亦是れなりき。

「彼」の第三の特色は其の獨創的なりし事是れなり。常人の生活は容易に説明すると を得、彼等は單に境遇の産物にして、其の周圍の人々と同じく、千萬人の類型たるに過ぎず。吾人の屬する所の一國の習慣、風俗、吾人の生ける時代の時好と嗜好、吾人を教育する所の傳説、吾人の雜はる所の社會の偏見、吾人の居る所の學校や宗派の意見等、是れ實に吾人を鑄造する者なり。吾人の事を爲さんと決するや、概して境遇の際會に駈られて然るを常とす。吾人の確信は自然に内より起るに非ずして、外部の權力の壓迫に由る。吾人の意見は翩々として風に吹さよせられたる斷片の類なり。然るに人なる**イエス**、**キリスト**は如何なる境遇が之を作りし乎。「彼」が生れし時代ほど、乾燥荒涼なる時代ありしや。「彼」は恰も沙漠の中に聳へたる新綠なる椰子樹の如くならざりしか。**ナザレ**の眇たる生涯の中に、如何にして此の如き巨大なる性格を生じたりし乎。有名なる彼の惡村よりして、如何にして此の如き清淨なる呼吸を吐き出だせし乎。學者が「彼」に知識てふ文字文法を教へたりしことは之あらん、然れども「彼」の教理は學者が教へし者とは全く反對せる者なり。「彼」の自由なる精神は、毫も宗派の時好に捕捉せらるゝ所なかりき。「彼」は其の時代の耳聽に充たすところの音響の中に在りて、如何に明白に人々の聞き棄てたりし眞理の聲を聞き得たりしか。「彼」は自稱敬虔者の崇奉する儀式の背後に在りて、如何に明白に人々の見棄てし神聖なる神の肖像を拜したりしか。「彼」は世界の中に在る所の一切の事物や、「彼」を生じたるらしき一切の事物を以て説明すること能はざるなり。「彼」は外よりにあらずして内より生長せし者なりき。「彼」は直に自然と人生の事實の上に其の眼を着けて、己の目擊せし

所を信じ、他人の見たりと云ふ言説に由りて其の視線を惑はさるゝことなかりき。「彼」又神の言の眞理に對しても亦均く忠實なりき。「彼」は出でゝ其の信せし所を大膽に辯説して、其の言説が母國の制度、信條、習慣を其の根底より振撼し、人民を束縛する所の無數の學者の意見を破壞するを意に介せざりき。「彼」の時代の猶太國民は、全く乾ける土となり、もはや何等新鮮なる者、偉大なる者を生ずべき望なきにも拘らず。「彼」は猶ほ其の國民の初代史に返り、モーセ及び諸の預言者の思想の流を汲んで、自ら涵養せし者と謂ふことを得んか。勿論是れには幾分の道理ありと謂ふべし。然れども「彼」は此等の先輩に親炙したるにも拘らず、「彼」は不羈自由の手指を以て大膽に其の所説を調理したり。「彼」は彼等の思想を幼稚の不完全より贖ひ出し、其の萠芽的教理を把りて、之を完全なる思想に結實せしめぬ。然ればこそ彼等の教へし、契約を與へたまへるイスラエルの神と「彼」の啓せる天の父、祭司並に血腥き犧牲を具したる神の殿と靈と眞を以てする禮拜、國家的儀式的律法の道德と心並に良心の道德、此等は如何に大なる對照ならずや。「彼」を以て直ちに彼等即ちモーセ、エリヤ、イザヤの如き人物と比較するに當りてすら、「彼」は其の獨創の點に於て、高く天外の絶峰たるを。

「彼」の人性の第四の特色にして、最も光榮なる要點は、人類に對ふ愛なりとす。吾人前に言へることあり、「彼」は其の主一の目的の爲に奪はれたりと。非常なる目的の底には之を型塑し之を支持する所の非常なる嗜慾あらざるべからず。人類に對ふ愛こそ、「彼」を牽き動かす嗜慾なりけれ。此の愛、如何にしてナザレの閑地に生長せしや、如何なる源泉に養成されしか、吾人は詳く之を知るに由なきなり。吾人の知る所は唯是れなり、即ち「彼」が公衆に顯はれたる時、此の愛既に其の主一の嗜欲となり居り、全然其の私愛を呑み盡し、不幸なる人類に對ふ無限の慈悲を其の情に充たしめ、「彼」をして復た後を顧みず、直に去つて己を獻げし救拯の道に邁往せしめし事、「彼」が此の愛の源泉を人類の靈魂の價値無限なりてふ觀念より抽き出せし事是れなり。「彼」の愛は他人の愛に制限あるが如くならず、一切の制限を飛越したり。社會の相違、國性の差別は、人をして互に其の感情を冷却せしむ。殆ど有らゆる國家に於ては、敵を惡むことを以て一の美德と數へ、國體を傷くる者を忌み憎むべき習を爲せり。然れども「彼」は己を嫌

惡する敵や、外國人や、法外者の衷に均く認識する所の人類の尊貴てふ感念に強ひられて、此等の習慣を毫毛も意に介せざりき。「彼」の生涯の目的を型塑したるは、實に此の驚くべき愛なりき。「彼」をして此の人生百般の苦痛と艱難に對して、最も柔く最も強き同情を持たしめしは此の愛なりき。「彼」をして治醫者として起たしめたるとの最後の理由も此の愛なりき。最も助力を要する處に「彼」の慈愛は「彼」を駈れりき。「彼」の慈愛に駈られしは、單り彼等の肉體のみならず、特に其の靈魂を救はんが爲なりき。「彼」は事毎に彼等を助くるが眞の愛なることを知れり。又此等の艱難と疾病とが、凡に勝りて彼等を危うするものなることを知れり。偶此等治醫の目的なき愛を他に注ぎたる例も亦之れありき。然れども「彼」が己の愛する者の眞の幸福を獲んが爲に此の治醫を施せしは、智慧其の愛を導きしに依る。「彼」は知りぬ、此くするは彼等を罪より救ふに當りて、彼等に其の渇望せる至善を行へるなりと。

然れども「彼」の人性の中最も主要なる屬性は、其の神に對ふ愛にぞありける。蓋し感情、思想、目的に於て神と同化することは、人の最大名譽にして又最大美德と謂ふべし。**イエス**は即ち之を成せり。神を顯はすは吾人の至難とする所なり、衆人は殆ど全く神を思はず。極めて敬虔なる人といへども、其の心を修練して、斷えず神を顯はすことを非常に困苦なりと自白す。吾人は神を思ふに當りて、吾人の衷に在る物と、神の衷に在る物と甚だしく相違せることを感ずる苦感なきを得ず。吾人は神の前に出でて、多少に拘らず、神の思慮は己の思慮に非ざること、己の生活は神の生活に非ざることを一分時間だも感せずんばある能はざるなり。**イエス**に在りては即ち然らず、「彼」は神を直指せざる一時間を有することなく、一事業を行ふことなし。神の「彼」を包有すること、其の呼吸する空氣の如く、其の享有する日光の如し。「彼」の思想は神の思想にして、「彼」の慾望は毫末も神の其より離れしことなし。「彼」の目的は「彼」之を斷言せり、己を遣はし、所の神の目的より外ならずと。此の神に對ふ絶對同化を、「彼」は如何にして得來りしや。此は大概は「彼」の內に於て、其の天性自然に此の圓滿なる同化を證せしに依るべけれども、猶ほ幾分は吾人が今日努めて之を得ると同じく、「彼」も亦其の幼少より愛讀したりし聖書に由りて、神の思想と目的とを研究せしこと、其

の生涯の間に於て、飲食する遑もわらざりし際にも、寸暇を偸みて祈禱の習慣を養成せしこと、己の思想と目的とを神の其れより離さんとする誘惑に、耐へ忍んで抵抗することに因りて、以て此の絶對的同化を得たる者なり。「彼」の事業の爲に此の如き確信と大膽とを「彼」に與へし者は、即ち此の絶對同化なりき。「彼」をして其の事業を爲すべき召命の神より來れることを確認し、之を成就する迄は死なじと知らしめられしも、亦同じ同化なりき。「彼」をして其の「彼」が如き自覺と獨創に、併せて「彼」が如き柔和謙遜の模範を造らしめし者も亦同じ同化なりき。何となれば有らゆる思想を一切其の父の意志の下に置き、之に隨順せんことを欲する、これ「彼」の願なりし故なり。「彼」をして其の生涯の最も沈痛なる試錬の下に在つても、自若として其の威嚴を保たしめし所の「彼」の平和安心の秘訣も、亦實に此の絶對的同化にして、「彼」をして其の生涯の最も悲慘なる最後も亦やがて己に對ふ神の旨にして、此を以て事即ち足ると知らしめたるも、亦此の同じ同化なりき。「彼」は常に己の傍に完全なる安息と寂默と日光とを得べき退隱所（即ち同化）を有せり。「彼」が其の弟子等と別るゝに當りて、彼等に遺せし所の一大秘密は是なり、「我平安を爾曹に遺す、我平安を爾曹に與ふ」と。

「彼」の人性の至聖所として、神學者の必ず論及する所のものは、「彼」の無罪なる事なり。蓋し聖書はアブラハムの如きモーセの如き、其の最も偉大なる豪傑の過失すらも、忌憚なく記述しながら、イエスに就いては何等の罪過を記せるなし。古代の聖徒の最も崇高なる特性は、其の悔い改むる一點に在りとす。彼等は其の品性の聖ければ聖きほど、己の罪過に對する涕淚は彌〻多く、其の悔恨は彌〻苦し。然るにイエスは歷史上の最大宗教家として、萬人に認められながら、「彼」は一回だに如上の聖徒的特色を示すことなかりき。別言すれば「彼」は何等の告白をも爲す所なかりき。嗚呼是れ豈に告白すべき罪なかりし故なるなきか。尙且無罪てふ觀念は「彼」の品性の圓滿を稱するには、餘りに消極的なる嫌あり。進んで積極的に曰はんか、「彼」が無罪なりしは、其の全く愛に充たされたりしが故なりと。神に對ひて罪を犯す者は、神に對ふ愛の乏しきを顯はし、人に對いて罪を犯す者は人に對ふ愛の缺けたるを顯はす。神と人とに對ふ愛の充ちたる人は、兩者に對して斷じて罪を犯すこと能はず。神と其の同類とに

對ふ愛の充ちたりしこと、是れ**イエス**のイエスたる所以の最第一の要素にして、「彼」の品性の圓滿を成就する所以のものなりとす。

十二弟子は各自己が使徒たりし所以を以て、其の師**イエス**と長く交際せし間、其の胸に刻まれたりし印象の効力に歸せり。彼等が爾來世界に公證すべかりし基督教の根本眞理、即ち此の柔軟にして嚴肅なる「彼」の人性の背後には、猶ほ一等崇高なる一物（次に言ふ神性）ありと云ふ眞理を、彼等は何の時に認識したりしや。又其の印象が如何なる順序に依りて、次の如き確信即ち完全なる人性と完全なる神性とが、「彼」の中に調和せりと云ふ十分なる確信までに成熟したりや。吾人は之を十分に追究すること能はず。「彼」が自個を彼等に默示せし萬事の中、如上の二大眞理こそ其の主眼たりしなれ。然れども彼等の信仰が「彼」の死に由りて挫折したるを見れば、此の時に至るまで、「彼」の人格に對する彼等の確信の、如何に未熟なりしかを證せり。看よ看よ彼等は唯無難の際に於てのみ、僅に其の信仰を告白し得たるに過ぎざりしなり。彼等が其の胸憶に長く欝積しありし此の靈活なる印象を、始めて其の舌に上ぼせ得たるは、「彼」の復活と昇天の後なりき。彼等は一たび其の舌を用ふるに當りてや、此れまで親交を辱うし居たりし「彼」に由りて、神肉體を取りて顯はれたまへりてふ不扶の眞理に固着するに至りしなりけり。

第六章　反對の年

滿一個年の間、**イエス**は**ガリラヤ**に於て、不斷の精力を以て其の事業を推進し、奇蹟の助を懇求する所の哀れなる患者群の中に立ち働き、其の恩寵と眞實の福音を大衆の耳に、又は孤獨に憂を懷き來る訪問者の耳に入るべき機會を努めて捉へぬ。「彼」が其の健康と幸福とを恢復し與へし數百の人の家庭に於て、「彼」の名は常用語となりしなるべく、「彼」の說敎に動かされし人の心に於て、其の風貌は感謝と愛とに抱かれしなるべし。「彼」の名聲の反響は、日に日に廣く鳴り彌り、一時は**ガリラヤ**全州が「彼」の弟子とならんとするかの如く、此くも寂かに提起したる運動が、容易に南方に開展し、

治醫者に對ふ愛、並に教師に對ふ心服の狂熱に乘じて、一切の反對を壓伏して、全陸を席卷せんとするかの如き勢ありき。

然れども十二個月の終に於て、此の事あるべからざりしこと、不幸にして明白となれり。**ガリラヤ**人の心一轉して磽确地となり、其の上に播かれし神の國の種子は、一たび直に萠え出でしかども、忽ちにして又枯れ了りぬ。其の變化や實に急激且周到にして、一時に**イエス**の生活の模樣を全く易へたり。「彼」は猶ほ長く六個月間滯在したるが、然も此の六個月間は、初の十二個月間と甚だ異なる結果を見たり。「彼」の周圍に起りし聲は、復た感謝と稱讃の叫に非ずして苦き讒謗の聲なりき。「彼」は復たび國民の心を擧りて、一處より他所に送迎せらるゝことなく、其の奇蹟を希ひ若くは之を見んと欲する人々の歡迎を受け、其の說教を聞漏らさじと犇めき合ふ所の群衆に慕はるゝことなく、「彼」は唯一個の逃亡者として、最も遠隔したる異鄕に遁れ、僅に數人の弟子を伴ひしに過ぎざりき。六個月の畢に於て、彼は竟に**ガリラヤ**を去れり。然り永久に之を去れり。然かも一時待望せられたりし如く、公衆認識の潮流に乘じて、輒く南方の民心を席卷し、大衆の凱歌を防ぐ能はざるべき**エルサレム**を乘り取らんとするが如き勢なかりき。實や「彼」は猶ほ六個月の間、南方の地――**ユダヤ**と**ペリア**に傳道したり。始めて「彼」の奇蹟を見たる其の地の人民が、「彼」に對ふ熱心の態度を顯はしゝこと、恰も**ガリラヤ**人が歡迎の初週に於て、「彼」を接けし時に等しかりき。然れども「彼」が此の地に於ける最大の成功は、僅に數人の弟子を其の小さ群に加へ得たるに過ぎざりき。勿論「彼」は**ガリラヤ**を去りし日よりして、其の面を固く**エルサレム**に向けたり。其の**ユダヤ**、**ペリア**に費し、六個月間も、不急の旅次として見るべかりしなり。然れども其の旅行に於て、「彼」は始より十分なる覺悟を有して、明々地に之を其の弟子の輩に告げたり。謂はく我は**エルサレム**に於て、民心を克ち伏することなく、反つて民衆の爲に棄てられ、竟に殺さるゝに至らんと。

吾人をして**ガラリヤ**人の感情の此の如く激變し、**イエス**の生涯に此の如き轉變を來せし其の理由と次第とを討尋せしめよ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

蓋し猶太國民の內、學識あり、權力ある階級に屬する輩は、イエスに對して發初より反對の態度を執れり。唯此等の階級よりも一等世俗的なる黨派、即ちサドカイ派及びヘロデ黨の如きは、久しく「彼」を白眼視したりき。彼等は他を顧慮するよりも多く自家の事件即ち其の富有と、其の朝廷に於ける權力と、其の遊蕩娛樂に就いて顧慮せり。彼等は下等社會の中に起伏する所の宗教的運動に就いては、何等介意する所なく、メシヤと名のる者顯はれたりと云ふ風說も、其の感興を惹くに足らざりき。これ彼等は他の民衆の如く、メシヤの出現を待望する者に非ざりし故なり。彼等は互に語りて曰く、謂ふ所のイエスなる者も、亦人民の此の待望に乘じて、每々起る僭稱者の一に過ぎずと。彼等はイエスの運動が政治的反逆の相貌を現はして、國內に於る羅馬皇帝の鋏杖を打ち碎かんとし、其羅馬の代官に新しき誅求の口實を與へて、以て彼等自身の財產と慰藉とを危くせんとするに至りて、始めて醒めたる人の如く、イエスの行動に目を注ぎ來れり。

然れども彼等よりも數等宗教的なる上流社會、即ち如上のパリサイ者、學者輩に在つては頗ぶる之と異なりき。彼等は有らゆる宗教上の新現象に對して最も深き趣味を感し、民間に起る宗教上の運動に就いては絕えず其の飛耳張目を傾注せり。是れ其の目的とする所、人民上に己の權勢を張らんと欲するに在るが故なり。是故に苟も預言の響を帶びたる所の新なる聲、若くは新なる教理、信條の宣言の類は、一として彼等の耳、を曳かざるなく、中に就いて自らメシヤと稱する者に至つては、必ずや彼等の中に至大の刺戟を與へずんばあらず。是れ其の平生メシヤの希望を懷けるが上に、當時は特に外國の軛の下に在つて、彼等のメシヤの出現を待つと愈〳〵切なるものありし故なり。彼等が其の社會の自餘の衆人に對する關係は、猶ほ吾が國の牧師や長老の人々が、信者社會に於けるが如く、多大の勢力を振へる者なり。此の如き人々當時に在つて殆ど六千人と數へられたり。人民は彼等を推尊して其の國最上の人物となし、國家の體面の維持者、王統の信仰の相續者となし、有らゆる宗教事件の論爭に關して、裁判を下し決定を與ふる惟一者として仰望したり。

彼等は決してイエスの行動を看過せざりき。否、彼等は發初よりして「彼」の言ふ所、爲す所を注視し、一歩一歩に「彼」の足跡を趁ひ尋ね、其の教理を論議し、其の主張を

稽査してイエスに施すべき措置を定めたり。彼等の決議はイエスに利ならざりし者なり。彼等は之を實行せんとして、一刹那も其の機を捉ふるに怠らざりき。

イエスを拒み、之を獵り、之を殺したる人々は、其の國人中の最も名望ある者、其の敎師たる者、模範たる者、聖書の誡命と古代の口碑の遵守者たる者、熱心にメシヤを待望せし者、聖書に遵ひて（彼等が信ずる如く）イエスを審判せし者、己の意ふまゝにイエスを遇して、以て良心の命令を守り、神に對するの務を行ひきと思惟する者なりしこそ、嗚呼是れイエスの生涯の悲劇中、最も肅かにして又威るべき事實にあらずや。聖書を讀む者は時としては彼等に對ふ憐憫、同情の感の、油然として起り來るを禁ずる能はざるものあるべし。これメシヤとしてのイエスが、彼等の待望する所、祖先が彼等に待望せしめし所と、甚だ異りたるが故なり。實に「彼」は彼等の偏見と敎訓とを彼が如く顚覆し、彼等が神聖視すべく命ぜられし許多の事物を彼が如く蔑視したり。彼等は實に憫むべし。何となれば世間復た彼等の犯し、罪惡の如き重大なる罪惡あるべからず、彼等の受くべき刑罰の如き重大なる刑罰あるべからざるが故なり。彼等は恰も宗敎改革の際に於て、勇往直前、以て攝理の進行の中に投ずる能はざりし人々と等しく、世界の歷史の危機に面しながら、時代の兆候を見ること能はずして、重大なる過失を行ひたる人々にして、均く痛哭すべき運命を分つ者と謂ふべし。

然しながら實際に於て彼等の情實は如何なりしや、彼等の眼が光を看破る能はざりしまでに罪の爲に盲みしこと即ち是なり。彼等のメシヤの見解は、數百年の間、世間的、物質的に曲解せられて、彼等は即ち其の曲解の相續者なりき。彼等は反つてイエスを視て罪人となせり、其の罪人となせる理由は、彼等と彼等の祖先とが神の誡命に瀆し加へし所の人の誡命を、「彼」が守らざりし故なりき。彼等の善者に對する觀念が（イエスは之に答へざりしも）全く虛妄なりしが故なりき。イエスは數々彼等の前に己のメシヤたる證據を提供しき、而も「彼」は生憎彼等に之を見るべき眼を與へざりき。蓋し如何に久しく罪惡と偏見の淵に沈みし者といへども、苟も誠實なる心あらん者は、其の心の底に眞なる者、畏るべき者、高潔なる者、偉大なる者の己に近く來るに當りては、知らず識らず喜び躍りて、之を懷抱せんと欲する至情の存する者なるが故なり。

然れども此の種の一物も彼等の衷に發見すべき者なかりき。彼等の精神は全く萎爾し、全く枯死し、徒に頑冥不靈の木石となれり。彼等は己の獨斷なる標準に循ひて**イエス**を議し、其の批評の態度を降つて、「彼」の偉大に動かさるゝことを得ざりき。**イエス**は眞理を彼等の面前に提出したるに、彼等には其の音響を聞き分くべき眞理を愛する耳なかりき。**イエス**は彼等の面前に覆面を要するほどの天使的淸淨を發揮したるに、彼等には其の威光に打たるべき明なかりき。**イエス**は彼等の面前に天の愛溢れし慈顏を顯示したるに、彼等の眼曇りて何等の感應をも與へざりき。吾人は勿論此の如き人〻の行爲を、憎るべき不運として憫むことを得。然れども寧ろ憎るべき罪として、之を恐れ避くるに如かず。人は愈〻墮落するに隨ひて、愈〻罪を犯すことを免れず、國民の犯罪の時代を重ねて增長するが爲めに、愈〻重大を加ふるに隨ひて、其の最後の國家的犯罪の愈〻震威すべきものなるは、實際不可免なる事なり。而して此の不可免なる犯罪の生起するに當りては、是れ單に憫むべきものたるのみならず、更に神聖なる赫怒に遭ふべき者として、寒心すべきものなりとす。

イエスの發初よりして彼等の反對を惹起したる一原因は、「彼」の門地の卑賤なりし事なり。彼等の眼は業既に富者社會、學者社會の普通の僻見に瞑眩せられて、位置、敎育等の如き偶然の事情を離れて、偉大なる靈性を看破すべき明を失へり。「彼」は平民の子なりしなり。彼は大工なりしなり。彼等は「彼」を粗暴邪惡なる**ガリラヤ**に生れたる者と思へり。「彼」は勿論**エルサレム**の學舍を經過せしことなく、又何等有名なる智識の井泉に就いて飲みしことなし。彼等は預言者、又殊には**メシヤ**は、**ユダヤ**の地に生るべき者、學術、宗敎の中心たる**エルサレム**の地に起るべき者、國民中の有らゆる門閥家、權力家と同盟して事を擧ぐべき者と思惟したりき。

之と同じ理由に因りて、彼等は更に「彼」の弟子と其の伴侶とを嫉視したり。「彼」の最高機關は彼等の中より拔擢したる智人、貴族に非ずして、敎育なき平民、漁父の類なりき。其の一人は稅吏なりき。**イエス**の生涯の行動の中最も彼等の心を害ひし者は、稅吏**マタイ**を其の使徒の一として選びたりし一事に如くものなし。何となれば稅吏は外國の權威の瓜牙として、其の職業の賤しきが爲、其の刻薄なる收斂の爲、其の劣等

なる品性の爲に、凡の愛國者、體面を重ずる輩より醜まれし者なり。**イエス**も亦決して此等體面を重ずる者、學識を衒ふ輩が、己の周圍に於ける範圍に加入することを望まざりしなり。況んや「彼」の自由に出入せし所は、民間の最下層――稅吏、娼婦、罪人の社會なりしをや。吾人が**キリスト**を愛するは他の一切の事實よりも、寧ろ獨り此の一事の爲に非ずや。「彼」若し眞に救主にして、罪より人を救ふ者なりせば、「彼自身」最も救拯を要する此等の社會の朋友たるの至當なるは、最も覩易き道理に非ずや。「彼」は此等罪人の多くは、自ら好んで罪を犯し、者に非ず、境遇の犧牲となりて此に至りし者なること、又塵芥を引く磁石は又能く數片の貴金屬をも引くに足ることを信せしことを吾人は知る。然ればこそ爾來德望高き者、門地高き者が、皆競ひて「彼」の足跡を追ひて陋巷疎屋に入り、失はれたる罪人を發見して之を救ふの風を生ずるに至りしなれ。然れども「彼」の時代に及ぶまでは、此の如き感情の未だ此の世に生まれざりき。多數の罪人は體面ある社會の外に在りて、社會の敵として輕蔑せられ、之を救ふべき何等の努力を致すものなく、反りて宗教上の名譽を求めんと欲する者の如きは、之に觸るゝを以て汚辱となして、務めて之を避けし者なり。看よ看よ**パリサイ**者**シメオン**の如き、其の**イエス**を招ける時に當りて、「彼」若し預言者にして己に觸りし婦の誰なるを知らば、之を追ひ攘ふべきことを疑はざりしを。其の時代の感想實に此の如くなりしなり。然れども**イエス**が此の世に新しき感想を持ち來り、彼等に示すに天の慈顏を以てせしとき、彼等は須らく之を認識したるべき者なり。若し彼等の心にして、全く頑硬暴酷なるなくんば、彼等は喜び踴りて此の神聖なる人道を歡迎したるべきなり。罪人の其の罪を廢てたるを見、惡き婦の己の滅べる魂の爲に哭くを見、**ザアカイ**の如き收斂者が誠實にして寛仁なる信者となるを見て、甚だ喜びたるべき筈なり。然れども彼等は之を喜ばず、反りて彼等に注ぐ**イエス**の同情を忌み憎み、「彼」を呼んで稅吏、罪人の友と爲せり。

彼等が**イエス**に反對する第三理由にして而して又最も重大なるものは、當時の習慣たりし種々の儀式を「彼」自ら守らず、又其の弟子をして守らしめざりし事なりき。此等の儀式は斷食、食時前の洗滌等にして、當時聖なる人々の表彰と思考せられしもの

なりき。此等の習慣の起りし理由は、業已に說明したるが如く、猶太人たる特色を明かにし、之を他の國民より識別せんが爲に、熱心にして而も形式を重ずる時代に發案せられしものなりき。發初の意志は善良なりしも、然れども其の結果は痛嘆すべき者となりき。彼等は此等の習慣の單に人間の發明なりしことを忘れ、之に神の制裁を附すべきものと思惟するに至れり。彼等は猶ほ其の儀式を增して、一日中の時間と、生活上の一擧手一投足とを、盡く規律を以て束縛するに至れり。國民の大多數は之を以て其の信仰と道德に代へたり。而も其の規律の一を犯すの危險なくしては、殆ど一指をも擧げ一歩をも投ずること能はざりしかば、此等の事物は柔軟なる良心の爲には、堪ふべからざる重負となりき。然れども何人も其の權威を疑ふものなく、之を嚴守するを以て、神聖なる生活の記章として仰ぎ視られぬ。**イエス**は之を以て其の時代の大なる厄介物と爲せり。是を以て「彼」は此等の習慣を斥け、弟子をして亦己に倣はしめぬ。然れども又同時に彼等をして公義と慈悲と信仰に歸らせ、之をして良心の威嚴を感じ、律法の森嚴にして精神的なるを感せしめたり。然れども「彼」が此く行ひし結果「彼」は彼等に不虔者として、又民を惑はす者として視らるゝに至れり。

「彼」と彼等ラビとの間に、最も大なる衝突を起したるものは、特別に安息日問題なりとす。此の問題に於て、彼等の獨斷的制限と規則とを發明せしこと、譎怪なる極端に馳せ、此の安息、喜樂、祝福の日を變じて、忍ぶべからざる重荷を負ふ日となしぬ。「彼」は安息日を以て、其の治療を施すの例日となせりき。然るに彼等は「彼」の工を以て誡命を破る者とせり。故に**イエス**は二たび三たび彼等の反對論の非なるを啓き、安息日の「人の爲に設けられたる」ものなることを說き、更に之を證する爲に、古代の聖徒の習慣を指摘し、彼等自身の聖日に於ける行動を比擬せり。然も彼等は猶ほも悟らざりき。然るに**イエス**は彼等の反對に拘らずして、其の慣例を繼續せしかば、此の問題は彼等の憤慨の不拔なる土臺となるに至れり。

箇樣に低き思想を懷ける彼等が、數等高き**イエス**の主張を聞きしとき、――己の**メシヤ**たることを宣べ、罪の赦の福音を唱へ、己の神の子たることを告ぐるを聞きしとき、彼等の全然之を斥けしことは、甚だ理解し難からざるなり。彼等は**イエス**を僭稱

者となし、瞞着者となし、**イエス**の言を以て神を瀆す者となし、此の如く言ふ所の口を遏めんと欲するを禁ずる能はざりしなり。

彼等が**イエス**の奇蹟を見て、「彼」を認むる能はざりしことを、或は怪む者あるべし。若し「彼」にして實際聖書に記しゝほどの多數の驚くべき奇蹟を行ひたりとせば、彼等は如何にして能く「彼」の聖職の此の證據を拒絶することを得しや。約翰傳第十九章に記せる所の、**イエス**に依りて其の盲目を啓かれたる剛直なる理論家が、有司と爭ひし議論を見よ、是は彼等が毎々猛烈なる攻擊に遭遇する實例を示せるに非ずや。然れども彼等は自ら彼に對へたる大膽なる答を以て自ら滿足せり。是に於て吾人は猶太人の中に在りては、奇蹟は必ずしも聖職の決證として見るべからざることを想ひ起さゞるべからず。奇蹟は眞の預言者が行ひ得し如く、僞の預言者も亦之を行ふを得たり。奇蹟は神より出づる如く、又惡魔より出でたりき。故に其の神より出でしや否やを決するは、他の理由に訴へざるべからざりき。彼等は即ち此の「他の理由」に訴へて「彼」の神より遣られしや否やを決せんと欲して、「彼」の奇蹟を暗黑の權威を借れるに歸したり。

イエスは此の冒瀆の言に對ふるに、最も激烈なる義憤と宣告とを以てせり。然れど「彼」の反對者が安然に自ら衞るの位置茲に在りしを見るは、甚だ容易なる事なりとす。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

彼等は既に發端よりして**イエス**に對する反對の判斷を下し、始終之を渝へざりき。第一年の間「彼」の**ユダヤ**に在りし際、彼等は既に「彼」に不利なる決議を爲したりき。「彼」の**ガリラヤ**に於ける成功の報道、四方に流傳するに及んで、彼等は愕然として面を合はせ、直に**エルサレム**より代理者を派し、其の土着の黨人等と共力して、反對運動を興さしめたり。「彼」の隆盛の年に於てすら、「彼」は再三彼等と對決し、初は彼等を尊敬して、其の理性と人情とに訴へぬ。然も其の事の徒勞にして、到底衝突の避くべからざるを見るに及んで、「彼」は敢然として彼等の主張の有名無實なることを其の聽衆に暴露し、其の弟子に命じて彼等の麴酵を戒めたり。同時に彼等は公衆の心を賊ひ「彼」に背かせて、事十分に成功し、其の年の畢に於て、「彼」の人望の衰へ始むるや否や、彼等は便ち其の勢に乘じて、愈〻大膽に「彼」に攻めかゝりぬ。

彼等は更に夙に冷淡なるサドカイ者及びヘロデ黨をすら煽動して、其の身方と爲すに成功したり。是れ必ずや彼等に説くに、イエスが人民を煽動して反逆を起さんとすと云ふを以てせし故ならん。何となれば此の如きはガリラヤを治むる彼等の君王ヘロデの位を危うくせんとするが故なり。然れば此の卑劣不德のヘロデ自身、亦イエスの迫害者に加はれり、彼は其の內臣に諷告せられし外に、イエスを懼るゝ他の理由を有したり。是の時に當りて、彼は既に彼のバプテスマのヨハネを馘りたりき。嗚呼是は古今の犯罪史中、最も醜むべき犯罪、罪より罪に誘ひ下す恐るべき墮落の實例、而して又姦惡なる婦人が必ず其の復讐を行はんと欲する最も殘忍なる執念の現象として、見るも震慄すべき者なり。ヘロデが此の大惡を行ひし後、幾もなくして其の內臣は彼に來り、告ぐるにイエスの反逆の虛構を以てせり。彼此の預言者の事を聞くや、一片恐るべき思想の、罪深き彼の良心に閃めき過ぐるものありき。彼は叫ぶらく、「是れ我が馘りしバプテスマのヨハネなり、彼死より蘇りたり」と。尙且其の好奇心、其の恐怖心に打ち勝ちしかば、彼はイエスを見んことを欲せり。嗚呼是れ實に羊に近よらんと欲する獅子の慾望なりき。イエスは固より彼の招呼に應せざりき。然れどもヘロデ王は之が爲に愈〻廷臣の報告を聞かんと欲せり。これイエスを危險なる人物として捕へんが爲なり。幾もなくして彼はイエスを求めて殺さんと欲せり。イエスは自ら衞らざるべからざりき。此の事、他の諸の緊要事項と合體して、イエスのガリラヤに於ける六箇月間生活の性質を一變せしめし原由となりき。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

一時に在ては、「彼」が平民の心を收攬したるの極、必ずや國民的認識を受くべしと思はるゝまで强大となるべく見えたり。蓋し初には有權者有位者をして眉を顰めしむる所の種々の運動も、其が一たび下等社會に落ちて、其の狂熱的稱讚を得るに至れば、忽ち上流社會を傾倒して、勢力の中心を移動するに至るものなり。如何なる運動も必ず國民的同意を得べき或る一點あり。此の一點に達するや否や、其の運動は忽ち氾濫する洪水の如く、偏見の堤防も、有權者の憎惡の井堰も、之を遏止すること能はざるに至る者なり。イエスはガリラヤの平民に自己を與へ、其の報酬として彼等の愛と

稱讃とを得たり。パリサイ者、學者等が「彼」を暴食漢、飲酒家として忌み憎むに反して、彼等は「彼」を預言者と信じ、之を古代の有らゆる偉人に比擬し、其の說敎の崇高なる方面に打たれ、其の圓融なる方面に醉ひては、「彼」をイザヤ若くはエレミヤの死より蘇りたる者となせり。當時の人皆謂へらく、メシヤの世に來るに當つて、古の預言者先づ再び與らんと、而して大多數の想望したる預言者はエリヤなりき。是故に或る人々はイエスを以てエリヤとなせり。要するに彼等は「彼」を單にメシヤの先驅者として視、未だメシヤ其の人として視るに至らざりき。是れ「彼」が彼等のメシヤ觀に應じて、現世的、物質的權能を示さゞりし故なり。勿論時としては「彼」が若干の異常なる奇蹟を行ひし後には、此の人こそは「彼」ならずやと云ふ一語兩語なきにも非ざりき。然れども而も「彼」の行爲、「彼」の事業の如何に不思議なるにも拘らず、尙且「彼」の生涯の全豹は、全く彼等の預想に反し、彼等をして「彼」がメシヤなることの眞理を廣く深く信せしむることを得ざりき。

然れども果斷の時期竟に來れり。是は數次暗示せられし彼の一大回轉機、即ちガリラヤに於ける十二個月の終期なりき。イエスは今やバプテスマのヨハネの殺されしを聞き、即時に其の弟子を伴ひて曠野に奔り、茲に此の慘劇に就いて沈思し、窃に弟子と語りあへり。「彼」は次いで湖水の東岸に濟り、ベテサイダの綠野に上陸し、十二使徒と與に一の丘陵に登れり。然るに「彼」が其の顚に登るや否や、無數の聚群「彼」に遇ひ、其の說敎を聞かんとて、「彼」の足下に聚り來れり。彼等は「彼」の居る所を尋ねて、四方より群り來れるなりき。他に仕ふる不斷の用意を衣たりし「彼」は、山を下りて彼等を迎へ、彼等の爲めに敎を說き、其の病を醫したり。然るに其の說敎長くして、日既に夕なりしを見るや、「彼」は群聚の無聊なるに多大の同情を感じ、茲に驚異すべき奇蹟を行ひて、五千の大衆を食へり。其の結果は非常なりき。彼等は忽ち「彼」のメシヤに外ならざるを悟り、メシヤを以て獨り物質界の救濟者となし、腕力を以て「彼」を捉へ、「彼」を王となさんとせり。換言すれば「彼」をメシヤ黨の一揆の首領となして、以てカイザルの手より王位を奪回し、彼が諸領地の上に立てたる諸小王を逐ひ攘はんと欲せしなり。

これを「彼」の成功の高潮となす。然れどもイエスに取りては此れ反つて苦き羞辱の

時期なりしなり。「彼」の一個年の事業の來せし結果、唯此の如きに過ぎざりしなり。彼等が「彼」に對する觀念は、猶ほ此の如きに出でざりしなり。「彼」は之を取つて以てガリラヤ傳道の結果の徵候となせり。「彼」は其の結果の如何に淺薄なりしかを見たり。ガリラヤ人自ら、四方に開展すべき「彼」の王國の中心たるに足らざることを示せると斯の如し。是に於て「彼」は即時に彼等の肉的欲望を脱がれて、翌日再びカペナウムにて彼等に遇ひ、彼等が如何に己を誤解したりしかを辯じぬ。實なる哉、彼等は「彼」を見て以てパン王と做し、怠惰と滿腹、食糧の山と牛乳の川、其の他勞働を要せざる一切の慰藉を供給せしめんと欲したり。奈何せん「彼」の與へんと欲する所は、永生のパンなりしを。

此の說敎は恰も群聚の熱注せる頭腦に冷水を撒布したる者なりき。此の時より以來「彼」の傳道はガリラヤに詛はれ、「其の弟子多く返り往きて、イエスと俱に行かざりき」。是れ「彼」の預期せし所なりき。「彼」が人望の高潮に向つて、不運の一擊を加へし者は、「彼」自身に外ならざりき。「彼」は此より後に於て、眞個に「彼」の事を理解し、其の精神的冒險の伴たるに足る少數の弟子に向つて、自己を委ねんと決心したるなり。

「彼」の傳道に對する意見の變化

業既に述べたる如く、ガリラヤの人民は、概して「彼」の弟子たるに足らざるを顯はせりといへども、尙且此の地に忠實を證する所の餘黨甚だ多かりき。其の中心は十二使徒にして、之を圍繞する一般の信者、猶ほ數百を以て數へたりき。此等の弟子が今「彼」の恩顧する所となれり。全體としてのガリラヤ人が「彼」を棄て去りし際に於て「彼」は彼等を火焰の中より燒木屑を引き出すが如く救ひ出しゝ者なりき。彼等に取りて今はこれ非常なる試錬の時と謂はざるべからざりしなり。何となれば彼等の「彼」に從ひし目的は、一般人民の目的と、大體に於て相同じく、其のメシヤに對する待望も、亦現世的光輝に在ること相同じかりし故なり。彼等は勿論其のメシヤ觀に於て、稍精神的の要素の含まりたることを學びたるに相違なけんも、尙且此等の要素に加ふるに、口碑的、物質的の要素を以てしたること疑ふべからず。イエス自身、箇樣に久しく其の王冠を戴くことを遷延したること、彼等に取りては痛恨なる秘密なりしなるべし。此

の事や、彼のバプテスマのヨハネに取りても亦均く痛恨なる秘密なりき。然ればヨハネは竟に其の發初ヨルダン河の畔にて見たりし異象と、其の生涯の大確信とを、迷妄には非ざるかと疑ひ興し、其の弟子をイエスに派して「彼」は果してメシヤなるやと問はしむるに至りし者なり。ヨハネの横死は、彼等に取りては錯愕すべき事件なりしに相違なし。若しイエスにして彼等が思想するが如き偉人なりしならば、「彼」能く如何にして其の朋友の此の如き横死を逐ぐるを看過せしや。是れ彼等の心中の一大不審ならざるべからざりき。尙且彼等は「彼」に從ひ、「彼」がカペナウムにて其の說敎を畢り、公衆を散せし後、彼等に問ふて「爾曹も亦去らんと欲ふや」と曰ひしとき、彼等は答へて「永生の言を有てるものは爾なり」と曰ひ、以て己の「彼」に固着せる其の本心の在る所を明かにせり。彼等の意見は明白にはあらざりき。彼等の心は混惑の中に在りき。然れども彼等は「彼」よりして永生を得べしと云ふ此の一事をば審に知れり。嗚呼、是れ彼等をしてイエスに密着せしめ、「彼」が萬事を明かにするに至るまで、喜んで待たしめたる所以なりき。

イエスのガリラヤに費し、最後の六個月の間、「彼」は從來爲し來りし說敎と奇蹟を殆ど中止し、全く其の使徒の訓鍊に身を委ねたり。「彼」は成るべく公衆を避け、獨り其の十二人を携へて長途の巡回旅行を爲して、遂にパレスタインの邊陬に至り、或は遙に西北に當れるツロ及びシドンに顯はれ、或は遙に東北に當れるカイザリヤ、ピリピに顯はれ、或は湖水の東南なるデカポリスに顯はれたり。此等の旅行は寧ろ微行にして、其の理由を幾分はパリサイ者の痛烈なる反對に歸すべく、幾分はヘロデの毒手を恐るゝに歸すべしといへども、其の主意は獨り十二人と與に居らんことを欲するに在りき。然れば此の旅行の高價なる結果は、カイザリヤ、ピリピに於て起りし事件に顯はれたり。イエスは此處にて始めて自個に關する公衆の觀念を問ひ、彼等は之に答ふるに當時民間に流行する所の種々なる想像說、――或人は預言者なりといひ、或人はエリヤ又は、バプテスマのヨハネなりといへることを以てせり。イエスは忽ち彼等に問へり、「爾曹は我を指して誰となすや」。ペテロ衆に代りて答へて曰く、「爾は活ける神の子キリストなり」と。此の答は沈思熟考の餘に出でたる斷案的確信にして、彼等が將來如

何なる事件の起り來るに拘らず、生死「彼」に從はんと決心したるは、實に此の確信に依れり。**イエス**は此の告白を得て心甚だ滿足し、其の將來教會を建設すべき種子、彼等の衷に在ることを認めたり。何となれば教會は彼等の告白したる此の眞理の基礎の上に建つべかりし故なり。

然れども彼等が此の告白の域まで上達せしは、單に信仰の新なる試錬に入るべき準備たるに過ぎざりき。聖書に據れば、**イエス**が苦難を受けて死に就くことの遠からざるを啓告せしは、實は此の時よりしてなりき。此等の事は待望さるべき「彼」の生涯の唯一の結局として、**イエス**の心眼には明白に映じたりき。是より先き「彼」は屢此の事を彼等に諷示したりき。然れども「彼」は細心なる顧慮と慈愛に富める考念よりして、彼等の能力の發達するに從ひ、漸次に之を敎導するの方便を取りたりしかば、其の含示を餘り頻繁にすることを爲ざりき。然るに彼等は今或る程度まで上達して此の事を聞くに足るべき者となり、且其の事の起ること既に近づき、且到底避くべくもあらざりしかば、「彼」は恒に此の事を稱道して止まざりき。然れども彼等は聖書が吾人に告ぐるが如く、毫も「彼」を解することなく、他の國人の全體と均しく**メシヤ**を以て**ダビデ**の王位に坐して、其の統治は永劫絶ゆることなきものとして待望したり。然れば**イエス**を**メシヤ**と信ぜし彼等には、「彼」の**エルサレム**に達するや否や、「彼」は王とならずして反つて己を殺さるべしと云ふが如きは、全く不可解の隱語なりき。然れば彼等の此の事を聞くや、相互に其の眞僞の在る所を論じ、其の表面の意味を以て、到底不可有なる事となし、「彼」が例の慣用手段なる比喩を用ひて、其の事業の狀態の如何に變化すべきか、即ち「彼」が從來表彰したる**メシヤ**的事業の謙卑なる態度が、如何に一たび死滅して、之を葬り了りたる墳墓の背後よりして、新に赫耀的、凱旋的なる態度を以て「彼」の王業の興り來るを見るべきかてふ眞意をほのめかせるなりと思ひき。「彼」は努めて彼等を啓き、層一層、「彼」の苦難の細目を擧げ示しゝかど、彼等の耳の遲鈍なる、其の眞理を受け納るゝこと能はざりき。此の時に及んでも、猶ほ來るべき王國に於て最も大なる者は誰ぞやてふ爭論の屢彼等の中に起れる事實、又**ゼベダイ**の妻**サロメ**が、「彼」の國の顯はれん日に其の二子**ヤコブ**、**ヨハネ**を、「彼」の左右に坐せしめんことを願ひし事

實に依りて見るときは、「彼」の高足弟子すらも全く「彼」を解する能はざりしことは明白なり。彼等のイエスと倶にガリラヤを去りてエルサレムに登るや、彼等心に信ずらく、「神の國直に顯はるべし」と、換言すればイエス、エルサレムに達するや否や、從來被たりし屈辱の衣裳を脱ぎ、俄に其の隱し持ちたりし赫耀たる袞龍を着て、有らゆる反對を壓伏して、其の父祖の王位に即くべしと。

此の一年間のイエスの思想感情は如何なりしや。然り、此の一年は「彼」にも亦沈痛なる試錬の一年なりき。イエスは今にして始めて痛苦懸念の色を其の面に顯はしたり。其のガラリヤに於ける成功の一年の間、「彼」は確乎不拔の功業を建て得たる滿足を懷きたり。然るに「彼」は今に於て最も眞實なる意味を以て謂ふ所の「悲哀の人」となるに至れり。看よ看よ「彼」の背後にはガリラヤ人の拒絶あり、「彼」が然かく耕耘したりし畠の、此の如く荒蕪するを見るが爲に感ずる悲哀は、其の救はんと欲する靈魂を愛する愛の大量と、其の事業に注入せる信念の深度とに比例せりと謂ふべし。「彼」の前面には更にエルサレム人の拒絶ありき。此は今最も確實なる事項となりて、「彼」が將來を望む所の視線の不動不斷の對象として凝立せるなり。嗚呼是れ前に既に惶るべき眺望なりしが、其の事實に近づきたる今日に在つては、吾人の想察する能はざるほどの感情の絶悶を誘起し、幾度か「彼」の靈魂を震撼したるなり。

「彼」は恒に身を祈禱に退けり。此は「彼」の惟一の快樂にして又倚賴なりき。一日の夕近づき、其の一日の業を卒へて、疲勞の餘、身を以て仆れんとするが如き繁忙の際にも、「彼」は猶ほ其の群衆と弟子の中より、恰も籠鳥の脱がるゝ如く山野に退き、寂に其の父と交る爲に夜を徹せしが、今や此の事前より愈〻頻繁となり、激しき號哭と流涕を以て、己の情實を其の父に陳述したり。

「彼」の祈禱は竟にヘルモン山の變貌の事實に依りて其の赫耀なる應答を得たり。此の光榮なる光景の起りしは、此の反對の年の中間にして、其の正にガリラヤを去りて、運命の旅に發程せんとする前に於てなりき。此れ幾分は「彼」に其の山に伴ひたる三人の弟子をして、先づ其の信仰を牢め、次で其の兄弟の信仰を牢むるに適せしむる爲に發起せられたりとも謂ふべし。然れども實は主として「彼」自身の爲にせられしもの、即ち

是れ「彼」の父よりの至高なる恩賜にして、「彼」の此の時に至るまでの信仰の父に認識せられし徴證たり、又「彼」の前途に横はる死其物に對して準備すべしとの默示なりき。看よ看よ「彼」が其の榮光の中に、其の先駆者たりしモーセ、エリヤと話說したるは、取りも直さずエルサレムに於て起るべき「彼」の死に就てなりしを。彼等は「彼」の運命と、其の死を以て成就せんとする「彼」の事業に、全幅の同情を表注したるなり。

此の事ありて後「彼」は即時にガリラヤを去りて南上したり。「彼」はエルサレムに至る途次にて六個月を費したり。神の國の福音を宣べてパレスタインの全地に及ぼすは、「彼」の天職の部分なりしが故に、彼は己に先ちて其の弟子七十人を諸邑諸村に遣はし、己を接くべき準備に着かしたり。此の新しき分野に於いても、ガリラヤ人が「彼」の初年の傳道に於て見たるが如き異常なる現象――彼に從ひ來る大衆、驚くべき奇蹟的治療等亦起れり。此の時期の聖書の記事は、吾人をして十分に「彼」の足跡を追尋せしむるに足らざるを憾とす。「彼」は時にはサマリアの境に於て、ペリアに於て顯はれ、時にはヨルダンの濱に於て、ベタニヤに於て、エフライムの村落に於て顯はれしが、其の目的はエルサレムに在り、其の面を鏃の如く此の地に向けたり。時ありては「彼」自ら其の上に落ち來らんとする禍の豫想に心を奪はれ、「彼」の英姿を公道に追隨する諸弟子をして、其の沈默して疾行するに惶懼せしめぬ。勿論「彼」は時ありては小兒を祝福し、若くはベタニヤに於て其の女友の家を訪ひし際の如く、其の顏色を和ぐること無きにしも非ざりしかど、然も此の時期に於ける「彼」の容貌は愈〻嚴肅にして、其の精神は此の一事に聚注し、其の表情は愈〻益〻緊確なりき。其の敵に對する論評は、愈〻益〻鋭切にして、「彼」に從はんと告白する者に科する條件は愈〻益〻莊重なりき。一事として終の近づけるを示さゞるなし。「彼」は今や世の罪を贖ふの大事業を掌握せんとして、其の精神は其の成就せらるゝまで、轉た牢められつゝあるを見るなり。

大破裂は今急轉直下の勢を以て切迫し來れり。「彼」は最後の六個月の間に於て、其の最終の訪問に先ちて、二回簡約なるエルサレム訪問を爲せり。此の二回の場合に於て、有權者の反對は威赫的容貌を帶び來れり。彼等は第一の場合に於ては「彼」を捕縛せんとし、第二の場合に於ては「彼」を撲ち殺さんとて石を取り上げぬ。彼等は既に是より

先き「彼」をメシヤと告白する者をば破門すべしてふ布告を出だせり。然れどもイエスがラザロを蘇へらせし爲に、エルサレムの諸門に於て公衆の心中に惹起したる感動は、有權者をして竟に「彼」を殺さずんば滿足する能はざるを感せしめたり。彼等は其の議會に於て「彼」を殺さんことを議決せり。此の決議は「彼」を殺し、前一、二個月の中に爲されて、一時イエスをエルサレムの隣保に逐ひ出だせり。然れども「彼」は唯其の父の定めし時來るまで退きしのみ。

第七章　終局

イエスの傳道の第三年も亦竟に其の終に濱み、歳華亦一週回して逾越節の大年祭を促がし來せり。此の年祭には約二三百萬の旅客エルサレムに來集せりと傳へらる。彼等は單りパレスタインの四方より出で來れるのみならず、凡てアブラハムの子孫の散布せる天下の萬國より、海を濟り山を越えて來り聚り、以て其の國民的歴史の起原せし一大事件を祝せしなりき。而して又彼等は種々の動機に駈られて來れりき、或る人々は此の神聖なる場合に相當する所の、敬虔なる想念と深甚なる法悦を懷いて來り、或る人々は離群索居の生涯を取りて、久しく相別れゐたりし親戚朋友に會はんと欲して來り、又多數の心賤しき輩はイスラル民族の中に潜伏せる最も卑さ俗情に駈られて、此の民衆の一大會同の際に乘じて、一舉巨利を博せんと欲して來れるなりき。然れども此の年に限りて數萬の人々は、非常の激動を懷きたりき。彼等は從來彼處にて目擊せし所よりも勝りて、或る異常なる事物を見ることあらんてふ待望を懷いて京城に來れり。實に然り、彼等は此の節會に於てイエスを見んことを希望し、「彼」に關して何事か起り來るべしてふ漠然たる許多の前兆を歡迎したり。イエスの名は今公道に聚まる參詣群の口より口に絶えず傳はり、又小亞細亞、埃及より上り來る船の中にて猶太人の隊伍の語りあふ話柄なりき。イエスの弟子等も亦此の際總べてエルサレムに在りしならん。彼等は皆イエスが竟に此の國民の大會同の際に於て、其の光耀の上に纒ひし謙遜の粗服を脱ぎ棄て、何等かの不可抗なる方便を執りて、自己のメシヤたることを宣

明することならんてふ熱望を懷きたり。イエスが昨に其の日を過ぐせし南方ユダヤの數千の民も、亦彼のガリラヤ人が「彼」の初年の傳道の終に、「彼」に就いて懷きたりし熱望と同一度の熱望を以て、エルサレムに出で來りしものならざるべからざりしなり。其のガリラヤ人の大衆は亦必ずやエルサレムに在りしならん。彼等は深くイエスに信賴し、「彼」の事業の新發達に就きて、至深の趣味を感せんとしてありし故なり。遠隔なる地方に在りて、「彼」の名を聞きながら未だ嘗て「彼」を見ざりし所の者數萬人、彼處にて「彼」を見得べく、其の有名なる奇蹟を目前に見、其の有名なる說敎を目前に聞くことを得んてふ希望を懷いて、エルサレムに上り來れり。エルサレムに於ける有權者亦各種々なる感想を懷いて其の來るを待ち、何等かの轉機に於て、「彼」が偶然跌蹉するに至らんことを希望し、而して其の實「彼」が其の慈悲を以て操縱する所の地方の隨喜者の首領となり、拒ぐべからざる勢を以てエルサレムに顯はれ來らんかと甚だ恐怖したりき。

國民に於ける最後の破裂

逾越節の初日に先つ六日、「彼」はベタニヤ村に到着せり。これ即ち其の親友マルタ、マリア、ラザロ等の居村にして、エルサレムより半時間程なる橄欖山の他際に横はり、此の節會の間に於て、便利なる宿泊地なりしかば、「彼」は其の友弟等と與に、此の地を以て其の根據地となせり。祭祀の始まるは木曜日なりしかば、「彼」は其の前週の金曜日を以て此の地に着きたり。「彼」の旅程の最後の十二哩は、「彼」を以て其の感興の中心となせる所の參詣群の大衆と伴なひき。此等大衆はイエスがエリコにて盲人バルテマイの目を啓きしを見、此の奇蹟の爲に異常の感動を惹起したり。彼等が進んでベタニヤに入りしや、此處には又昨にイエスが死人ラザロを蘇へらせしこと盛に傳稱せらるゝを聞けり。業已にエルサレムに先着したりし大衆に向ひて、イエス來れりてふ新報を傳へし者は、此の大衆にてありけるなり。

是に於てイエスはベタニヤに安息日を休みし後、日曜日の朝發足してエルサレムに上れり。「彼」はベタニヤの往來にも其の附近の道路にも、無慮の衆群の充塞せるを發見せり。此等の衆群は幾分は往の金曜日に於て「彼」に伴ひ來りし者ども、他の幾分は其の

途上にてイエスの奇蹟の事を聞きたる者ども、及びエリコにて其の奇蹟を見て「彼」に追隨し來れる者ども、而して又他の幾分はイエスが隣接地に在ることを聞いて、「彼」を見んとてエルサレムより聚り來りし者どもなりき。彼等は熱狂的態度を以てイエスを迎へ、萬口一齊叫んで曰はく、「ダビデの子にホザナよ、主の名に依りて來る「彼」は福なり、至高所にホザナよ」と。嗚呼是れ「彼」が前に恒に爲すを避けたりし所のメシヤ的宣明なりけり。然り「彼」は前には之を爲すを避けたりしが、今は之を爲すを聽せり。且「彼」亦多分己に表彰せし所の彼等誠實なる忠義心を見て、中心甚だ滿足を感せしならん。何となれば「彼」が己のメシヤたることを其の國民に韜晦すべからざる秋、業已に來りし故なり。是を以て「彼」は大衆の希望に從ひて國王の態度を執りしと同時に、彼等をして「彼」が此の名譽を受け取りし自家の意味を誤解する無からしめん爲め、人を遣りて驢馬の子を曳き來らしめ、弟子等が其の背に各其の外套を置きしかば、其れに乘りて群聚に先てり。看よ看よ「彼」は血に渴きて狂ひ立てる軍馬に跨りて來らざりき。「彼」は柔和なる驢駒に乘りて、質撲なる平和の王として來れるなりき。其の行列は橄欖山の肩を踰え、其の山麓を下りて、其れよりケデロン河を渉り、一道の阪路に導かれて、エルサレムの市門に登り、エルサレムの大巷を通りて殿に詣れり。道上の群衆諸方より急ぎ來りて加はりしかば、其の衆行々層倍して、喚呼の聲一歩は一歩より高く、而して行列の群亦行々路傍の棕櫚の枝と橄欖の枝を折り、之を搖りて萬歳を呼べり。エルサレムの市民驚いて戸外に出で見て、「是は抑も何人ぞ」と問へり。これに行列は誇り答へて、「是はナザレの預言者イエスなり」と曰へり。嗚呼是れ實に地方的宣明に非ずや、エルサレム人は毛頭これに關係せず、冷眼之を看過ぐしぬ。唯有權者はイエスの行動の結果を熟知せしかば、之を見ると倅く憤慨惶惧交も至れり。彼等はイエスの許に來り、「彼」をして其の徒を謐めしめぬ。彼等は多分次の言を用ひしならん。曰く「彼」若し然か爲さゞるに於ては、其の隣接地に屯營せる所の羅馬の戍兵は、「彼」と其の徒とを捕縛し、此の市を罰するにカイザルに叛くの罪を以てすべきなりと。

吾人はイエスの生涯中、此の時に於てほど次の問を起さんと欲することなし、曰く、イエスのメシヤたる主張にして、若し國民の容るゝ所となりしならば如何、即ちエルサ

レムの市民が地方人民の熱心に動かされ、祭司、學者輩の僻見が公衆稱讃の前に屈したりしならば如何、イエスは果して自ら國民の首位に坐して、爾來今日に至るまで進行し來りし世界の歴史と、全く異りたる歴史の紀元を啓きたらんか。是は吾人の知識を超絶したる疑問なれども、而も聰明なる聖書の讀者の、盖し問はざる能はざる所なりとす。

イエスは形式的に自己をエルサレムの民と國民の有權者に顯はしたり。然れども何等の應驗をも得ざりしなり。地方人民が彼の主張を認識したるのみにては、未だ國民的賛同を博するに足らざりき。「彼」は竟に最後の決心を定めたり。大衆は「彼」の與ふる信號を待望せり。而して「彼」に對する感動の極、如何なる命令を受くるといへども、必ず之に從はんと欲したり。然もイエスは何等の命令をも彼等に下さず、殿に於て一時身邊を眴したる後、彼等を離れてベタニヤに返れり。

群衆の絶望は無論極端に達したり。好機會は有權者に授けられたり。彼等如何んぞ之を利用するを誤るべき。パリサイ者は復た何等の刺激を要せざりき。彼の冷淡にして傲慢なるサドカイ者すら公衆の激動せる現狀を視て、國安に危險なりとし、自ら好んで其の怨敵と同盟してイエスを抑へんと決心したり。

エルサレムに顯はれて、從來の工なりける治療と説教とに從事したり。其の火曜日に於て有權者俄に來つて「彼」を遮りたり、パリサイ者とサドカイ者、祭司長と祭司、學者と民の長老等、今や齊く共同目的の爲に結合して「彼」に來り、其の殿にて教へし際に、何の權威に依りて此の事を爲すかを問へり。彼等は公衆の着目せる間、其の官職的威儀、社會的倨傲、輿望的聲聞を以て自ら飾りて以て一介のガラリヤ人に對ひき。彼等は「彼」の失言を捕へんが爲に、辯論の戰士を先頭に立て、豫め選擇したる論點に於て、「彼」と激烈にして亘久なる論戰を行へり。其の目的の「彼」の信用を聽衆の前に失墜せしめ、若くは「彼」をして詭論に熱して其の言を誤らしめ、之を捉へて以て有權者に訟ふる口實を得んと欲するに在りしは明白なり。例せば彼等はカイザルに貢賦を納るゝは是なりや否やと問へり。「彼」若しこれに然りと答へば、「彼」の輿望は立どころに消滅すべし、何となれば此の如きは國民一般のメシヤ觀に全く反對したればなり。若し又然すべからずと曰はゞ、彼等は「彼」を捕へて羅

馬の知事に反逆する者なりと訟へんとせり。然るにイエスは彼等の敵より以上なりき。一時間毎に「彼」は沈着に其の攻撃を迎へ、「彼」の即答は表裏兩心を以て來る彼等を慙服せしめ、「彼」の巧妙なる答辯は彼等の戟を轉じて自己の肚裏を貫かしめたり。「彼」は竟に逆に彼等を追ひて其の領分内に切りこみ、傍觀者の前に於て彼等をして己の無識と誠實の缺けたるを自覺して赤面せざるを得ざらしめたり。「彼」は然かく彼等の口を噤むるに及んで、其の憤慨の暴風を放ちて彼等を罵倒せること馬太傳第二十三章に記するが如し。「彼」は茲に生涯鬱積したる非難攻擊の舌鋒を揮ひ、疾電迅雷的筆法を以て彼等の僞善的行爲を暴露し、彼等をして獨り當時の聽衆に取りてのみならず、爾來天下後世に取りての笑柄と成り果てしめたり。

嗚呼、是れ實に「彼」と彼等の間に於ける最終の破裂なりき。彼等は己の權柄と名譽とを保ちたりし公衆の前にて一より十まで屈伏せしめられぬ。彼等は既や堪ふる能はず、一時も速に其の復讐に着手せんと心を決しぬ。即夕サンヒドリムの議會は召集せられ、議員等は皆大に怒つて「彼」を除かんことを謀議す。ニコデモ及びアリマタヤのヨセフのみ、獨り立ちて彼等が匆卒なる措置に出でんとするを諫めぬ。然れども彼等は憤然として二人を嘿め、輿論を以て直ちにイエスを死刑に行ふべきことを決しぬ。然も事情は之を許さず、少くとも正義の形式を通過せざることを得ざりき。且夫イエスが現にエルサレムを塡充したる所の旅客の中に、一大聲望を博せるは明白なる事實なり。「彼」若し此等公衆中に捕拿せらるゝに於ては、此等公衆は果して默視し居るべきや。然れば當面の必要は參詣者のエルサレムを去るまで待つことに在り。彼等が已むを得ずして此の決論に達したる時、恰も好し彼等は最も意外滿足の珍事に遭遇せり。イエスの十二使徒の一人彼等に來り、賞金を得てイエスを賣らんと欲する旨を提言せしことなりき。

イスカリオテのユダは爾來人類の俚諺となれり。ダンテの「地獄の異象」は、彼を墮獄者の聚群中の最下級に編入し、彼を以てサタンと俱に第一等の刑罰に與る者となせり。彼の審斷はやがて人類の審斷なりき。然れども彼とても決して不可解にして、同情すべからざるが如き不法の悪物にはあらざりき。其の卑劣にして而して寒心すべき墮落の歴史は、十分に研究することを得。彼は他の使徒等と同じく「彼」の政治的叛逆に

黨して、現世的王國の顯位を獲んと欲する希望に出でゝ、キリスト、イエスの弟子となれりき。若し彼に一時「彼」に對する聖熱と中心となかりしならば、「彼」がこれを使徒の一とし選びしことは、甚だ解すべからざる事なり。彼が精力絶倫にして又事務的技能に長ずる人なりしことは、其の使徒同曹の中に會計役として拔擢せられし事實に因りて明白なりとす。然れども茲に彼の德性の根底に、一個處の腐敗ありて、其の腐敗が漸次に彼の美德を蝕ひ盡して、其の主一の嗜慾となるに至れり。此の嗜慾は他なし、即ち是れ金錢の嗜慾なりき。彼の瑣細なる監守盜の習慣は、遂に此の嗜慾を助長するに至りたるなり。蓋は彼はイエスが其の友人より受けて以て其の同人の必要を充たし、若くは其の日々相交る所の貧民を賑はせし所の少額なる金錢に對して、恒に此の事を行ひたりし故なり。彼は新王國の起らん日、大藏大臣の位置に坐せしとき、大に其の慾を充たさんと欲せしなり。他の使徒等の目的といへども、當初は皆彼のに均しく世俗的なりき。然れども彼等の其の師と交際してより以後の事情は、彼此全然相違し來り、彼等は漸次に精神的となり、此は獨り愈〻物質的となれり。勿論彼等といへども

イエスの世に在りし間は、世俗的王國の觀念より超絶したる精神的王國の觀念を懷くまでには進歩せざりき。然れども其の師が彼等を敎へて其の各自の物質的觀念に追加せしめたる精神的觀念は、層一層に勢力を得、竟には其の俗情の全く其の中に消滅して、單に空殼のみ遺存し、時來りて全く潰ぶされ、風に吹き去らるゝに至れり。之に反してユダの世俗的希望は層一層に增長し、其の精神的外被は漸々徐々に脫ぎ棄てられたり。彼は其の希望の充たさるゝを待ちかね、說敎と治療とは時間を浪費するに過ぎずとせり。彼又イエスの淸淨と非世俗的なるを憤りて、「彼」は何故直ちに王國を建てゝ、然る後其の欲する所の說敎を爲さゞるやと謂へり。彼は竟に疑ひ起しぬ、彼が望むが如き王國の建設畢竟之れなきに非ずやと。彼は茲に己の欺かれたることを感じ、其の師を獨り輕蔑するのみならず、更に之れを怨恨するに及べり。彼はイエスが彼の日曜日の朝、「彼」に對つて棕櫚の葉を搖りし衆民の意向を利用するを失ちしを見て、イエスに從ふの既や徒勞なることを悟れり。彼は其の船の今既に沈みつゝあるを見て、これより躍り出でんと決し、而して其の主一の嗜欲をも充たし、併せて有權者の愛顧をも買ひ

得る如き方法を執りて、以て其の決心を遂行したるなり。彼の提出は最も好き機會に於て彼等に來りしかば、彼等は大に喜んで之に同意し、彼に約するに其の賞金を以てし、「彼」を賣すべき好機會を得るやう彼を遣り歸しぬ。彼は意外に速に――此の卑劣の買賣を約束せし翌日の夜、此の好機會を看出したりき。

死に面したるイエス

基督信者に取りて最も貴重なる物は、**イエス**が死に面して立ちし最後の一週間に於ける**イエス**の言動に如くはなし。「彼」は恒に言ふべからざるほど偉大なれども、此の厄難に直接したる數日ほど、彼の偉大を示したることなし。大凡「彼」の莊嚴なりし所、大凡彼の柔和なりし所、其の性質中の最も人性的にして又最も神性的なりし所、此の數日に於ける如く顯著に見はれたる事なし。

イエスの**エルサレム**に來るや、其の必ず此處にて死ぬべきことを十分に覺悟したりき。滿一個年の間、「彼」が死すべしてふ事實は恒に前方より「彼」に正面してありしが、此の長く待望せられし事實今竟に來れるなり。「彼」は此の事の父の意志に出でしを知り、時到りしとき其の嚴肅なる態度を以て、其の歩武を死に會すべき場所に向けたり。然れども恐るべき感情の苦悶なくんばあらざりき。多樣の情緒の干滿――沈痛、狂喜、長く久しき挫折の默念、俄然たる勝利の喜樂、莊嚴なる平和の感情、大洋の波浪の如く交る〻「彼」の胸中に往來せりき。

人或は人情の恒なる所の死を退避するの念を、**イエス**に歸するを躊躇する者あり。然れども此れに至當の理由なきや明けし。**イエス**の本能は完く無罪なる本能なり。而して又「彼」の肉體の組織の清淨にして完全なる事實こそ、亦恐らく「彼」の死を忌避するの情をして、反りて吾人よりも甚しからしむるものあらん。彼は三十三の壯年なることを記憶せよ。生命の潮流盛に「彼」の裏に溢れたり。「彼」は今活動的本能に充たされたり。其の强盛なる潮流を逆回せしめ、生命の光と熱とを死の寒潮もて打ち消されんこと、「彼」に取りて如何に嫌忌すべき事とするぞ。彼の月曜日に生起せし事件こそ、「彼」の生命的本能に至大の刺戟を與へしものなりけれ。此の節會に詣で來りし

數名のギリシヤ人、二人の使徒を通じて「彼」に謁せんことを請へり。ギリシヤ語の行はるゝ世界の各方面に於て、當時無神論の哲學と時代の腐敗とを免かれんとして、其の地に居住せる猶太人の宗教に歸依し、エホバ神を拜せる改宗者決して寡からざりき。如上の求道者は此の階級に屬せし者なり。然れども彼等の請願は彼等自身の毫も夢想せざる所の思想を以て、反つてイエスを震慄せしめたり。「彼」の傳道生涯中、パレスタイン以外の地に横はる世界の代表者と接觸せしは、唯兩三回なりしに過ぎず。是れ其の使命の全然イスラエルの家の迷へる羊の上に在りし故なり。然れども此の如き場合に限りてイエスは必ず信あり禮あり敬ふべき求道者に遭遇して、恒に之と對照してイスラエルの不信、粗暴、卑陋を責めたり。「彼」は狹隘なるパレスタインの境界を脱して、斯かる質實、寛大なる國民を訪はんとするの欲望を、如何にして能く制するを得しや。「彼」は幾度か成功の夢、即ちパウロが將來國より國に福音を負ひ、竟にアテンス、ローマを首として西洋諸國に傳敎したるが如き、成功の夢を見たりしに相違なきなり。無限の精力と溢るゝ慈愛に充ちたる所のイエスに取りて、此の如き生涯は、如何に愉快なる生涯なりしか。然れども今や一死は萬事を斷たざるべからざりき。ギリシヤ人の訪問は、「彼」の心中に其の平生の志を奪ふばかりに如上の思望の洪波を起しぬ。然ればイエスは彼等ギリシヤ人に答へんとして未だ答へず、其の心茫然として其の面は忽ち曇り、其の身體は內面の苦悶の激動に震慄すること稍久しかりき。俄然「彼」は自己に返り、此の數日の間其の心底に固定したりし思想を玆に發言せり、曰く「一粒の麥若し地に落ちて死なずば惟一にて存らん、若し死なば多の實を結ぶべし」。又曰く、「我若し地より擧げられなば、萬民を引いて我に就らせん」。「彼」は死の光景の如何に脅逼的、呑噬的なるにも拘らず、死の背後に於て其の獻身の結果の限りなく光榮にして普遍なることは、世界傳道の結果に比して萬々なることを認めたり。然のみならず、死は父の「彼」に命ずる所なりき。此の一事是れ實にイエスの最深最終の慰藉にして、彼は之を以て之と類せる場合に於て例とするが如く、此の場合に於ても亦其の謙遜にして忠信なる心を和めたるなり、曰く「今吾が心憂ひ悼めり、我何をか言はんや、此の時より我を救ひ給へと言はんか、否之が爲に我此の時に至れるなり、父よ願はくは爾の榮を顯はせ」

死は今怕るべき伴侶を從へて「彼」に逼れり。「彼」今や其の自ら選み之を愛せし所の己の弟子の反應の犧牲として落命すべかりき。「彼」の生命は己の國民の手に奪はれ其の意中の京城にて屠らるべかりき。「彼」は實に此の國民を天國に擧げんが爲に來り、此の國民をば過去の歴史と偉人とに親く交はりて養成せし奉公心に因りて愛し、又「彼」自ら彼等の利益の爲に一切の事物を成就せんとする其の情熱の爲に愛したりき。然れども今や「彼」の一死が**パレスタイン**と**エルサレム**の上に其の呪詛を持ち來すを如何ともする能はざるなり。「彼」が將に此の來らんとする禍を如何に明白に豫見せしかは、馬太傳第二十四章の預言の演說を讀む者の齊く知る所なり。此の預言は「彼」が火曜日の午後橄欖山の崖に坐して、其の脚下に横はる禍なる京城を瞰下しつゝ、其の弟子に語れる所なりき。此の禍の如何に「彼」の心を痛ましめしかは、其の前の日曜日に於て示されたりき。蓋は「彼」が凱旋の際にして無數の聚群歡呼して「彼」に隨ひ、此の山道を下る時なりしにも拘らず、「彼」は此の京城を瞰下する所の一點に佇立し、哀み歎きて其の運命を預告したればなり。嗚呼、是は實に此の繁華なる京城の結婚の日、此の神の子に嫁ぐべきの時なるべかりき。然も其の面には青白き死の色見えたり。恰も牝雞の其の雛を聚むる如く、此の京城を其の胸に娶らんと欲せし所の「彼」は、其の目既に其の肉を裂きて喰はんと待ち構へたる猛鷙の、低く空中に翺翔するを認めたりき。

此の一週間、**イエス**は毎晩**ベタニヤ**に起きぬ。然れども實際「彼」は大抵野外に夜を徹したるらし。「彼」は寂閑なる邱陵に彷徨し、山の四際を覆ふ所の林園の間を徘徊し、而して又恐らくは幾回か彼の行列の過ぎ來りし山路を辿りつ、其の昨に佇立瞰下したりし點に立ちて、**ベタニヤ**の村を見越して、月下に眠る**エルサレム**を見て、彼の日群衆を威れしめたりしよりも更に大なる聲を揚げて號泣し、其の昨に**ギリシヤ**人の前に言ひし大眞理を、幾度か反復し獨語せしなるべし。

此の時に當りて「彼」は實に孤立したりき。全世界は「彼」に背き、**エルサレム**は激しき憤慨を懷きて「彼」の生命を求めて息まき、地方より隨ひ來りし大衆は絶望して次第に散じ、其の使徒すらも、其の愛する弟子**ヨハネ**すらも、然り、一人だにも「彼」の實際の位置境遇を毫も理解するものなく、「彼」の意中を委ぬるに足る者なかりき。嗚呼是れ

「彼」に取りて最も苦き杯なりき。是に於て「彼」は他の普通の人と異りて、其の死後猶ほ世界に生くべき必要を感じたり。「彼」が取り起したる事業は死すべからざるが故なり。實や此の事業は全世界を通じ、全時代を貫き、地球上の一切の部分に普及せざるべからざりき。然れども「彼」は此の世を去りし後、之を其の使徒の手に委ねざるべからずして、而して其の使徒は今も猶ほ彼が如く奕弱、冷淡、無識なることを自證せる者なるに、如何にして能く此の事業に堪能なるを得んや。其の一人は變じて賣節漢となりしに非ざりしか。「彼」が死すると同時に「彼」の事業も隨つて滅び—惡魔は蓋し然か「彼」が耳に呟きしならん—全世界を復活せしむべき其の宏遠なる聖猷も、空中の樓閣と等しく銷え失する無きを得たりし乎。

尙且イエスは孤獨ならざりき。林園の深影の裡に、橄欖山の絶頂の上に、「彼」は昔の煩悶猶ほ少なかりける日に依賴したりし天の父を呼び求めて、此の慘憺たる孤獨の日に、猶ほ其の慈顏を發見したり。父「彼」と俱に在りき。「彼」は己の身に起り來る一切の事物は、此の父の完き愛と智慧の指定に出で、而して己の一擧一動は、悉く其の父を顯はし、其の命ずる所の工を成就しつゝありてふ思念を以て、其の動亂する胸を鎭めたり。唯此の思念のみ、能く「彼」の心より一切の恐怖を逐ひて、充たすに言ひ知らざる喜悅と光榮とを以てせり。

終局は竟に逼り來れり。エルサレムに於て萬戸齊く逾越節の羊を食ふ木曜日の夕來れり。イエスも亦十二人と與に之を食せんとて山を下れり。「彼」は此の一夜ぞ此れ其の地球上に在る最終の一夜なると、此の晩餐ぞ己の爲に告別會なるとを知了したり。天幸なる哉、此の告別會の事情は詳細に聖書に載せられたれば、基督信者として之を知らざる者なし。嗚呼是れ實に「彼」の生涯中、最も貴重なる一夕なりき。「彼」の心には言ひしらぬ慈愛と壯大と湧き溢れぬ。無論或る暗影の其の晩早く「彼」の精神を掩へるなきに非ざりき。然れど其の物は速に過ぎ去り、弟子の足を濯ひし事實に、逾越節の食事に、晩餐禮の設定に、祭司長としての一大祈禱に、「彼」の品性の全光榮は發射し出でたり。「彼」は全然其の心を友情の發動するに委ね、其の愛を無限に流露するに任せ、而して殆ど彼等の凡の不完全を忘れたりしかの如く、其の將來の成功と己の事業の勝利の

預想に就て歡喜したりき。今や「彼」の眼界に父の慈顏を遮り、若くは己の事業の將に成就せられんとするを見亘す心の滿足を掩ふ片影だに之あるとなく、恰も十字架の苦難の既に過ぎ、昇天の榮光の既に其の身邊より發射せるかの如く「彼」の心は清亮なりき。

然れども反動は立所に起りぬ。**イエス**は中夜晩餐の卓を起ち去り、街衢を過ぎ、京城の東門を出で、**ケデロン**河を渉りて橄欖山の麓**ゲツセマネ**の園に着けり。是れ「彼」の屢往の地なりき。茲に在りて人を威懼せしむるの苦痛「彼」に起れり。是れ此一週間「彼」の喜悅と信賴の心に對つて、其の勝敗を爭ひ居たりし憂悶の情の最終の襲擊なりき。其の喜悅の情は前に晩餐の席に於て勝利の絕頂に達したりしが、今や時計の搖錘の振り返る如く、反動忽ち來れり。而して此の憂悶は「彼」が生涯離るゝ能はざりし誘惑の最終の攻擊なりき。然れども吾人は此の事實の要素を分析することを憚かる。これ吾人自ら人間の想像が、此の聖なる煩悶の意味を盡さんとするは、到底不可能なるを知ればなり。別して吾人は此の煩悶の主なる要素—「彼」が賠償せんと欲する所の世界の罪の潰倒的、赫灼的壓力をして、最小度にても評量することを如何にして得べき乎。

然れども苦悶は完き勝利を以て終れり。爲なき弟子等は其の接近せる危機に備ふべき燒眉の急場を不覺に眠り過せし間に、「彼」獨り自ら十二分に之に當るの用意を整へたり。「彼」は既に最後の誘惑に打ち克ち、死の苦痛は業已に過ぎ去れり。「彼」は開展し來る舞臺を歩むに、何物も動かすこと能はざる所の平靜と、其の試錬と十字架の死とを人生の矜誇と光榮に變じたる所の威嚴とを以てしたりき。

審問

イエス其の苦悶に克ちて身を起せるとき、「彼」は橄欖の森の間を月影に透かして、「彼」の敵の一隊が「彼」を捕へんとして、今正に對崖の傾斜を降り來るを看つけたり。反逆者**ユダ**其の首領たりき。彼能く其の師の屢往く所を識れり。彼は多分「彼」の眠れる所を發見すべく預期せしならん。彼が此の兇行を行はんが爲に此の中夜を選みたりしは、蓋し此の理由に出でしなり。此の如きは又其の使雇者の心に適へり。何となれば彼等は此の京城に充塞したる**ガリラヤ**人の氣象に辟易したりしかば、**イエス**の肩に

白晝に手を按くことを恐れたりき。然れども彼等は謂へり若し夜の中にイエスの審問を濟まして、朝に及んで人民の起き來れる時此の時晩く、イエスは既に宣告を受けたる罪人として、司法官の手に在ることを示すを得ば、イエスの黨與をして一見畏縮せしむるに足るべしと。是に於て彼等は提灯と松火とを手にして、イエスの何れの洞穴にか臥したるならん、然らずんば森の中を狩り行かざるべからざることを思ひつゝ來れり。意外なる哉、イエスは彼等に會はんとて園の門戸に出で來りしかば、其の威嚴ある目視と力ある言の前に、彼等は腰拔武士の如く畏縮しぬ。然るにイエス、自ら彼等の手に己を附しゝかば、彼等はイエスを曳いて京城に歸れり。時は多分午夜の頃なりしならん。爾來午夜より翌日早朝に至るまで通じて裁判を行ひ濟ませり。彼等がイエスの生命を求むるの渴を速に滿たさん爲なり。

其の裁判は二重なりき。一は宗教上の其にして、他は國法上の其、而して各三段の審理を有せりき。宗教上の裁判は初に祭司長アンナの前に於て、次に祭司長カヤパとサンヒドリムの不形式の委員の前に於て、最後にサンヒドリムの正規的集會の前に於て行はれ、國法上の裁判は初にピラトの法廷に於て、次にヘロデの法廷に於て、最後に再びピラトの法廷に於て行はれたりき。

此の二重裁判を行ふ理由は此の國の政治的境遇に因れる者とす。吾人の既に說明したる如く、ユダヤは羅馬帝國に直隸し、スリア領の一部分を成して、カイザリアに鎭する所の羅馬の知事の管轄に屬せり。然れども其の征服したる國家よりして其の一切の固有の政體を破却するは、羅馬皇帝の政略に非ざりき。彼は御するに辣腕を以てして、其の貢租を收欽すること嚴苛を極め、其の反逆の兆候を壓伏すること嚴急を極め、大事ある毎に其の最上權を確實するに怠らざりしかども、尙且彼は其の屬國に向つて成るべく其の舊時の權威の虛器を擁するを許せり。彼は格別に宗教事項に於て寬大なりき。是を以て猶太國の高等宗教裁判所たりしサンヒドリムの議會は、猶ほ一切の宗教的事項を裁判するを許されたりき。唯其の死罪の宣告を下したる場合に於ては、其の訴訟の知事の再審を經ずしては之を執行すべからずと云ふ制裁ありしのみ。是故に猶太の囚人にして此の宗教法廷に由りて死刑に處せられたる場合には、羅馬の知事が

其の際偶〳〵エルサレムに來り居るに非ざるよりは、其の囚人はカイザリアに護送せられて、其の國法上の法廷に於て死刑の執行を受けざるべからざりき。イエスの訟へられし犯罪は、其の性質上此の宗教裁判所の前に審判さるべきものにして、此の法廷は立どころに死刑の宣告を「彼」に下せり。然れども此の法廷には前に既に述べたる如く死刑を執行するの權能なかりしかば、これを知事ピラトの法廷に交附せり。彼も亦此の逾越節を觀んと欲して、此の時偶〳〵エルサレムに來り居りし故なり。

イエスは先づアンナの官舍に曳き行かれたり。此の人は今七十の老齡にして、二十年前祭司長の職に在りしが、今は其の女聟カヤパが實際の祭司長たりしに拘らず、往〳〵己の後を承けたる五人の子と同じく、今も猶ほ祭司長たる稱號を保有せり。彼は其の年齡と智能と、家族的勢力に因り、非常なる社會的重力を有し、サンヒドリムに對して、形式上の首領ならずといへども、實權上の其なりき。彼はイエスを審問せず唯イエスを見て數問を問はんと欲せしのみ。是故にイエスは早速アンナの廷よりカヤパの廷に送られたり。蓋し二人の官舍は互に相接したりしならん。

カヤパは主なる祭司長として、イエスを審問したるサンヒドリムの議長なりき。此の法廷の合法的集會は、日出、即ち約午前六時以前に開くこと能はざる規定なりき。然れども多數の議員は此の訴訟の趣味に曳かれて、業已に出席しあへり。彼等は其のイエスに對する憎惡の念を滿たさんが爲、並に其の裁判の人民の干渉を受けざらんが爲、早速其の審問に取りかゝらんと急ぎあへりき。是故に彼等は即時に不形式の會議を開き、此の會議に於て提訴、擧證其の他の手續を實施し濟まし、其の戸を開放すべき規則の時間來りし時、唯必要なる形式を反復して、直に「彼」を知事に送り得るやう措辦すべく決心したり。是に於てエルサレムの猶ほ眠れる間に、是等熱心なる裁判官等は、急ぎ其の暗怪なる企謀を追へりき。

彼等は事を啓くに當りて、期待せられし如く、イエスを訴へたる犯罪を說明すること を以てせざりき。そは彼等の中に互に意見の分れたりし故に、然か爲すこと難かりし故なり。看よ看よイエスの生活の中、パリサイ者が犯罪として考ふる所は、サドカイ者の冷眼に看過ぐす所にして、其の他の行爲は、例せば殿を潔めたるが如きサドカイ者

の感情を害したるものは、寧ろパリサイ者の感謝する所なりしなり。

祭司長は先づ其の弟子及び教理に就いて「彼」に訊問せり。是れ提訴の理由として知事の面前に提出すべき、何等かの叛逆的教理を教へしことを發見せんとの目的に出でしや明白なりき。然れどもイエスは憤然として此の詐謀を斥け、其の世人の前に公に教へし事項を明確にして、其の如何なる罪惡を行ひしかの説明と證明とを要求したり。此の案外なる答辯は、議會に侯する或る一人をして、拳を擧げてイエスの口を拊たしめたり。而して議會は之を責めざりき。嗚呼是れイエスが斯の如き裁判官よりして期待し得べき正義の分量の、甚だ微弱なるを示す者なり。其の時「彼」に對して證據を擧げしめんとする工夫行はれ、一群の證據人「彼」が語りし多樣の説話を提出したり。彼等は此の説話の中よりして、訴訟の土臺となるべき口實を捉へ得んことを望みしが皆畫餅に歸し、其の證人自身等の中に、互に異議ありて一致せざりしが、最後に其の中二人の者、「彼」が初年傳道の際に語られし言語を牽强附會し、稍犯罪的着色を帶びたる物として提供するに一致したりき。然も其の事件の瑣細なるや、これを死刑の理由として羅馬の知事の面前に提出するには、餘りに愚なるほどの物なりしなり。

彼等はイエスを殺さんと決定せしかども、其の獲物今や彼等の手より滑り去らんとせり。證據人の擧證の相互に他を打ち消したる間、イエスは唯沈默して觀てありき。「彼」は其の裁判官等よりも遙に高き其の天爵的位次を領有したりき。彼等も亦これを感せり。是に於て議長カヤパは憤慨の極躍り立ちて「彼」に語るべく命じぬ。彼何故に然く高く鋭く呼びしぞ。嗚呼是れ證人席の屈辱と、イエスの威儀ある沈默とが、此の深夜に聚りたる人々の良心をすち、自ら顧みて戰慄せしむる者ありし故なり。

訴訟は全然頓挫せり。其の時カヤパ其の座に起立し、俳優的威儀を裝ひて發問して曰く、「爾キリスト神の子なるか、我爾を活ける神に誓はせて之を告げしめん」と。是れ單にイエスをして罪を犯さしめん爲の發問なりき。然も答辯し得たりし時に沈默したりしイエスは、沈默するを得たる時に答辯し、最も嚴かなる威容を以て、己のキリスト神の子なることを斷言せり。「彼」の裁判官等は此れ以上要むる所なかりき。彼等は異口同音に此の言の神を瀆して死罪に當る物なるを宣告したり。

此の裁判は徹頭徹尾即決的にして、毫も法廷に相當せる形式を省みるが如きことなく、事毎に正義を要求する爲に非ずして、唯罪科を構成する慾望の爲に指揮せられつ、同一人にして原告と裁判官とを兼ね、辯護の擧證の如きは、毫も念頭に置かるゝなかりき。彼等裁判官たる者は、十分に其の宣告の非を悟りたりきとするも、此の宣告たる、眞理に向つて眼を閉ぢ、唯復讐あるを知つて其の他を知らざる彼等の、其の心中に久しく定めし宣告なりけるものを。

今や審判は既に終りし物と視做され、合法的審判は日出でし後、單に形式的に數分間にして濟まされたり。是に於てイエスは死刑の囚人として、剛酷なる獄丁、暴民の手に附され、寧ろ幕を曳きたきほどの酸鼻の光景之に次ぎ、熱血を冷へしむる所の東洋的の暴虐、悪く「彼」の身に加へられたり。サンヒドリムの議員等も亦公然此の暴行に與れり。彼等を抑へ、其の權威を殺ぎ、其の僞善を暴露したりし此のイエスは、彼等の極めて憎む所なり。き冷淡なるサドカイ者といへども、之を激して能く赫怒せしむることを得、況んや狂熱的なるパリサイ者の如き、暴虐の發明者に於てをや。彼等は「彼」を打つて復讐すべきの時機來るや否や、其拳を以て「彼」を打ち、「彼」の顏面に咳唾し、其の目を覆ひて「彼」を打ちし者の誰なるやを預言せしめて、以て「彼」が預言者たるの主張を笑謔せり。—然れども吾人は此の如き人性墮落の幕を語ることを欲せざるなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

彼等がイエスに鎖を屬けて知事の官舍に曳き至りしは、蓋し午前六、七時の間なりき。嗚呼、是れ如何なる觀物なりしか。猶太國民の祭司、教師、裁判官は己のメシヤたる者を携へて、一異邦人に向ひて之を死刑に處せんことを請へり。是れ實に國民自殺の秋と謂ふべし。此の如きは是れ果して神の選民、其の昔神、自ら其の鷲の翼を以て之を負ひ移せし者、其の預言者、救濟者を遣りて之を救ひし者、エジプト並にバビロンより援き出しゝ者、其の目の前に己の榮光を通過せしめし者の爲す所なるか。此の如きは明に神の攝理を嘲笑する者と謂ふべし。然れども神は嘲笑せられざるなり。其の聖猷は不可拒の足歩を以て歴史を通じて進行し、人類の意志を待つことなし。猶太國民が神の經營を笑罵しつゝありし此の悲劇の時間に於てすらも、神は其の智慧と愛

の深度を顯さんと定めたまへり。

イエスの曳かれ來れる審判の座に坐したりし人は、業已に六年間**エダヤ**の知事たりし**ポンテオ、ピラト**其の人なりき。彼は帝國時代の模範的羅馬人にして、質實なる性情に富みし古代羅馬人の其には非ざりき。古代の羅馬人的正義心彼の衷に幾分か遺存したりきとするも、然も彼は快樂主義、權柄的にして、而して又敗德の人なりき。彼は其の統監する所の猶太人を惡み、其の暴怒を肆にする時に當つては、故なく彼等の血を流したり。猶太人は其の憎惡に報ずるに誠實を以てし、而して其の失政、暴虐、强奪の罪を詛へり。彼は成るべく**エルサレム**を訪ふことなからんとせり。何となれば劇場あり、浴場あり、鬪技場あり、浮薄なる交場社會ある羅馬の快樂に慣れし彼には、事々物々嚴肅を意味して、而して叛逆恒に斷えざる所の**エルサレム**は、實に荒涼不安の住處なりき。其の偶〻**エルサレム**に來るときには、必ず**ヘロデ**大王の華麗なる宮殿に館せり。廢王の宮殿を占領することは、被征服國に派遣せられし羅馬の官吏の習慣なりしが故なり。

サンヒドリムの議員と、沿道より聚まり來れる所の群民とは**イエス**を導きて、徑路、池沼、樹木を以て點綴せる美麗なる公園に歸入する所の廣衢を溯り、**ピラト**の官舍に赴けり。法廷は兩翼の搏風を戴く玄關の前の剪り嵌めたる敷石の庭前に開かれたり。猶太人の有權者等は**ピラト**が己等の決議を彼の決議として採用し、訴訟の眞相を問はずして其の願望する處の宣告を下さんことを切望したり。此の如きは屬領地の知事の屢〻之を爲す所、殊に宗教上の訴訟に於て然る所なり。これ宗教上の訴訟は外國人たる者の其の眞相を解し得んことを、初めより待望し得べくもあらざりし故なり。是故に彼が**イエス**に何の罪ありやと問ひしとき、彼等は彼に答へて曰く、「彼若し惡を行せる者に非ずは爾に解さじ」と。然れども彼は俄かに彼等に聽さず、若し彼其の罪人を審理せずんば、彼等は須らく之に羅馬法を科するを以て滿足せざるべからざることを告げたり。彼は幾分か**イエス**の事を知りしが如く見ゆ。彼は「嫉妬に由りて**イエス**を解したりと知ればなり」さ。日曜日の凱旋的行列は、彼に報告せられしや明かなり。而して**イエス**が其の**メシヤ**なることを表彰するに、政治上の目的を利用せざりし一事、

蓋し「彼」が政治上無害なる人物なりしことを、彼に理會せしめて餘ありき。彼の妻の夢想（「彼」につきて多く憂へたりと云へる）はイエスの名が其の宮中に於ける話柄なりしを暗示せり。此の一代の雅客たるピラトと其の妻とは、エルサレム參詣中の退屈を、彼の狂信的祭司等を輕蔑せる所の平民出身の青年宗教家イエスに關する說話によりて、甚だ慰められしなるべし。

猶太人の有權者等は、此の訴訟を形式的に提出すべき希望を沮遏せられて大に失望し、有らん限の訴訟の口實を併發し、其の中三個の明白なる理由を得たり。國民を煽動したること、羅馬に貢賦を納るゝを禁じたること、「彼」自から王と稱せしこと是れなりき。彼等はサンヒドリムに於ては「彼」を冒瀆者として罪に定めたり。然れども此の如き提訴は其のピラトに取り扱はるゝこと、恰も後日コリントの猶太人が其の使徒パウロを訴へしとき、羅馬の知事ガリオが殆ど之を省みざりしが如くなるべき事は、彼等の能く知る所なりき。是故に彼等は羅馬政府の公敵としてイエスを說明し得べきか如き他の新しき口實を發明したり。然も彼等は然かする爲に獨り法外なる僞善に趨りしのみならず、故造の虛構にすら墮ちて恥ぢざりしこと、之を思ふだに恥辱に耐へず。これ其の理由如何となれば若し然かするに非ざるよりは、前週の火曜日に羅馬帝に貢租を納るべきや否やと云ふ彼等の疑問に、イエスの如何に答へたりしかを記憶したる以上、前の第二の口實を提出すること能はざりし故なり。

ピラトは羅馬の權力の爲に假面的熱心を表せる彼等の內面を能く了解せり。彼は羅馬に貢租を納むべしと云ふ彼等の熱烈なる主張の價値幾何なるやを十分に看破せり。彼は暴民の狂呼を避けんが爲に其の座を起ち、イエスを檢案せんが爲に「彼」を宮殿內に曳き入れたり。ピラトこそ自ら知らざれ、此の一刹那は彼自身の爲に最も莊重なる時なりき。思ひ看よ此の際此の場合までピラトを携へ來りし運命は如何に恐怖すべきものなるか。當時帝國の全地に散布せられたる羅馬の官吏數百人、皆ピラトの生活を指導する所の快樂主義を以て、其の生活を追へる者なり。然るに彼ピラト獨りイエスに對する訟を聽くに至りしものは、抑も如何なる運命ぞ。然も彼は其の裁判の結果に就いて、何等顧慮する所なかりき。彼はイエスを以て他の四人よりも唯少く趣味あり、

少く面倒なる者と思惟せしならん。然れども「彼」は毎日彼の手に交附せらるゝ數百人中の唯一人なりき。彼は己裁判官なれども、己と其の代表する所の主義が、己の裁判する所のイエスの爲に、即ち其の完全なる聖德を以て、己に接近し來る所の凡の人、凡の主義を裁判する所の「彼」が爲に、却て裁判せられつゝあることを知らずして、イエスに向つて提起せられたる訴訟に關して「彼」を審理し、殊に「彼」は王と稱せしや否を問へり。イエスは之に答へて何等政治上の意義に於て王たるに非ず、唯精神的意義に於て眞理の王たることを曰へり。此の答は其の生涯を眞理の探求に費す所の稍高尙なる異教者の精神を捕ふるに足るものなるが故に、イエスは特にピラトの心に諷示し感悟する所あらしめんとて、此の答を爲しゝならん。然れどもピラトの心には平素此の如き慾求もなかりしかば、彼は之を一笑に附して止みぬ。然れども彼が豫め想像したりし如く、イエスの淸淨、平和、沈欝なる容貌の背面に、何等煽動的、即ちメシヤ的叛逆の事實の伏在せざることを看破しゝかば、庭前の法廷に復り來りて、イエスを放免したりしことを彼等提訴者に宣告したり。

此の宣告は失望的憤慨の絕叫と、イエスに對する口實の反復とを喚び起したり。是は全然猶太人的光景なりき。狂信的暴民を敎唆して、喧噪と執拗の抑壓を以て、外來主治者の志望と決議とを壓倒せしむるは、是れ彼等の慣用手段なりき。ピラトは此の際イエスを放免すると同時に之を保護せざるべからざりき。然れども彼は彼を人となしゝ所の主義たる權謀術數の愛兒なりしかば、其の耳を貫く喧囂の中に、此の事件を一掃し去るべき口實を提供する所の一言に、好んで耳を傾けたり。曰く此のイエスは「ガリラヤより始めて、遍くユダヤを敎へ、此の處まで來りて民を亂せる者なり」と。玆に偶ガラリヤの統監ヘロデ、エルサレムに在りしかば、彼は此の面倒なる訴訟事件を彼の手に移して、其の煩累を一掃するを得べかりき。是は羅馬法の普通の手續に由れば、罪人は之を其の捕縛せられたる領地の法廷より、其の住居せる領地の法廷に移すべきものなりし故なり。是故に彼はイエスを護衞兵の手に托し、之に其の不屈の提訴者を伴はしめて、ヘロデの宮殿に送り遣れり。

ヘロデも亦此の時此の節會を訪はん爲にエルサレムに來り、其の諂諛者と朝臣等に

擁せられたる一小朝廷の中に在りて、其の外國の君主に摸擬し作れる護衛兵に圍繞せられたり。彼は其の名の久しく其の領内に傳稱せられし**イエス**を見ることを甚だ喜べり。彼は摸範的東洋君主にして。其の生涯の唯一の懸念は自己の快樂と安佚の追求に在りき。彼が此の逾越節に來りしは物好より出でたるなりき。**イエス**の出現は**ヘロデ**と其の朝臣等が甚く渴ける其の渴望を充すべきやう見えぬ、是れ他なし、彼等は**イエス**が奇蹟を行ふを見んことを久しく望みたりし故なり。彼は一切の事件に對して莊重なる見解を立つること能はざる底の人なりしかば、猶太人が斯くも熱心せる此の訴訟すらも、唯漫然に看過ぐし去り、**イエス**に向ひて無益なる雜問を他の答ふるをも待たずして續發し、其の自ら問ひ盡したる後、始めて他の答の如何なるかを待ちたりき。然も事は徒勞に屬し、**イエス**は一言も彼に答へざりしなり。**ヘロデ**は既に己の**バプテスマのヨハネ**を殺したることを忘れたり。如何なる印象といへども彼の不德なる心に於ては恰も水の上に書く文字に異ならざりき。然れども**イエス**は之を忘れざりき、**イエス**は即ち謂へらく、**ヘロデ**たる者は當に**ヨハネ**の友なる己の面を見ることを恥ぢざるべからずと。然も彼は毫も自ら恥づる色なかりしなり。**イエス**も亦己を奇術師として待遇するが如き人に諛びて、其の技巧を示して以て彼裁判人の恩典を買はんとは欲せざりき。「彼」は此の漢子が何等良心、品性の形迹を遺す所なきまでに、自己を濫用し盡したる其の不德の現狀を見て、愁然として羞ぢざるを得ざりき。然も**ヘロデ**の心に在りては、此の如き沈默の輕蔑の威力を感ずるの能力絶無にして、反つて其の兵隊と與に「彼」を藐視し、其の肩に白衣を投げかけて、之を**ピラト**に遣り歸しぬ。此の白衣は羅馬の獵官者が着る所の其に擬せし者にて、其の意味は**イエス**は猶太の王位に對する一介の獵官者にして、此の如き憫笑すべき者を待つには、此の如き輕侮の外あるべからずと云ふことを示せるなりき。然れば**イエス**は此の假裝のまゝに再び**ピラト**の法廷に疲れし歩を運び返へしぬ。

茲に**ピラト**は再び其の裁判を開始したり。此の裁判に由りて、彼は反つて其の裁かんとする**イエス**の光に輝らされて、己の一個阿世的偶像に過ぎざることを百代の後まで示せり。**イエス**が**ヘロデ**の許より歸りしときに、**ピラト**の義務は「彼」を放免するに

在りき。然るに彼は之を爲さず、反りて便利主義に赴き、一歩一歩譎詐的歩武を踏み、竟に正義と正反對なる斷崖より俄然墜下するに至りしなりけり。彼は己と**ヘロデ**と倶に無罪なりと認めし所の**イエス**を、笞ちて釋さんと提議せり。嗚呼鞭笞は彼等猶太人に喰はする羹汁にして、放免は正義の要むる租稅なるか。

然れども此の奇怪なる提案の實施は、彼を其の難局より拯ひ出すに猶ほ一等恰好なる活路を與ふべき一事件に因りて遮斷せられたり。即ち逾越節に當りて猶太人の要求する一個の囚人を人民に放與する、羅馬の知事の慣例是れなり。此の恩典は**エルサレム**の民の甚だ高く評れる特權なりき。其の故如何となれば、外國の羈縛に對して叛逆を企て、自ら**イスラエル**民族の豪傑として其の勇敢を顯はしたる者、牢獄の中に甚だ多く之ありし故なり。**イエス**の裁判今此の一段に及ぶに至り、市井の無賴漢大巷小路より溢れ來り、官廳の前に漲り、此の歳賜の爲に感恩の叫を揚げたり。**ピラト**は其の不愉快なる位置より遁るべき活路を得たりと思ひしかば、彼は先づ其の叫を喜び聞けり。然れども其は直ちに一變して彼が首を突きこむ所の係蹄となれり。彼は既に**イエス**の生命を暴民に與へたり。彼等は一時躊躇したり。然れども彼等は元來己の愛顧せる一人を有せり。是れこそは羅馬の主權に對して叛逆を企てたる著名なる巨魁なりけれ。而して此の際又彼等の耳より耳に電馳する所の聲ありき。これ彼等をして**イエス**を接けざらしめんとする巧なる勸誘を意味せる聲なりしなり。**サンヒドリム**黨は昨に法律と秩序とを愛する熱心を示したりし其の口を以て、今は一揆の戰士の身方たることを、然かなして證するを遲疑せざりき。而も彼等は容易に人民の心に注毒するに成功し、民衆は齊く彼等の豪傑なる**バラバ**を赦せと叫びぬ。**ピラト**は然らば「**イエス**に我何を處すべきか」と問へり。其の意固より彼等が「亦彼をも赦せ」と曰ふべしと預想したり。然れども彼は全く事を誤れり、有權者は既に巧に其の工を成したり。一萬の衆齊く叫んで、「彼を十字架に釘けよ」と曰へり。此の聲是れ其の首領の裁判に委ねし國民全體の聲なりしなり。**ピラト**は全く沮喪しつ、慚憤して曰く「彼何の惡事を行しゝや」、然も竟に其の裁決を彼等の手に放擲せり。彼等は今殆ど狂亂して叫ぶらく、「彼を除け、十字架に釘けよ、十字架に釘けよ」。

然れども。ピラトは猶も全く正義を枉げんとは思はず、猶ほ「彼」を助けんと欲したりき。然れども同時に「彼」を遣りて鞭たれしめたり。嗚呼是れ十字架に釘くる普通の順序なりき。兵隊は「彼」を其の營舍に曳き、「彼」を苦めて以て其の暴虐的本能を飽かしめたり。吾人は見るも忌はしき此の刑罰の羞辱と苦痛とを記することを欲せざるなり。嗚呼、人生を尊み之を愛したるイエスは、此の粗暴なる人々に交附せられ、而して親しく此の人性の極めて獰惡なる發露を見て、果して如何なる感慨を起したりとするぞ、兵隊は此の事を爲すを喜び、暴虐に重ぬるに侮辱を以てし、既に鞭ち了りし後、「彼」を地に坐らしめ、陳びたる上衣を持ち來り、之を王の紫衣に擬して「彼」の肩に投げかけ、葦を笏の代として其の手に突きつけ、隣接の林叢より棘榛の樹を折り來り、之を冠冕の形に編み做し、之を冠らせて其の刺を額に推し附け、然かして後交る〴〵其の前を過ぎて跪拜し、同時に其の面に咳唾し、又其の手より葦を取りあげ、之を以て其の頭と面とを擊てり。

彼等は竟に其の暴酷の情を飽かしめたりしかば、イエスに再び荊棘の冠冕と紫衣とを着せて之を法廷に送り還へせり。群衆は兵隊の惡戯を見て、笑つて哄喊の聲を揚げたり。ピラト亦其の面に嘲笑しつゝ、イエスを前面に突き出し、萬人の視る所とならしめて呼んで曰く、「見よ是れ其の人なり」と。彼は謂へらくイエスに罰を加ふるは業已に無用なり、彼等がイエスを除かんとするは徒勞に屬す、此くまで苦められ辱められたる者能く何等の害をか爲さんと。彼は毫も自家の言ふ所を解せざりき。荊棘を冠れるイエスに對する彼の一言は、其の聲全世界に響き、其の肉破れたる顏面は、凡の人類の視線を引けり。看よ看よ今日吾人之を見れば、其の侮辱、嘲弄は既に過ぎ去り、既にイエスの肩を離れて、ピラト自身の上に落ち、兵隊、祭司、暴民等自身の上に落ち、イエスの身より發射する光耀は、其の耻辱の汚點を燒き盡して、同じ荊棘の冠冕を赫灼たる榮冠に變せり。然り而してピラトが此のイエスの憫笑すべき無聊の狀態が、彼等の復讐的渴望を滿たすならんと想像するに當つては、彼は未だ毫も其の統治する所の民人の氣質を解せざりし者と謂ふべし。彼等のイエスに反對せるは、其の此く無害憫笑すべき人にして、自ら彼等のメシヤたることを主張することに在り。而し

て今や外國兵士に鞭笞せられ、嘲弄せられて、猶ほ彼等の王たることを主張するを見て、彼等の憤慨は極點に達し、其の聲愈〻益〻激しく「十字架に釘けよ、十字架に釘けよ」と狂呼せり。

此の時に及んで彼等は竟に**イエス**に對する本訟を暴露せり。是は今まで始終其の胸中に鬱勃したりし物にして、彼等は既や一刻も之を制ふること能はざるに至りしなり。看よ看よ彼等は竟に叫けべり、「我儕に律法あり、其の律法に從へば彼は死ぬべき者なり、蓋は彼自己を神の子と爲せばなり」と。此の一言彼等の思ひ知らざる所の**ピラト**の心底の琴線を打てり。彼の母國の古傳に據れば、諸神の子たちが普通の人間と異ならざるやう其の身を微して、人間世界に微行せりと云ふ神話ありて、若し此の神の子に害を加ふる時は、其の父祖たる諸神の赫怒、其の惡人の上に加へらるゝが故に、此等神の子に遭ふは甚だ危險なりと傳へり。此の神話に對する信仰も、此の如き神話的說明を要するがごとき、普通の人間と異なりたる他種の人の絕えて世上になかりしが爲に、竟には寢やく消滅し畢りぬ。然るに**ピラト**は今此の**イエス**に於て、或る不可解なる事物の具せるを看破し、其の胸中に窃に漠然たる恐懼戰慄を懷けり。今や「自己を神の子となり」と曰へる彼等暴民の一語、彼の耳より心に閃めく電火の如かりき。此の一語、彼の記憶の潛伏所よりして既に埋もりたる幼時の談話を喚起せしめ、併せて知らず識らず天神の激怒を惹起すべき犯罪に關する異教的戰慄を復活せしめたり。

これ實に**ギリシヤ**の最大演劇の若干の由つて起る所なりしなり。彼異教者の心中窃に謂へらく、此の**イエス**こそ實に希伯來の**エホバ**神の子なるなきを得んや。恰も**カストル**と**ポラツクス**が**ギリシヤ**の**ジユピター**の子なりしが如く、然るなき乎と。彼は俄に**イエス**を曳いて再び宮殿の內に入れ、新なる畏懼と好奇心とを以て、**イエス**を觀て問ふて曰く「爾は何處の者ぞ」。然れど**イエス**は彼に答へざりき。**ピラト**は**イエス**が彼に一切を說明せんとするに當りて、「彼」の言に耳を傾けざりき。彼は既に**イエス**を笞ちて以て自個の正義の觀念を害せり。人若し**キリスト**の己に語るに當りて其の背を示さば、己問ふとも答を得ざる時來らん。**ピラト**も今其の時に濱めるなり。倨傲なる彼は**イエス**の答へざるを見て、且怪み且怒り、要問して曰く、「我に答へざるか、我爾を十字架

に釘くる權威あり、又爾を釋す權威あり、此の事を知らざる乎」と。**イエス**は其の十字架の獸性的凌辱の爲に、何等心を動かさるゝことなく、筆すべからざる威嚴を持して答へて曰く、「爾上より權威を賜はらずば我に對ひて權威ある事なし」と。

ピラトは其の囚人に對ひ、己の好む所を行ふべき權威あることを誇示せりといへども、其の實彼は甚だ薄弱なりき。彼は**イエス**を放免すべき決心を懷きて、私室の審理より起ち來りしに、猶太人は其の顏色を見て其の心象を察し、竟に其の久しく胸底に藏めたりし最後の武器を投げ附けたり。即ち彼を皇帝に訴へんと云ふ威赫是れなり、彼等は此の意趣ある呼號を以て、**ピラト**の一言を遏止せり。曰く「若しこれを釋さば**カイザル**に忠臣ならず」と。蓋し**イエス**の審理の際、始終彼の心と彼等の心に伏在したりし者は此の意思なりき。彼をして然かく優柔不斷ならしめたるも亦實に此の意思なりき。此の羅馬の知事を畏縮せしむるもの、其の臣民の己を皇帝に訴ふるに如くなかりき。而して當時殊に危險なりしは當時の皇帝**ダイベリアス**は病的にして而も猜疑心深く、其の臣僕を凌辱することを樂とする所の暴君なりし故なり。**ピラト**も亦己の失政の檢察に勝ふる能はざるを知悉せり。是れ彼の政治の極めて暴虐にして汚敗したりし故なり。人の善事を爲さんとするに當りて、之が妨害を爲さん者は其の人の過去の惡事に如くものなし。今や**ピラト**が其の良心の聲に遵ひて斷行せんと欲するに當りて、彼を其の兩脚より吹き仆す誘惑の暴風は、即ち彼の過去の惡事なりけり。彼は如何なる高價を拂ひても其の確信を斷行する如き英雄に非ざりき。彼は當時の世界の通人にして、即刻**イエス**を彼等の意志に一任するの甚だ必要なることを看破したり。

然れども彼は斯く窘しめられたるが爲た唯に憤激せしのみならず、又一面には壓迫し來る嚴肅なる惶懼をも感せしかば、水を命じて民衆の面前にて其の手を濯ひて曰く「此の義者の血に我は罪なし」と。彼は其の臣民を鎭撫すべき時に其の手を濯へり。然も**イエス**の血は然かく容易く濯ひ去ること能はざるなり。暴民群は今や十二分の勝利を占め、彼の踟躕を嘲弄し、大聲を揚げて曰はく、「其の血は我等と我等の子孫に係るべし」と。

ピラトは甚く衆民の嘲弄を感じ、其の憤激を彼等に遷し、己も亦勝利を占めんと欲

し、**イエス**を衆人の前に突き出し、彼等が**イエス**を己の眞王と思惟したる者として彼等を嘲笑して曰く、「我爾曹の王を十字架に釘くべけんや」。今や嘲弄の刺を感ずるは彼等の順番となれり。彼等乃ち叫びて曰く、「**カイザル**の外我儕に王なし」と。嗚呼、是れ猶太人の口より出でたる何たる自白ぞ。此の如きは國民の自由と歷史の降伏なりけり。**ピラト**は彼等の言を納れて、直に**イエス**を釘くべく彼等に附したり。

磔刑

サンヒドリムの議員等は**ピラト**の手より其の獲物を挽ぎ取りて「彼」を曳き往けり。彼等は今竟に其の憤懣の情を極端まで滿たすことを得べかりしかば、有らゆる殘酷なる勝利の記號を持して、死刑執行の場所に「彼」を追ひ遣れり。實際の執行者は羅馬の鎭營の兵隊なりき。然も其の精神的意義に於て、其の行爲は純然に猶太の有權者に屬せり。彼等は其の執行の責任を、其の律法の文字に一任する能はず、**イエス**の十字架上に苦む狀態を見て、其の積もれる欝憤を霽さんと欲し、自ら熱狂的醜態を呈して、其の行列に先てり。

此の時正に午前十時の頃なりき。宮殿の中なる群勢は愈〻益〻加はり來りき。**サンヒドリム**黨の先導せる殺氣的行列の街頭を過ぐる間、大衆又更に附き加はれり。時は恰も逾越祭の聖日なりしかば、數千の休業者事あれかしと待ち設けたりしかば、彼等は皆有權者の狂態に鼓吹せられて、**イエス**の死刑を見んものと溢れ出でたり。是故に**イエス**は暴酷非情なる無數の傍觀者の中を通りて死地に赴けり。

彼の懸けられし場所は今指定する能はず、其は必ずや市門の外にして、普通の刑場なりしや明亮なり。其の刑場は通常**カルバリ**山と稱せられたり。然れども聖書には此の名稱を認むべき何等の記述あることなく、且此の死刑の行はれたりと想はるべき場所の四隣に、一個の丘陵あるを見ず。**ゴルゴタ**即ち髑髏なる名稱は、同一形狀の土瘤を意味するを得。然れども之よりも寧ろ其の場所に起れる許多の悲劇の死骸の棄てられて、横はれるを指示するの更に事實らしきを見る。其の場所は蓋し廣濶にして多數の觀者の聚會し得る地なりしなるべく、而して同時に又其の往來頻繁なる通路に傍ひたりし

なるべし。蓋は停立せる傍觀者の外に、他の通行する者も亦與に此の「受難者」を嘲笑しつゝ往き來りし故なり。

磔刑は言語道斷、懾るべき死刑なりき。親しく之を目擊したりしシセロは、之を總べての刑罰の中最も殘酷にして醜辱なる刑罰なりと曰へり。彼は猶ほ附加して曰く、「此の刑罰をして羅馬人の身體に觸れしむる勿れ、否其の心にだも目にだも耳にだも觸れしむる勿れ」と。此の刑罰の猶ほ存せられしは、其の叛逆人、及び奴隷の死骸に汚名を加へん手段たるが故なり。活ける人を斯かる觀玩の位置に懸くるほど不倫にして忘はしき事物あるなし。此の如き觀念は蛇蝎の如き惡蟲を釘殺し、之を公に暴露して、以て復讐の快樂を取りし習慣より暗示せられしものなるべく、設令其の生命をして其の肉に釘つと同時に絶たれしむるも、猶ほ威るべき死たるを免れず。況んや其の犧牲の通常釘たれたる手足の陰痛と、充血したる脈管の痛楚と、猶ほ甚しきは着々加はり來る耐へ難き渴喉を持して、二日三日も生存するに於てをや。況んや更に刻一刻新しき苦痛の起る毎に之を避けんとするも、身を動かす能はずして、一擧一動悉く新なる

疼痛の原因となるに於てをや。

然れども吾人は今此の震慄すべき光景より轉じて、イエスが、如何に剛毅なる精神强靱なる忍辱と愛とを持して、此の十字架の恥辱と殘酷と恐怖とに打ち克ちたるかを案ずるを喜ばざる能はず。恰も夕陽が其の燦爛たる光榮を以て敗池敗溝を金水に變じ、其の光耀に當る凡の汚物を美化する如く、「彼」は此の世の卑賤なる物、姦惡なる物の記號なる其の十字架を變じて、此の世の最も高潔なる物、光榮なる物の記號となしたり。今や「彼」の身は動くこと能はざるも、其の頭は自由に垂れて、己の脚下に起る所の事物を見得るのみならず。又自由に言語することを得たり。「彼」は時を隔てゝ七言を發せり。此れ皆載せて聖書に在り。嗚呼是れ實に吾人が今日猶ほ「彼」の心情を觀、此の十字架が「彼」に銘せし印象を見つべき七の窓戸なりき。此の七言はイエスが昨日其の審問を受くるの際に表彰したりし平靜と威嚴とを、此の際猶ほ害ふなくして維持せることを證し、「彼」が從來其の德性を顯著ならしめし所の一切の品質を最も圓滿に發揮したり。「彼」は其の苦痛に克つにストイク者流の冷酷を以てせず、自個を忘るゝ愛

を以てしたり。「彼」は其の十字架を負ひつゝ悲哀の道に惱むに當りて、**エルサレム**の女子と其の小兒に對する配慮の爲に己の疲勞を忘れ、其の十字架に釘けらるゝに當りて、己を殺す罪人の爲の祈禱に心を奪はれ、其の磔刑の發初の楚痛を、悔改せる盜賊に對ふ喜憂、其の生母に新家庭を供ふる懸念の爲に忘れたり。**イエス**は實際此の時ばかり他人の利害の爲に自個を沒し、絕對的に博愛なる救主たりし事なし。

イエスは唯「彼」の愛を傷くるに由りてのみ能く傷くるを得、其の肉體の苦痛の如きは如何に劇甚にして又延長したりしにせよ、他の多數の受難者の苦痛より大なることなからん。唯其の體格の精妙なるが爲め、其の苦痛の他に比して甚しかりしならんと思はるゝのみ。看よ「彼」は常人が二三日生存すべき十字架に於て、最も短く、唯五時間を出でずして死したり。「彼」の足を折らんとて來りし所の兵卒は、「彼」の既に死にたるに一驚を喫せり。**イエス**に於て最も慘痛なるは精神の慘痛なりき。**イエス**の生命は愛なりき。「彼」の愛に渴けること鹿の豁水を喘ぎ慕ふが如くなりき。然るに今や苦く暗き憤恨の怒潮「彼」を圍繞し、狂瀾、激浪を其の十字架の下に捲き上げたり。「彼」の靈魂は清淨にして點塵を着けず、其の生涯は至聖なりき。罪は恒に「彼」に觸れんとて壓迫し來れり、然れども「彼」の筋肉は忽ち退避して即かざりしなり。**サンヒドリム**の議員は率先して其の輕蔑的、惡意的憤慨を漏し、人民亦皆忠實に其の例に倣へり。此等の人々は「彼」が焰ゆるが如き至情を以て愛したりし者、今も猶ほ愛する者なりき。然して此の「彼」の愛を讒謗し、破壞し、蹂躙する者、即ち此等の人々なりしなり。生涯**イエス**を襲擊したりし所の惡魔は、今彼等の口を藉つて其の誘惑を貳びし、其の奇蹟の力を發して己を救ひ、國民の信用を贏ち得よと曰へり。其の面に怒を含みて**イエス**を環視する所の蜂起的群衆は、是れ實に人類の罪惡の梗概と見るべし。**イエス**の眼は十字架上より之を瞰下し、其の粗暴、其の狂妄、其の冒瀆、其の人性の醜辱の發溢を見て、「彼」の胸に聚まる痛感一束の矢よりも鋭かりしならん。

猶ほ更に奧深き悲哀ありき。今や世界の罪は獨り其の身邊よりして至仁至聖なる、「彼」の心に壓迫し來るのみならず、更に遠方より即ち遠き過去、遠き未來、遠き距離よりして、齊く來りて其の上に聚まれり。「彼」は世界の罪を負へり。而して「彼」の至仁

至聖の光の反對面たる神の烈火は、其の罪を燒き盡くすべく「彼」に向つて燃え起ちぬ。罪を知らざる「彼」をして、吾人に代りて罪せらるべく「彼」をして苦ましむること、是れ主の心に適へるなりけり。

如上是れ吾人を驚殺する所の十字架の苦痛なりき。然るに「彼」は約二時間にして更に其の眼を外界より閉ぢ、之を永遠界に向つて開けり。同時に異常なる暗黑、地上を掩ひ、**エルサレム**は俄に神の審判來れるかの如く、暗澹たる雲影の下に戰慄し、**ゴルゴタ**は殆ど神に見棄てられたる狀態なりき。「彼」は外界の闇黑と內界の闇黑との中に唯久しく沈默したりしが、遂に人の思想の測るべからざる沈痛の淵より叫び出だせり、「吾が神吾が神何ぞ我を棄てたまふや」と。嗚呼是れ受難者の靈が其の非命の死の底に觸れたる一刹那なりけるなり。

然れども其の闇黑は地より移りて日光再び照り出でたり。**キリスト**の靈も亦其の日蝕より出で來れり。「彼」は最終の苦悶に打ち克ちたる勝利の勇氣に充ちて叫べり、「事終りぬ」と。然かして「彼」は完全なる平靜の裡に、其の愛誦せる詩篇の一句を吟じて、其の最終の呼吸を曳きぬ、「父よ吾が靈を爾の手に託く」と。

復活及び昇天

蓋し此の世界に於ける事業にして、**イエス**の事業ほど忽然として其の終を告げし者なし。「彼」の事業は最終の舊約的安息日に於て俄然として其の終を告げたり、基督教は**キリスト**と與に死して「彼」と與に墓に葬られたり。吾人は固より此の二千年の後を回顧し、其の墓の口に轉ばされたる大石を見ても、何等の失望を感ずることなし。何となれば吾人は此の攝理の秘義を知り、後に何事の起り來らんかを知ればなり。然れども發初「彼」の新に葬られしときに當りては、「彼」が再び此の世の審判に先ちて、復活すべきことを一人として信ずる者無かりしなり。

猶太の有權者は全く此を以て其の心を滿足せしめたり。**イエス**の死は一切の諍論を葬り、彼等と**イエス**の間の事件を彼等の勝利に向つて決定せり。**イエス**は彼等の**メシヤ**として、自己を顯はしたりしかども、斯かる主張に適へる者として、彼等の認むべき

何等の休徴を示さゞりき。**イエス**は未だ嘗て重要なる國民的認識を受けざりしなり。「彼」の弟子等は少數にして、而して又無勢力の徒のみなりしなり。「彼」の生涯は短數にして、今既に墓に入れり。之より以上「彼」に就いて何等考慮すべき事物なかりしなり。

弟子等の挫折に至つては其の極に達したりき。**イエス**の捕拿せらるゝに當りてや、「彼等は皆「彼」を棄てゝ遁げたり」。勿論**ペテロ**は獨り祭司長の邸まで**イエス**を慕ひ往きしが、其の結果餘の弟子等よりも一倍破廉恥の失體を招きたり。**ヨハネ**は獨り**ゴルゴタ**まで從ひ往き、其の最終の一分間までも、「彼」が十字架より降りて**メシヤ**の榮位に即くべしてふ、望なき望を持したり。然れども最終の時既に至りて、何等の珍事も起らざりき。彼等に取りては憫然たる失望漢として其の故郷と漁業に返らん外、何等の爲すべき事ありや、誰か其の餘生を投じて此の僭稱者の足跡を追ひ、「彼」が汝等に約束せし十二の位は安くに在りやと憫笑せらるゝの愚を演せんや。

無論**イエス**は其の受難と死と復活に就いて預言せしこと數次なりき。然れども彼等は毫も此等の言辭を解せず。或者は之を遺忘し、或者は之を比喩語に轉解したり。而して**イエス**の現實に死せるに當りては、此等の言語今更に何等の慰藉をも提供せざりき。茲に數名の婦人あり、最初の新約的安息日に於て**イエス**の墓に來れり。是れ其の目的は其の墓の空しからんことを見る爲に非ず、茲に永眠する**イエス**の體に膏を塗らん爲なりき。**マグダラのマリア**倉皇使徒等に告ぐる所あるべく走りぬ。これ**イエス**が復活したるを告げんとに非ず、**イエス**の死骸の取り去られて、其の所在を知らざることを告げんとなりき。此等の婦人が其の**イエス**を見たりしことを、他の弟子等に告げしに當り、「使徒たち其の語れる所を虛誕と意ひて信ぜざりき」。**ヨハネ**が自ら錄せる如く、彼も**ペテロ**も「錄して**イエス**の死より甦るべき事あるを彼等いまだ知らざるなり」。何物か又**エマオ**に向ふ二弟子の語より哀むべきものあらんや。曰く「我等**イスラエル**を贖はん者は此の人なりと望みたりし」と。弟子等が一に聚まりしとき、「彼等哭き哀めり」とあり。蓋し世上未だ嘗て**イエス**の弟子等の如く失望落膽せしものなからん。

然れども吾人は今日寧ろ彼等が然かく哀みたりしことを喜ぶことを得、何となれば彼等が疑ひしは吾人の信ずるを得ん爲なりし故なり。看よ看よ僅に數日の後に於て此

の失望落膽に沈みし人々にして、確信と歡喜とイエスの復活の信仰に盈たされ、一たび其の終を告げたりし基督教の事業が、其の前に把持せしよりも數倍巨大なる活氣を以て進展し始めたるは何が故ぞや。彼等は曰く是れイエスの復活したるが故にして、彼等は親く之を見たりと。彼等は親く其の空洞なる墓を見たること、イエスがマグダラのマリアに顯はれしこと、其の他の婦人等に顯はれしこと、ペテロに顯はれしこと、エマオに向ふ二人に顯はれしこと、一時其の十一人に顯はれしこと、五百人に顯はれしことを語れり。此等の傳說は果して信憑すべき物とする乎。若し其の傳說のみ孤立したらんには、信憑すべからずと謂ふことを得べし。キリスト復活の確說は爭ふべからざる基督教復活の事實と併立せり。若しも前の事實を以てせずんば如何にして後の事實を說明すべき乎。人或は曰はん、イエスは其の實現するを誤りし帝國建設の夢想を以て、彼等の心に注入し、而して彼等一たび「彼」の堂々たる進達を見て、復た其の賤しき魚網に返ること能はず、竟に此の如き傳說を脚色して以て其の目的を達したるものならんと。又或は曰はん、彼等は其の謂ふ所のイエスの復活の事實を目擊したりと妄想せるのみにして、實は目擊したるに非ずと。然れども茲に驚異すべき事實は是れなり、即ち彼等がイエスに對する信仰を復活せしとき、彼等の追求する所の事物は既や現世的、物質的目的に非ずして、熱烈に精神的目的を追求せるを見る是れなり。彼等は復たび此の世の最高の位置を待望せず、返つて世間の迫害と死を待望せり。尙且彼等は喪心したるものに非ず、廣濶なる智慮と大膽なる熱心と、其の前に見聞せざりし將來の結果に對ふ確信とを持して、各〻其の新事業に自己を當てたり。キリストが靈化的身體を以て死より復活したる如く、基督教も同時に靈化的復活を遂げたり。然り基督教は全く其の肉の身體を脫げり。何物が斯の如き結果を生じたる乎。彼等は答ふ、キリストの復活を擧證するに足らず、其の爭ふべからざる確證は、即ち變化其の物に存す、即ち彼等が俄然勇氣を得、希望を得、信仰を得、智慧を得、世界の將來に於ける高尙有理なる見解を把持し、而して敎會を建て、世界を敎化し、人類の中に純粹なる基督敎を起すに耐ふる原動力を與へられし事實是れなり。彼の最終の舊約的安息日と僅々數日

を經たる此の時期の間に、此の如き爭ふべからざる一大變化の起りたるに於ては、此の如き至大なる結果を生ずるに足るべき至大なる原因として思惟せらるゝ何等かの一大事件の、其の數日の間に介在したるべきは疑ふべからざる事なり。而して唯復活の一事のみ此の問題に應答す、是故に此の事件は古來の有らゆる事件よりも數等明白なる論辯に依りて證せられたり。(譯註、暗に**パウロ**の哥林多前書第十五章の辯證の如きを指せり)此の事件が此の如き辯證に當るに足ることは、至幸なる事と謂ふべし。何となれば若し**キリスト**復活せざりしならば、吾人の信仰は徒爾たるのみ。然れども**キリスト**果して復活したりしならば、其の奇蹟的生涯の全體は皆信憑すべき物となるべし。復活其の物是れ即ち奇蹟中の最大奇蹟なるが故なり。且又**イエス**の聖職の神より出でしとも亦之に依りて證明せらる。何となれば「彼」を復活せしめたる者は神ならざるを得ざるが故なり。而して又歷史上に立てる正確なる視線は、明亮に來世の存在を認むるを得。

復活したる**キリスト**は、其の復活の眞實なることを以て其の弟子等の心を滿足せしむる間、猶ほ此の地球上に滯在したり。彼等は輙く信ぜざりしなり、使徒等は發初此の報道を齎し來りし婦人等を待つに、侮蔑的不信を以てしたり。使徒等の概して信ずるに至りし後にも、獨り**トマス**は此等使徒の見證を疑ひぬ。**イエス**が**ガリラヤ**の山にて五百の弟子群に顯はれしとき、其の目を疑ひ、僅に**イエス**の聲を聞いて信ぜし者も亦許多なりき。**イエス**が此等の危疑者を待ちし所の慈愛的忍容は、其の顯現せる身體の、幾分か生前に異なる者ありしにも拘らず、其の心情は分毫も相異なるなきを示すに足れりき、此の一事は其の榮化したる身體を以て顯はれし場所に於て、毎に切實に示されたり。此等の場所は昔日「彼」が屢往いて或は祈り、或は語り、或は勞し、或は苦みし所にして、之を擧ぐれば**ガリラヤ**の山、**ガリラヤ**の海、橄欖の山、**ベタニヤ**の村及び殊に**エルサレム**の市なりき、此の市は「彼」を殺したる者なるに、「彼」は猶ほ之を愛して已む能はざりしなり。

然れども茲に「彼」が既や此の世の屬ならずと云ふ多樣の特徵之ありき。第一に「彼」の復活せる人身に附ける新奇なる謹愼ありて、**マグダラ**の**マリア**が跪いて其の足に接吻せんとせしときに、「彼」は**マリア**の己に觸るゝを禁めたり。第二に「彼」は神秘的迅速

を以て其の弟子間に顯はれ、亦遽然として其の中より消えたり。第三に「彼」は其の弟子の伴侶たること唯隨時的にして、復た前日の不斷的親交を許さゞりき。然かして竟に四十日の終に於て、「彼」が地上に滯在したりし目的十分遂成せられ、使徒等が段に歡喜滿足の力を得て「彼」の生涯と其の事業の福音を、萬國の民に傳へんと決意せしとき、「彼」の榮化せし人身は、其の當然歸るべき天の所に接けられ了りぬ。

結論

蓋し人一たび人間世界に顯はるゝや、其の身は其の表面より消ゆるあるも、其の生命は決して此の世界に對つて消ゆることなし。其の生命は必ずや人類の發展的生命の大潮に加入して、其の全力を竭くして永久に活動するものとす。是故に人物の眞容量は、唯其の死後に活動する所の感化力に依りてのみ測量せらる。イエスに於ても亦然かり、四福音書の平凡なる記述は、イエスの生命の終を告ぐるに當りて、何等造化力の之より勃興すべき期待を吾人に與へざりき。近世の世界に波及せる所の「彼」の感化は、實に「彼」の如何に偉大なりしかを證せり。何となれば其の結果の偉大なるが如く、其の原因も亦偉大ならざるを得ざればなり。「彼」の感化力は人世の始終を覆ひ、之をして精神的青春の陽氣を以て華かしむ、恰も大陸の中央を灌流する江河の、丘山より降る百川を吸集するが如く、「彼」の感化力は有らゆる感化力を吸集して己に併せぬ。其の品質に至つては、又其の分量の特異なるよりも數等特異なるを見る。

然れども「彼」は抑も何人なりやと云ふことを示す最も貴重なる證據は、近世の歷史に具在せるに非ず、教會の通史に發見すべきに非ず、獨り基督時代を通じて繼續し來り、其の手を延べて「彼」の衣に觸るゝ所の眞正の信者の中に見るを得べきのみ。「彼」に由りて自己の罪、此の世の罪より救ひ出されたる、無數靈魂の實驗は、人類の連鎖に屬せざりし此の一大改革者、人類の資源より生れざりし此の聖者、此の完全なる模範此の萬人の中なる眞人の顯はれたる事に因りて、此の世界の歷史の前後に兩斷せられたることを確證するに非ずや。一面には此の神の子の高潔なる聖德を感じ、一面には自

個の劣惡なる罪性を自覺しながらも、尙且「彼」の聖潔なる生涯の最終目的は、神と人とを和解せしむるに在ることを見て喜び得る所の無數良心の實驗は、此の歷史の中間に於て、罪惡なる人類と至聖なる神と調和すべき途の開かれたることを證せるに非ずや。

キリストの言に其の目を潔められて、一點の暗處なき光なりける神を見ることを得たる無數人心の實驗は、世界に於ける實在者の此の最終の默示は、己の神たることを十分に知悉したる**キリスト**に由りて宣べられしことを證するに非ずや。

キリストの生命は歷史に於て消ゆるとなし。「彼」の感化力は時代と與に愈〻加はり、衰亡せる國民は之に感じて復活せんことを待望し、新に此の新天新地に入りし民種は之に觸れて更生せんことを熱望す。近世史上の有らゆる發見、人類に於いて愈〻向上發達する所の正義の觀念、慈愛、美妙の感情は、皆唯「彼」を解釋する資料たるに過ぎざるのみ。人類の目的は他なし、此の生命を昂進して、「彼」の思想と人格の平準に到達せしむる是のみ。

基督傳　終

5322

明治四十二年十二月十五日印刷
同　年十二月十八日發行

不許複製

翻譯者　東京府下瀧ノ川村字中里二六二番地　宮崎八百吉
發行者　東京市赤坂區氷川町五番地　ジョージ、ブレスウェート
印刷者　東京市京橋區弓町二十四番地　高塚慶次
印刷所　東京市京橋區弓町二十四番地　三協印刷株式會社

發賣元　東京市麴町區有樂町二丁目三番地　基督教書類會社
振替貯金口座東京二二七三番

◉耶蘇基督傳

ストーカー博士著

（英文）

定價 七十五錢
郵稅 八錢

本書は宮崎氏が飜譯せられたる基督傳の原書にしてニアンデルフ
アーラー ゲーキー諸大家の基督傳を凌いで優に一地歩を占め此
の種の著書中の白眉と稱せらる譯書同樣愛讀を希ふ

◉舊約釋義

イーデルシヤイム博士著
ハインド教師譯

上卷 定價 九十錢 郵稅 八錢
中卷 同 一圓八十錢 同 十二錢
下卷 同 一圓五十錢 同 十二錢

猶太の歷史、文學、禮式、習慣等に精通せると著者博士の如きは神
學者中稀に見る所なり況んや本書は博士が最も得意とする所の研
究にして考證該博、議論穩健、苟も舊約聖書を學ばんと欲する士の
必ず一本を其の机上に備へざるべからざる良書なり

◉比喩釋義

トレンチ大監督著
ハインド教師譯

定價 一圓 郵稅 十二錢

◉奇跡釋義

定價 一圓 郵稅 十二錢

基督傳を研究する者にしてキリストの語り給へる比喩、行し給へ
る奇跡に就て明快なる說明を得んと欲せば須らく此の兩書を繙く
に若かず其の說明や親切懇到何人も首肯し得て餘奧なし

◉聖書研究の快樂

ムーデー氏著
三浦徹君譯

上製 定價 四十五錢 郵稅 六錢
並製 同 三十五錢 同 六錢

如何にして聖書を研究せば最も愉快に最も趣味深かるべき乎本書
は其方法を明示したる者なり讀者之に依て研究せば不知不識聖書
に通曉するに至り其快樂と利益や蓋し言ふべからざるものあらん

◉聖句便覽

定價 七十五錢
郵稅 八錢

本書はムーデー氏が「聖書研究の快樂」中に研究者必携の書として
推薦したる者にして數百の題目に就て一々聖書の出典を示し更に
數千の細目に涉り一々聖句を引照したれば說教者、日曜學校教師
は勿論一般聖書研究者が聖句を搜索するに最良の指南車なり

5322

天路歷程

バンヤン著
池亨吉君譯

正編 並製三十錢 郵税各八錢
同 上製五十五錢
續編 並製四十五錢 郵税各八錢
上製六十錢
合本 上製一圓廿五錢 郵税各十二錢
特製一圓六十錢

基督教新聞評

原書は歐米に於て第二の聖書として珍重せられ天下に比ひなき珍書として愛讀せられて居るところの實用的聖書とも云ふべき書物で年中幾度繰返して讀むとも常に新しき味ひがあり又靈の糧を得ることができる斯る偉大なる書物が邦語に譯せられたのは誠に嬉しい殊に譯文は流麗で雅で平易である未だ本書を繙きしことなき人は是非一本を求めて讀まれんことをお勸め申す云々

發賣元

東京市麴町區有樂町二丁目三番地
基督教書類會社
振替貯金口座東京二二七三番

目錄は本書廣告にて見たる旨を附記して御申越次第呈送致候